

山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

『うつほ物語』の女性像に関する研究

令和7年

黄 睿琦

目 次

総合凡例.....	III
序 章 『うつほ物語』の女性像に関する研究の可能性.....	1
1、本稿の対象と目的.....	2
2、『うつほ物語』に関する先行研究、及び本稿の方法.....	4
3、本稿の構成.....	6
第一章 琴曲に巻き込まれる朱雀帝.....	9
—「私の后」を端緒に—	
1、問題の所在と先行研究.....	10
2、「后」としての俊蔭女.....	12
3、「私の后」という表現の持つイメージ.....	14
4、「胡笳の手ども」が切り拓く伝承物語の時空.....	16
結論.....	19
第二章 「内侍のかみ」巻におけるあて宮の人間化.....	21
—「高麗」が切り拓く異世界を発端として—	
1、問題提起と先行研究.....	22
2、社会的な役割から解放される契機—高麗（独楽）.....	24
3、歌ことばによって解放された恋愛感情.....	27
4、夫である東宮に対して芽生えた不満.....	29
結論.....	32
第三章 昔に引きこもる女一の宮.....	34
—古歌「むかしを今に」の引用による時間の遡行—	
1、問題提起と先行研究.....	35
2、女一の宮と仲忠の結婚の位置づけ.....	36
3、「昔」に執着する女一の宮.....	37
4、「昔」を繰り返す願望——「むかしを今に」.....	40
5、理想化された「昔」の再現：管絃の遊び.....	42
結論.....	44

第四章 立坊争いにおける藤原氏の敗北.....	45
—「盗人」に見られる後の宮の嫉妬心を手掛かりに—	
1、問題提起と先行研究.....	46
2、後の宮の画策と男君の非協力.....	47
3、「盗人」に見られる仁寿殿女御への嫉妬心.....	50
4、「女」をめぐる対立する藤原氏一族.....	52
結論.....	54
第五章 『うつほ物語』における擬似的な「はらから」考.....	56
—女性間の問題を中心に—	
1、問題の所在と先行研究.....	57
1. 1 問題の所在.....	57
1. 2 「はらから」に関する先行研究の状況.....	58
1. 3 異性間の「はらから」と本稿の視点.....	58
2、宰相の上と「はらから」の関係を築く俊蔭女.....	60
3、「はらから」と「仇」になる女三の宮.....	63
結論.....	65
終章 『うつほ物語』の女性像に関する研究の意義と可能性.....	66
1、女性像に着目する意義.....	67
2、表現によって登場人物の個人的な内面を見出す可能性.....	69
参考文献一覧.....	71

総合凡例

1. 『うつほ物語』のテキストは新編日本古典文学全集 14～16（小学館、1999～2002年）により、巻名、頁数を記した。
2. 『うつほ物語』以外の作品については、原則として新編日本古典文学全集（小学館）の本文を用いた。
3. 引用した本文には、適宜、登場人物名等が括弧内に補ってある。また、必要に応じて傍線や記号等を附した。
4. あて宮は東宮入内前と入内後で呼称が変わる（あて宮→藤壺）が、ここでは「あて宮」という呼称で統一する。

序 章

『うつほ物語』の女性像に関する研究の可能性

1、本稿の対象と目的

本稿が対象とするのは、平安中期に成立したと考えられる日本初の長編物語『うつほ物語』である。『うつほ物語』は「宇津保物語」とも表記されていたが、変体仮名の漢字を用いたもので、題意からは「うつほ（ウツオ）」がよい。というのは、主人公の仲忠母子が人目を避けて熊から譲り受けた杉のうつほに移り、生活を始めるが、このうつほも物語全体の名称の由来となる。作者は不詳であるが、複数の人の手によって記され、中心的書き手は源順という説が有力である。この全20巻にわたる物語は、主人公仲忠を中心に音楽伝承をテーマに展開している¹。

『うつほ物語』の全体の内容と構成については諸説あるが、本稿では、「俊蔭」巻から「沖つ白波」巻までを前半部、「蔵開・上」巻から「楼の上・下」巻までを後半部として、この物語を二部に分けて捉えている²。前半部では琴の一族の秘琴伝授とあて宮の求婚談を主軸とした話が繰り広げられる。漢才に優れていた清原俊蔭は遣唐使として派遣される。渡航中に暴風に襲われ遭難し、波斯国へと漂着した。そこで俊蔭は阿修羅と七人の仙人に出会い、数々の大曲と秘琴を授けられて帰国する。琴を娘に伝授した後、俊蔭は亡くなり、零落した娘は藤原兼雅と出会い、仲忠という息子を儲ける。後に、兼雅との連絡が取れなくなった俊蔭女と仲忠は北山に移り住み、うつほで生活を始めた。やがて母子は兼雅と再会し、京の三条邸に迎えられ、仲忠は兼雅の息子として宮廷貴族の一員となる。同時期に、左大將源正頼の娘である絶世の美女あて宮が都人の憧れとされ、多くの求婚者が群がる。仲忠もその一人となる。しかし、あて宮は最終的に東宮に入内し、「藤壺」と呼ばれる妃となった。その後、俊蔭の娘は御前での秘琴の演奏により尚侍に昇任し、仲忠も朱雀帝の娘である女一の宮と結婚する。後半部では、藤原氏と源氏の間の立坊争い及び、琴の一族の繁栄の物語が中心に語られる。太政大臣源季明が病死し、あて宮は服喪のため退出する。藤原忠雅は太政大臣に、正頼は左大臣に、兼雅は右大臣に、仲忠は大納言に昇進する。後の宮は長兄忠雅・次兄兼雅を宮中に呼び寄せ、梨壺腹皇子を東宮に推挙することを企む。しかし、忠雅等がそれぞれ口実を作って後の宮に賛同しかねる意を表す。東宮と帝も後の宮に拒否の意を表す。その後、東宮が即位し、あて宮は藤壺女御となる。世間の人々は梨壺腹皇子の立坊を確信するが、帝の意向によりあて宮（藤壺）の勝利に終わる。一方、仲忠と女一の宮の間に娘（いぬ宮）が生まれる。仲忠が父の兼雅に他の妻妾たちを三条殿に引き取るよう提案し、俊蔭女もこれに賛成し、妻妾たちを救済する。仲忠が祖父俊蔭の荒廃した京極邸を修復し、そこで、豪華な楼を造る。楼の上で俊蔭女・仲忠・いぬ宮が一年間ほど籠り、いぬ宮に琴を伝授する。伝授終了の八月十五夜に、嵯峨・朱雀の両院をはじめ、上達部の貴族たちが揃って演奏を待ちわびる。秘琴の演奏により天変地異の奇瑞が起こり、人々は驚嘆する。

このような伝奇性と写実性を兼ね備えた『うつほ物語』は、『竹取物語』や『伊勢物語』といった

¹ 『うつほ物語』の概説については、以下の文献を参照した。「長編の出現—宇津保物語」（鈴木日出男・藤井貞和編『日本文芸史：表現の流れ』第二巻 古代Ⅱ、1986年、133—142頁）、江戸英雄・大井田晴彦・三上満「うつほ物語巻々論（梗概付）第一部～第三部」（『伊勢物語とうつほ物語 国文学解釈と教材の研究』、第43巻第2号、1998年2月、112—127頁）。

² 『うつほ物語』の構成に関する主流の見解は二部構成であり、本論文もこの分類法に従っている。他にも、「俊蔭」巻から「沖つ白波」巻までを第一部、「蔵開・上」巻から「国譲・下」巻までを第二部、さらに「楼の上」の上下二巻を第三部とする三部構成などの分類方法も存在する。

先行する物語作品を継承しつつ、『源氏物語』や『枕草子』など後期の女流文学に影響を及ぼし、文学史における重要な節目となっている。注目すべきは、『うつほ物語』が前期物語と同様に男性によって執筆された仮名物語であり、後世の女性による物語作品とはその性格が異なることである。例えば、『うつほ物語』には行事や祭り、宴会などの公的な出来事が詳細に描写されており、この点が留意される。多くの記録的な散文で構成される『うつほ物語』の文章スタイルについて、中野幸一氏は包括叙法として評価し、次のように述べている。

このような筆法は、日常的に公的な記録を書きなれた男性の筆を思わせるもので、その記録性は具注暦にその日の出来事を備忘的に記しとどめていく漢文日記に通底している。³

当然のことながら、男性作家が執筆し、男性主体の視点で展開されるがゆえに、『うつほ物語』は男性人物の描写に重点が置かれている。琴の一族の継承者である仲忠、摂関的な政治構造を築く源正頼、作者自身の自画像と評される貧学生藤英、滑稽かつ道化的な役割を果たす三奇人（上野の宮、三春高基、滋野真菅）といった男性キャラクターたちが個性的に描かれていることが挙げられる。しかし、一方で、この長編物語の中には重要な女性キャラクターも多数存在しており、物語の進行において欠かせない役割を果たしている。例えば、俊蔭女やあて宮などが挙げられる。俊蔭女は琴の秘技を伝承する担い手という役割を担い、あて宮は父正頼の摂関的な権力志向を象徴する存在という観点から重要である。この種の女性キャラクターの存在は、『うつほ物語』が男性中心の物語から女性視点への移行を示していると考えられる⁴。したがって、この観点から見ると、女性キャラクターの内面や感情の描写は後の女流文学ほど詳細ではないものの、物語の展開や構造において女性キャラクターが重要な役割を果たしている点で、画期的な作品と評価できよう。ゆえに、『うつほ物語』を女性の視点から考察することも可能であろう。

本稿では、『うつほ物語』における女性登場人物に焦点を当て、その人物造形を分析することを目的とする。その際、本稿で注目するのは、分析対象とする女性登場人物がいかなる集団に帰属しているかという点である。その帰属集団は、家であったり、氏族であったりするが、古代貴族社会において女性の存在はそういった帰属集団と不可分の関係にあると、通常は考えられている。本稿でも、まずはそういった帰属集団の中での女性の位置づけについて顧みることになる。但し、物語が実際に描く女性登場人物たちは、帰属集団を背景としつつも、そこに個としての内面を持つ人格として造形されている点にも留意したい。女性像を分析するにあたって、氏族・家族といった集団における制度的機能だけでなく、彼女たちの内面的な感情も読み解くことを目指している。具体的に

³ 中野幸一氏は、『うつほ物語』の文章について「物事のすべてを細大洩らさず記録することにより力強い印象や充足感を与える」包括叙法として評価している（『うつほ物語と源氏物語』、『伊勢物語とうつほ物語 国文学解釈と教材の研究』、第43巻第2号、1998年2月、69―71頁）。

⁴ 高橋亨氏は、『うつほ物語』を「男の物語から女の物語へ」の過渡期に誕生した作品として位置づけている。さらに、高橋氏は「俊蔭一族の『男―女―男―女』という天人の子孫の〈ひとり子〉の物語の系譜が、男社会に対する女の物語の主題的な時空を琴の音楽に響かせていることもまた、竹取物語を受けて源氏物語へと通じる物語史において重要な意味をもつ」（『うつほ物語の琴の追跡、音楽の物語』、『伊勢物語とうつほ物語 国文学解釈と教材の研究』、第43巻第2号、1998年2月、93―94頁）と論じている。

は、清原氏（琴の一族）出身の俊蔭女、源氏出身のあて宮、藤原氏出身の後の宮、皇統出身の女一の宮、没落氏族出身の宰相の上という五人の女性キャラクターの人物造形や物語における役割を探究する⁵。

2、『うつほ物語』に関する先行研究、及び本稿の方法

『うつほ物語』は、従来、様々な視点から論じられてきた。ここで、先行研究の状況をまずは概観しておくことにする。概観するにあたっては、原則として単行本などの書籍化された著書を対象とした⁶。

『うつほ物語』は巻の順序が乱れ、重複部分があり、全体として統一感を欠くため、近世から戦後にかけて、伝本・巻序・成立・作者・構想といった問題が分析されてきた。これらの研究は、物語の成立を明らかにしようとする共通の志向を持っている。したがって、この時期の『うつほ物語』の研究は、主に成立過程に焦点を当てていると言える。この種の研究としては、日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 平安朝物語Ⅱ』⁷や、中嶋尚著『平安中期物語文学研究』⁸などが挙げられる。『日本文学研究資料叢書 平安朝物語Ⅱ』という論集は、戦後に発足したうつほ物語研究会に属する研究者、笹淵友一や野口元大などによる成立過程研究や作者論などの論考を収録しつつ、この時期に盛んになった成立論の実態を把握するための不可欠な研究書である。『平安中期物語文学研究』の第二篇「うつほ物語論」では、「俊蔭」巻や「嵯峨院」巻などに関する物語の成立時期や人物、和歌の典拠について考証的研究が行われている。

1970年代後半からは、成立過程研究の衰退とともに、『うつほ物語』を一つの作品として全体の論理や構造を解説しようとするテキスト論が台頭してきた。この新しい地平を開いたのは、高橋亨氏と三田村雅子氏である。高橋氏は『うつほ物語』全体に貫かれる伝奇性と写実性を検討し⁹、三田村氏は「晴と褻の、聖と俗の、音楽の理想と日常性との対立的・二元的な論理間の揺れの中に長編化してきた」『うつほ物語』の独自性を指摘する¹⁰。両氏ともこの物語の表現構造を全体的に捉え、非日常的な祝祭性が物語全体に底流していることを論じている。

こうしたテキスト論を継承し発展させたのは室城秀之氏である。室城氏は、この物語の「俊蔭」および「藤原の君」という二つの巻に関する冒頭表現の問題を成立論の観点ではなく、テキスト論の視点から解説し、『うつほ物語』が俊蔭一族と正頼家という二つの〈家〉の王権獲得の物語である

⁵ 「琴の一族」という呼称は、俊蔭—俊蔭女—仲忠—いぬ宮という系譜を持つ俊蔭一族を指す。本稿で焦点を当てる他の氏族からなる一族とは異なり、俊蔭一族は『うつほ物語』において音楽の専門家として位置づけられている。

⁶ 『うつほ物語』の研究史の概要は、室城秀之氏と富澤萌未氏の著書の序章を参考にしてまとめた。「うつほ物語研究の現在の課題」（室城秀之『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月、9—19頁）、「先行研究と本書の目的」（富澤萌未『うつほ物語—子ども流離譚』、翰林書房、2021年3月、9—14頁）

⁷ 日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 平安朝物語Ⅱ』（有精堂、1979年5月）

⁸ 中嶋尚『平安中期物語文学研究』（笠間書院、1996年9月）

⁹ 高橋亨「宇津保物語—はじまりの世界の想像力」（『物語文芸の表現史』第二章神話から物語文芸へ、名古屋大学出版会、1988年10月、116—138頁）

¹⁰ 三田村雅子「宇津保物語の論理—祝祭の時間と日常の時間」（中古文学研究会編『論集中古文学2 初期物語文学の意識』、笠間書院、1979年5月、196頁）

と説き、物語の政治的論理を探っていく¹¹。その後、テキスト論の研究が進展し、大井田晴彦著『うつほ物語の世界』¹²や本宮洋幸著『うつほ物語の長編力』¹³などが見られる。大井田氏は、物語の表現およびそれを支える論理について多角的な視点から総合的に把握している。本宮氏は、表現論的に物語の長編化の方法を捉えつつ、その論理を明らかにした。

近年、『うつほ物語』の研究は一層多様化し、多角的な視点から物語世界が論じられるようになった。例えば、栗本賀世子氏は『うつほ物語』に登場する後妃の居住する宮殿に焦点を当て、史実上の人物や宮殿をモデルに、物語の独自性を考察している¹⁴。伊藤禎子氏は著書『「うつほ物語」と転倒させる快楽』において、従来の祝祭論を踏襲しつつ、日常の論理を転覆させようとするこの物語のカーニバル性（祝祭性）を深く掘り下げている¹⁵。勝亦志織著『平安朝文学における語りと書記—歌物語・うつほ物語・枕草子から—』は、物語中の会話文や書記行動がどのように物語の音楽性や世界観を構築するかを詳述している¹⁶。富澤萌未氏は、物語の周縁に位置する子供たちに着目し、周辺人物の動向を解析することで物語全体の論理を見出そうとしている¹⁷。

さて、本稿で焦点を当てる女性像の研究状況についてはどうであろうか。この物語を一つの作品として捉えるテキスト論が進展して以来、登場人物を論じる研究が多数生産された。男性キャラクターを主軸とする論考に加え、女性登場人物の造形を考察する研究もある。例えば、室城秀之氏、猪川優子氏、上杉香菜氏らの研究が挙げられる。室城秀之氏は求婚譚の主人公であるあて宮の変貌について、後宮での生活を通じてあて宮が国母としての政治的資質を備え、個性的に輝く様子を論じている¹⁸。猪川優子氏は、俊蔭女が弾琴によって尚侍に就任するという出来事の意義を、仲忠への女一の宮降嫁といぬ宮入内の二方向から論じている¹⁹。上杉香菜氏は、藤原氏の摂関政治の確立に尽力する後の宮の行動に注目し、摂関政治の体制を批判する本物語の主題を読み解いている²⁰。このように、本物語の女性像を論じた研究は他にも多くあり、それらの諸論については本稿の各章において問題提起の際に再度触れることとする。

注目すべきは、上記の研究があて宮や俊蔭女、後の宮などの女主人公を中心に、彼女たちの所属する一族の論理からその存在と行動を読み解くものである点である。つまり、これらの論を通じて、各氏族・家族といった帰属集団における女性登場人物に課された制度的な機能や彼女たちの公的な役割が明らかになってきた。しかし、そのような側面が強調されるあまりに、女性登場人物一人ひとりの個人的な側面については未だ十分に論じられていないとも言える。

¹¹ 室城秀之、前掲注6 著書。

¹² 大井田晴彦『うつほ物語の世界』（風間書房、2002年12月）

¹³ 本宮洋幸『うつほ物語の長編力』（新典社、2019年3月）

¹⁴ 栗本賀世子『平安朝物語の後宮空間—宇津保物語から源氏物語へ』（武蔵野書院、2014年4月）

¹⁵ 伊藤禎子『「うつほ物語」と転倒させる快楽』（森話社、2011年5月）

¹⁶ 勝亦志織『平安朝文学における語りと書記—歌物語・うつほ物語・枕草子から—』（武蔵野書院、2023年3月）

¹⁷ 富澤萌未、前掲注6 著書。

¹⁸ 室城秀之『「うつほ物語」におけるあて宮—「宮仕へ心行く」とは、何をか言ひけむ」〈宮中への流離〉』（『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月）

¹⁹ 猪川優子『「うつほ物語」俊蔭女の〈尚侍物語〉—仲忠への女一宮降嫁からいぬ宮入内へ』（『国語と国文学』、第80巻第7号、2003年7月）

²⁰ 上杉香菜『「うつほ物語」後の宮考—国母と摂関家—』（『広島大学国語教育会 国語教育研究』、第50号、2009年3月）

一般的に古代社会では、女性は氏族や家族といった集団の付属物と見なされ、それぞれの集団の政治的な関係構造の中で授受される対象であった。したがって、この背景を前提に物語の女性像を考察する際、女性登場人物が氏族・家族によって課された制度的な機能や、女性人物たちの家族意識（氏族・家族の繁栄のために尽力する自覚）に重きを置く傾向がある。確かに、『うつほ物語』のプロットにおいて、例えばあて宮の東宮入内、立坊争いに関する後の宮の策謀、そして仲忠への女の宮降嫁などの場面では、表面的に女性人物たちが所属氏族・家族によって与えられた価値観に基づいて行動し、彼女たちの社会的な役割を忠実に果たしている様子がうかがえる。しかし、その行動の背後には彼女たちの公的な役割に隠された一個人としての私的な思考や感情が潜在している。本稿では、登場人物にまつわる個々の表現を手掛かりに、その深層にある個人の私的な側面を読み解くことを試みる。具体的には、「私の后」（第一章）、「高麗」（第二章）、「昔」（第三章）、「盗人」（第四章）、「はらから」（第五章）、といった表現である。こういった表現を通して、そこに含まれている登場人物の個人としての私的な側面を読み取っていくのが本稿の立場であり、その特徴ともなるところである。つまり、本稿は様々な表現に焦点を当てているが、言語学の観点から『うつほ物語』を考察するのではなく、あくまでも歴史学や民俗学的な観点を補助線に用いつつ、『うつほ物語』という作品に描かれる人物の造形を、テキストに書かれた表現に依拠して分析するという文学的な捉え方で論を展開していく。

本稿の立場を再確認すれば、従来の先行論の多くが求婚譚や琴の一族の物語といった構造に関与する一要素として女性登場人物を位置づける傾向にあるのに対し、本稿では従来は見過ごされてきた女性の個としての内面や行動を氏族や家族といった集団との対比において捉えていくものとなる。特に、考察の過程で注目するのは女性登場人物にまつわる様々な表現であり、また、そういった表現を通して、そこに浮かび上がってくる人物の個人的な側面である。そして、女性登場人物の個としての内面や行動が、氏族や家族といった帰属集団との関係において葛藤を抱えてゆく様相について検討を加えることになる。つまり、本稿は表現構造と人物造形の分析を両輪として進められてゆくのである。具体的には、まず、女性の登場人物を出自（清原氏・源氏・藤原氏・皇統・没落氏族）によって分別する。次に、各氏族・家族をめぐる物語において女性登場人物に課された制度的な機能を分析する。そして、女性登場人物にまつわる様々な表現を手掛かりに、制度的な領域から逸脱したキャラクターの個人的な側面にも留意し、検討することになる。最後に、各氏族・家族をめぐる物語において、公と私の間で葛藤を抱える女性登場人物の造形の究明を契機として、それらを『うつほ物語』の構造として位置付けることになる。

3、本稿の構成

以上に見てきたような問題意識と研究方法に基づき、本稿を以下のように構成した。

第一章は琴の一族に属する俊蔭女の「私の后」という位置づけを考察するものである。「内侍のかみ」巻で、俊蔭女の琴の演奏「胡笳の手ども」に感動した朱雀帝が彼女を「私の后」として位置づける場面がある。先行研究では、俊蔭の遺言がかたちを変えて実現されるという観点、及び朱雀帝

の個人的な欲望が成就するという観点から論じられてきた。つまり、先行研究では、「私の后」という表現の意味を肯定的な側面から理解していると言える。しかし、本稿では、「私の后」という表現が契機となって、帝と後の離別を語る伝承等が引き込まれてくる点に注目する。具体的には、王昭君説話・楊貴妃故事・竹取物語などの引用である。これらの伝承が、いずれも「帝が后を手放す」という構造になっており、その構造が『うつほ物語』の文脈にも組み込まれてくることについて論じる。

第二章は「高麗」という表現を手掛かりに、源氏出身のあて宮の人間化を考察するものである。女主人公であるあて宮の人物造形については、従来、『竹取物語』のかぐや姫に重ねられていると指摘する傾向にあった。それゆえ、東宮への入内によってもたらされた彼女の変貌についても、「非-人間」から「人間」へと捉えてきた。しかし、従来指摘されているあて宮の変貌は政治的な論理におけるものであり、すなわち、彼女が父である正頼の構想する政治戦略を実践していくものとしてある。それゆえ、彼女が真の意味で人間的な変貌を遂げたとは言えないであろう。本稿では、「内侍のかみ」巻におけるあて宮と仲忠の会話中に含まれる「高麗」という表現に注目する。この表現をあて宮の人間化する契機として捉え、あて宮に女性的な恋愛感情を芽生えさせる機能を有することを検討することになる。

第三章は皇女である女一の宮の「昔」に対する執着と憧憬を考察するものである。女一の宮が父である朱雀帝の宣旨によって、仲忠に降嫁することになる。結婚後、彼女は「昔」の出来事に強い執着を示し、理想化された「昔」への復帰を志向している。先行研究では、女一の宮に課された皇女及び母親としての制度的及び社会的な機能を読み取る傾向にあった。対して、本稿は、一人の女性としての女一の宮の内面の感情を考察するものである。特に、昔に関する女一の宮の言辞には「むかしを今に」という『伊勢物語』の古歌の一節が引用される点に注目する。この古歌の引用を通して理想化された「昔」が今に復活する可能性を指摘し、結果として、後段の文脈において、女一の宮の憧憬する「昔」が管絃の遊びとして再現されることについて論じる。

第四章は「盗人」という表現を端緒に、藤原氏出身の後の宮の嫉妬心を考察するものである。「国譲」巻に描かれる藤原氏と源氏との間の立場をめぐる権力闘争において、政治的に優位な立場にあった藤原氏が、源氏に敗北する結果となる。従来、藤原氏敗北の原因をめぐる議論は、後の宮の政治論理に関わる公的な側面に焦点を当てて展開されてきた。対して、本稿では一人の女性としての後の宮の私的な側面に着目し、彼女の内面的感情が藤原氏の敗北を導く一因となった可能性を検討することになる。具体的には、まず、立場争いにおける後の宮の公の側面及び藤原氏の男君たちの私的な葛藤を確認する。次に、後の宮の発話に含まれる「盗人」という表現に焦点を当て、そこから一人の女性としての愛情的な嫉妬心を読み取る。最後に、「女」という私的な状況に焦点を当て、藤原氏一族が立場争いにおいて敗北する内因を明らかにしたいと考えている。

第五章は没落氏族出身の宰相の上が俊蔭女と擬似的な「はらから」の関係になっていることを考察するものである。「はらから」という表現は血縁者を意味するため、その位置づけを血縁関係にある兄弟姉妹と同様に捉えるべきであると言える。しかし、『うつほ物語』には非血縁者を「はらから」とする例が見られる。先行研究では、男性間の擬似的な「はらから」の関係に焦点が当てられてき

たが、本稿は女性間の問題を中心に、女性登場人物の「はらから」との関わり方に注目する。具体的には、まず、俊蔭女が宰相の上という零落した女性と擬似的な「はらから」の関係を築く行動を検討する。次に、俊蔭女と同様に兼雅の妻妾集団に属する女三の宮を比較対象として取り上げ、女三の宮においては「はらから」の関係にある姉妹が互いに敵対関係になっていく過程を考察する。この比較により、女性登場人物が人物関係を構築する際の相違を見出すことになる。

本稿では以上の五章において本論部分を展開する。

第一章 琴曲に巻き込まれる朱雀帝
—「私の後」を端緒に—

1、問題の所在と先行研究

『うつほ物語』は、清原俊蔭の孫である仲忠を主人公とする音楽伝承にまつわる伝奇物語である。物語の前半は、唐土から琴の秘技が伝来した物語（琴の一族の物語）と都人の憧れとなる美女のあて宮をめぐる求婚譚からなっている。後半はあて宮（藤壺女御）腹の皇子と兼雅女の梨壺女御腹の皇子との間における激しい立坊争いと、仲忠の娘であるいぬ宮への秘琴伝授が主題となっている。従来、「内侍のかみ」巻が『うつほ物語』の前半と後半のテーマの転換点となっていることについて、様々な角度から論じられてきた。本稿も先行研究に従い、「内侍のかみ」巻は前半部の軸となるあて宮求婚譚が収束を迎えた後、物語が長編化することで、新たな主題を生み出す重要な節目となる一巻であると考えている。特に、本稿は、俊蔭女が御前で秘琴を披露し、「胡笳の手ども」（内侍のかみ・252頁／260頁）を奏でた場面に着目し、その場面における朱雀帝と俊蔭女の間を捉え直してみるものである。

『うつほ物語』の「内侍のかみ」巻で、俊蔭女の琴の演奏「胡笳の手ども」に感動した朱雀帝が彼女を尚侍に任命したうえで、更に「私の后」として位置づける場面がある。この場面は、「内侍のかみ」巻のクライマックスとも言えるほど、祭りの雰囲気を一層盛り上げる重要なシーンである。また、朱雀帝が俊蔭女という一人の女性に対し、二つの位置づけをしようとしている場面ともなっている。実際にその場面を見てみよう。

（朱雀帝）「さて今宵の祿をばいかがすべき。涼、仲忠はさてあり、おもとにはみづからをやは得たまはぬ。中將の朝臣、紀伊国の祿には、娘をこそは得たれ」とて、御前なる日給の簡に、尚侍になすよし書かせたまひて、それが上にかくなむ。（内侍のかみ・256—257頁）

これは朱雀帝と俊蔭女の会話の場面であり、話者は朱雀帝である。これより前段の文脈では、朱雀帝と仲忠が賭け碁をする場面が展開し、そこでは仲忠が負けていた。勝った朱雀帝は弾琴を要求したが、仲忠はそれを断り、代わりに母の俊蔭女に琴を弾かせることにした。俊蔭女の奏でた琴の「胡笳の手ども」に感動した朱雀帝は、引用文にある通り、仲忠に娘の女一の宮を与え、俊蔭女には自分を与えようと述べる。そして、俊蔭女を女官最高位の尚侍に任じる。

『うつほ物語』に書かれた「尚侍」は、『源氏物語』における朧月夜のような后妃化された存在とは異なり、律令制の公的な女官¹となる。その職には、身分高い既婚者²が就任するのを通例として

¹ 『うつほ物語』に書かれた「尚侍」（俊蔭女）は、「壮年の既婚婦人であり、権勢家の妻室でもある」ことで、律令制下の制度的な役職と考えるのが妥当である。もちろん、天皇と親密な関係を持つ尚侍の特例（阿部古美奈や藤原薬子）も存在しており、先行論でもそれが指摘されている。以上を踏まえつつ、本稿では特に、律令制における尚侍の一般的な役割に注目した。尚侍の実態については、加納重文氏が「尚侍」（『平安文学の環境—後宮・俗信・地理—』、和泉書院、2008年5月、81—95頁）で詳しく紹介している。本稿では、加納氏の指摘を踏まえつつ、俊蔭女を「第Ⅰ期尚侍（律令制女官）」として位置づけて解釈している。

² 後藤祥子によれば、「綏子以前においては、尚侍は身分高い既婚者、もしくは未亡人のなるものであり、…中略…あるいは比較的高貴でない者が後宮諸司を経て晩年に任ぜられる榮譽の官であった」（「尚侍攷—朧月夜と玉鬘」、『源氏物語の史的空間』、東京大学出版会、1986年2月、70頁）という。

いた。したがって、この時点での朱雀帝は俊蔭女を後宮に后妃として入内させようとしていたわけではない、まずは考えるのが妥当である。しかし、引用した朱雀帝の発言の傍線の部分に着目すれば、帝は俊蔭女との関係を夫婦のようなものに擬して述べているとも読み取れる。勿論、祭りの晩³、和歌や音楽を楽しむ特別な時間を過ごして、互いに打ち解け、冗談めかした発言も許されるという状況を踏まえてみれば、帝と女官という関係を誇張して述べたものだとも言えよう。但し、そのような冗談めかした言説とはいえ、そこには俊蔭女と夫婦関係を結びたいという朱雀帝の意図が含まれていることは否認できまい。傍線部において夫婦に擬するかたちで俊蔭女との関係をかたどりながら、一方で、俊蔭女を「尚侍」という制度的な存在に組み込んでいく朱雀帝の発言には、ある種の矛盾が見られると考えられる。

すべて女官のことは、何ごとにも、御心のままにを。むかしよりかやうならましかば、今は国母と聞こえてましかし。わいても、仲忠の朝臣ばかりの親王なからましかし。よし、行く末までも、私の后に思はむかし。時々なほ参りたまへ。御息所は、願ひに従ひて、清涼殿をも譲りきこえむ。
(内侍のかみ・268 頁)

これは先の場面を踏まえ、朱雀帝が更に俊蔭女を「私の后」として位置づけようとしている場面である。ここでは朱雀帝は、昔からこのようなかたちで俊蔭女が出仕していたら、今頃は国母になり、仲忠のような優秀な親王も儲けていたであろうにと慨嘆したうえで、今後は、俊蔭女に清涼殿をも譲り、「私の后」と思うようにしようと述べる。ただし、朱雀帝が俊蔭女に施した「私の后」という位置づけもまた、矛盾を孕んだ表現だと言える。

「后」とは、帝と婚姻関係にある女性を指す呼称であり、したがって、その呼称には制度的な、つまりは、公的な語感が含まれている。だが、「私の」という語には帝の私的な部分、すなわち、一個人としての領域という語感が含まれており、したがって、そこには一人の男性としての欲望が投影されていると見てもよい。この「私の后」という表現では、「后」という語の持つ公的な語感、すなわち王権に関わる意識が「私の」という語の持つ私的な語感と結び付いたことで、王権の論理の中に一人の男性としての個人的な感情が混ざり込むことになっている。

ここに引用した二つの本文の叙述からは、朱雀帝が俊蔭女という一人の女性に対し、公的な面と私的な面からの二つの位置づけをしようとしていることが読み取れるということをまずは確認しておきたい。なお、「私の后」という表現について、先行研究では、琴の一族という観点や、朱雀帝の論理という観点から論じられてきた。琴の一族という観点では、室城秀之⁴及び高橋亨⁵によって、

³ 須見明代が1972年12月の物語研究会での発表(題目:「宇津保物語・初秋の巻について」)において、民俗学的視点から祭りの要素を『うつほ物語』に導入して以来、先行研究は「内侍のかみ」巻の非日常性を屢々指摘してきた。例えば、高橋亨は「初秋の巻に表現されている恋愛関係は、非日常的な〈色ごのみ〉の世界であった」と説く(『長編物語の構成力—宇津保物語「初秋」の位相』、『物語と絵の遠近法』、ペリかん社、1991年、320—326頁)。また、大井田晴彦は「物語の世界が非日常的な性格を帯びてきた」(『うつほ物語』の転換点—「内侍督」の親和力—、『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月、109頁)と述べている。

⁴ 室城秀之が「物語は、俊蔭女を帝の〈私の后〉とすることで、〈天の掟〉の存在を明らかにする」(「作者未詳 宇津保物語の〈俊蔭女〉—琴の家の巫女(古典の中の女・100人特集)」、『國文學：解釈と教材の研究』、學燈社、第27巻

俊蔭女が「私の后」とされることは「天の掟」という俊蔭の遺言が反則的に実現されると説く。これは、つまり、琴の一族が王権と結託することで繁栄するという見通しである。一方、朱雀帝の論理という観点では、朱雀帝の俊蔭女に対する愛情を読み取っていくことになる。伊勢光は、後嗣を生むためではなく、あくまでも精神的な交わりを求める朱雀帝の様子を読み取る⁶。また、猪川優子は、俊蔭女が擬似的な妻にされることで、二人の恋が成就に向かうと説いている⁷。山口一樹も、そこに愛情の深さや寵愛の重さを指摘している⁸。

このように先行研究はいずれも、「私の后」という表現に朱雀帝の愛情の発露を見出し、それを肯定的な文脈で捉えていると言える。しかし、本稿では、この朱雀帝の表現が、朱雀帝と俊蔭女の間を離反する方向に導いていくことを論じたい。

2、「后」としての俊蔭女

「私の后」という表現を考えるにあたって、まずは、「后」という存在について確認しておきたい。そもそも、帝にとって、后とは王権と密接な関係にある。この場合の王権とは、古代における統治システムを指す。この点に関して、民俗学者である折口信夫は女性の入内を王権論の立場から読み取っており、注目される。

甲の国の君主が、乙の国の神に仕へる高貴の処女と結婚して、乙の国の神の威力を、その巫女と共に奪ふ法で、…中略…其国は、自らにして、宮廷の属国となるのである。信仰を離れて考へると、さうして、召された人々は人質にとられた形になるのだ。⁹

折口信夫は、古代の日本では地方の勢力が必ずしも中央の朝廷に完全に服従したとは言えないことを踏まえ、天皇は支配する圏域の拡張のために、国造など地方豪族の近親者である女子と婚姻関係を結ぶ（采女貢進制度¹⁰）ことで、信仰的にも、政治的にも地方の勢力を中央の朝廷に服従させようとしたと説く。これは王権に関わる結婚の持つ機能的な側面だと言える。また、そのように考えた場合、王権における結婚とは、統治システムの一環としてあることが分かる。

もちろん、このような女の贈与による地方勢力の服属化の体制は、やがて律令制（官僚制的な中

第13号、1982年、47頁）とした。「天の掟」というのは、「娘は天道にまかせたてまつる。天の掟あらば、国母、女御ともなれ。掟なくば、山賤、民の子ともなれ（俊蔭・45頁）」であり、俊蔭の遺言である。

⁵ 高橋亨（前掲注3に同じ、320頁）は「（俊蔭の）予言は半ば実現した」とする。

⁶ 伊勢光『『うつほ物語』「内侍のかみ」巻における帝：「内侍のかみ」巻再考』（『学習院大学大学院日本語日本文学』、第9巻、2013年、14頁）

⁷ 猪川優子『『うつほ物語』俊蔭女の〈尚侍物語〉—仲忠への女—宮降嫁からいぬ宮入内へ』（『国語と国文学』、第80巻第7号、2003年7月、28—29頁）

⁸ 山口一樹『『うつほ物語』俊蔭女の尚侍就任と王昭君説話・長恨歌・竹取物語』（『東京大学国文学論集』、第14巻、2019年、47—48頁）

⁹ 『折口信夫全集』第16巻、中央公論社、1967年、254—255頁

¹⁰ 『日本史辞典』によれば、「五世紀後半頃から、国造などの有力地方豪族が、服属の意を示すために子女を貢上したのが（采女の）本来の姿」（岩波書店、1999年10月、112頁）とする。

中央集権国家としての制度)が整備されることで歴史の表面上からは消えてゆく。しかし、女を贈与財とするかたちで支配／被支配の関係が担保されるという発想(≡贅としての女¹¹)は、不可視の領域で駆動し続けると捉えておきたい。すなわち、帝の側から見れば、婚姻とは、単に恋愛感情を満たすものではなく、女の所属する共同体を自らの支配下に収めるための手段としてあることになる。帝にとって、婚姻は支配する圏域の拡張という意味を持つのである。一方、このような結婚においては、支配される側にもメリットが生じる。女を貢進する共同体の側にとって、婚姻は、王権との結びつきを強化すること、すなわち、領地の保全や権力との接近といった政治的な優位性を獲得する契機としてある。

さて、このような婚姻の構図を『うつほ物語』に当てはめてみたとき、朱雀帝と俊蔭女との結婚は、朱雀帝という王権と、俊蔭女を擁する琴の一族との関係を見ていくことにもなると言える。

①学士をかへて、琴の師を仕うまつれ。…中略…心に入れて残す手なく仕うまつらせたれば、納言の位たまはせむ。…中略…かくて、おほやけにもかなはず、官、位も辞して、三条の末、京極の大路に、広くおもしろき家を造りて、娘に琴を習はす。(俊蔭・43-44頁)

②心のらうらうしきこと、世に聞こえ高くて、帝、東宮、父に召す。娘にも御文たまへど、われも御返事聞こえず、娘にも御返しもせさせず。(俊蔭・45頁)

これは嵯峨院の時代において、俊蔭が流離の末に秘琴を習得し、帰国した後の話となる。本文①と②によれば、かつて、嵯峨院(帝)と朱雀帝(東宮)は俊蔭の琴の技量を手に入れるため、俊蔭女を入内させることも考えていた(②)。しかし、俊蔭は嵯峨院の横暴な要請(①)に嫌気がさし¹²、娘の入内を拒絶したことが分かる。この一連の出来事について、ここでは、嵯峨院と朱雀帝は、俊蔭女を入内させることで、俊蔭女の所属する共同体、すなわち琴の一族を間接的に支配下に置こうとしたと解釈しておきたい。そして、この王権側の目論見は、俊蔭によって反発され¹³、拒否されることになった。やがて時が経過し、朱雀帝の時代(内侍のかみ巻)になり、帝は、今度は懐柔する姿勢を取り、俊蔭女を公的な制度に組み込んでいくことで、宮廷による琴の一族の属領化を図ろうとする。もし、これが成功すれば、朱雀帝の王権の強化にもなると言えよう。

一方、琴の一族にとってはどうかであろうか。この朱雀帝の時代という局面では仲忠を主体として考えてみることになるが、日和見的な仲忠は、祖父の俊蔭のように王権に対して強く抵抗する様子

¹¹ 宮田登は「中央の王家に対し(采女を)〈贅〉として差し出すことで、国造は天皇家に対して服属の意を示していること(25-26頁)を認めつつ、上野千鶴子(同書)は「贅の中に必ず〈女〉という贈与があるんです。…中略…女というのは、土地、つまりその共同体が生んだ贈与の最たるものです(49頁)」(網野善彦・上野千鶴子・宮田登、『日本王権論』、春秋社、1988年)と補足している。

¹² 嵯峨院の発言「学士をかへて、琴の師を仕うまつれ。…中略…心に入れて残す手なく仕うまつらせたれば、納言の位たまはせむ。(俊蔭・43頁)」について、猪川優子は朱雀帝の琴の一族に対する「秘伝を守っていく家の立場を認め、尊重する」意志と、嵯峨院の「皇室第一の強引な姿勢」とは対照的である(『『うつほ物語』俊蔭の「忍辱」：琴の一族と皇室』、『国文学攷』、第170巻、2001年6月、25頁)とする。

¹³ 三田村雅子は「宇津保物語はどこまでも王権に反発する論理を繰り返している」(「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉——繰り返しの方法をめぐって——」、『東横国文学』、第15号、1983年、69頁)とする。

も見せず、逆に、王権に対して親和的な姿勢¹⁴が窺える。仲忠自身は、朱雀帝の弾琴の要求を断ったが、父の兼雅に隠れて¹⁵、母の俊蔭女をごまかして参内させ、帝の御前で琴を弾かせたのである。このような仲忠の姿勢は後段の文脈からもうかがえる。

仲忠の朝臣は、承り得る心ありて、水のほとり、草のわたりに歩いて、多くの蛸を捕らえて、朝服の袖に包みて持て参りて、…中略…さる薄物の御直衣にそこら包まれたれば、残るところなく見ゆる時に（後略）
（内侍のかみ・270 頁）

これは、俊蔭女の琴の演奏が終わった後、仲忠が蛸を見つけ出し、その光で俊蔭女の姿を朱雀帝に見せようとする場面である。朱雀帝の欲望を満たそうとする仲忠の行為をどう捉えるべきか。ここでは、母である俊蔭女を利用して朱雀王権に接近しようとする仲忠の戦略的な姿勢を読み取っておきたい。仲忠にとって母の俊蔭女を帝に献上することは、朱雀王権と接近し、その王権の下で政治的に優位な立場を築けるという利点がある。実際、俊蔭女の琴が演奏されたことで、仲忠は朱雀帝の皇女である女一の宮を得ることができた。

以上は、朱雀帝の公的な側面、すなわち、王権という観点から導き出されてくる構図であり、その構図における朱雀院の意向は、俊蔭女を差し出す仲忠の思惑とも適合するものとなる。この構図の原型には、女を贅とすることで成立する古代王権の論理がある。しかし、先に述べた通り、朱雀帝は私的な側面を見せてもいた。その私的な側面は、本節で見てきた公的な側面から導き出されてくる構図にどのような影響を及ぼすことになるのか。次節では、その朱雀帝の見せる私的な側面について検討を加えていく。

3、「私の後」という表現の持つイメージ

「私の後」という表現にある「私」という語に含まれている意味を明らかにするために、『うつほ物語』における「私」をめぐって用例調査を行った。紙幅の制限により、本稿では省略した。概観したところ、全部で三十九例のうち、熟語等の用例を除けば、「私」を修飾語として用いる例は二十一例となる。特に人に対する修飾語として用いる例については、本稿で問題とする「私の後」を除くと、次の三例のみが観察される。

- A. （兼雅）「そこにも、殊に思す人もなかめるを、私の人にしても、見え聞こえむずと思しやりて、心知らひたまへ」。
（蔵開下・593 頁）
- B. おとどは、この君をそ私物にてらうたくしたまへど。
（国譲下・277 頁）

¹⁴ 三田村雅子（前掲注 14 に同じ、59 頁）は「俊蔭の世間との交際を断つ凜然とした気概に比べて確かに仲忠の生活は微温的で日和見적であるように見える」とする。

¹⁵ 兼雅が妻である俊蔭女の参内と尚侍就任を知った文脈は、「大将のおとど、まかで、もの参りなどするほどに、わが妻と知り果てたまひぬ。大将、あやしく、そぞろにて参りけるかな、と思せど」（内侍のかみ・265 頁）となる。

C. (俊蔭女)「心憂くもわきまへたまへるかな。よくぞ私の物にしたまひてける。」

(楼の上 上・448 頁)

例Aは、藤原兼雅が妻の俊蔭女に対し、兼雅の妾である中の君を俊蔭女の個人的な友人として扱ってほしいと依頼する場面での用例である。例Bは、藤原忠雅が妻の六の君を大切に扱うという用例である。例Cは、仲忠が子どもたちを平等に扱わないため、母の俊蔭女に責められる際の用例で、仲忠には宮の君という男子もいるのに、女子のいぬ宮だけを「自分のもの」にしていると、俊蔭女が非難している。これらの用例から、「私」は個人的な愛情を表す表現としてあることが分かる。例Bの忠雅が妻の六の君に対して用いる例や例Cの仲忠が娘のいぬ宮に対して用いる例は、いずれも近親者に対して用いる例として捉えることができる。また、例Cは、仲忠の複数いる子供たち（宮の君、いぬ宮）の中でも、特に、いぬ宮に対して用いたものであり、仲忠の偏愛を表しているとも言える。

以上は臣下の立場にある者が用いる「私」の例となる。本稿で問題としている「私」の事例は朱雀帝が用いるものであり、この事例と同様に帝の立場にある者が用いる「私」の用例についても顧みる必要がある。『うつほ物語』の中には当該例以外に帝の例を見出せないため、平安時代に和文で書かれた他の作品における「私」の用例を参照しておくことにしよう。

D. 宣耀殿女御は、いみじうつくしげにおはしましければ、帝も、わが御私物にぞいみじう思ひきこえたまへりける。¹⁶

(『栄花物語』、①巻第一 月の宴、29 頁)

※村上天皇→后妃(宣耀殿女御)

E. 承香殿の女御ときこえて、私物に心苦しうおぼしとどめられたるすゑずゑにて。¹⁷

(『夜の寝覚』、巻一、21 頁)

※冷泉帝→后妃(承香殿女御)

F. 御才深う、心深うおはしますにつけても、上はあはれに人知れぬ私物に思ひきこえさせたまて。¹⁸

(『栄花物語』、①巻第八 はつはな、461 頁)

※一条天皇→皇子(敦康親王)

G. この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。¹⁹ (『源氏物語』、①桐壺、19 頁)

※桐壺帝→皇子(光源氏)

¹⁶ 『栄花物語』のテキストは、新編日本古典文学全集31～33(小学館、1999～2002年)により、巻名、頁数を記した。

¹⁷ 『夜の寝覚』のテキストは、新編日本古典文学全集28(小学館、1999～2002年)により、巻名、頁数を記した。

¹⁸ 前掲注16に同じ

¹⁹ 『源氏物語』のテキストは、新編日本古典文学全集20～25(小学館、1999～2002年)により、巻名、頁数を記した。

Dは、村上天皇が、後宮の後妃たちの中でも特に宣耀殿女御（藤原芳子）を寵愛しているという用例、Eは、冷泉帝には歴とした后がいながら、承香殿女御を格別に寵愛するという用例、Fは、定子所生の敦康親王を秘蔵子と思って可愛がっているという用例。一条天皇の皇子には他に彰子所生の敦成親王がおり、この親王は藤原道長という権力者を後見としていることから東宮になったが、対して敦康親王は立坊をあきらめざるを得なかった。Gは、桐壺帝が、公的な場では第一皇子を大切にしているが、心の中では光源氏を慈しんでいるという用例である。

以上、帝の立場にある者が用いる「私」の事例を確認すると、后妃（妻）を対象とする場合（DE）と皇子を対象とする場合（FG）とがあることに気づく。いずれも近親者に対しての用法となり、なおかつ、それらは特定の個人に対する「偏愛」を表す表現となっている。この事を踏まえると、朱雀帝が俊蔭女に対して「私」という言葉を用いていることについても、そこに個人的な偏愛の対象として俊蔭女を処遇しようとする朱雀帝の意図を読み取ることが可能となると考えられる。但し、後宮という妻妾集団を持つ帝が一人の女性を偏愛するという状況は、先に見てきた古代王権の論理からすると肯定的なものとは言えない。なぜなら、王にとって女は共同体を間接的に支配するための手段として機能しており、王権の拡張のためには、より多くの女を後宮に抱え、寵愛を通してその支配関係の維持に努める必要があるからである。そして、その寵愛の複数性こそが〈色好み〉として称賛されるものであった。

偏愛は、このような古代王権の論理に背反する行為となる。王の偏愛によって後宮の秩序に乱れが生じ、その秩序の乱れはそのまま王の統治の混乱へと波及するであろう。次節では、そのような偏愛の持つ負の側面が引用を通じて物語の文脈に引き込まれてくることを見ていく。

4、「胡笳の手ども」が切り拓く伝承物語の時空

再び「内侍のかみ」巻に戻り、俊蔭女と朱雀帝との会話を振り返ってみよう。俊蔭女の琴の演奏である「胡笳の手ども」は、「私の后」という表現を導き出すばかりでなく、実は、三つの伝承（王昭君説話・楊貴妃故事・竹取物語）を引き込む契機としても機能している。以下にその具体的な様子を見ていく。

（朱雀帝）「むかし唐土の帝の戦に負けたまひぬべかりける時、胡の国の人ありて、その戦を静めたりける寿、天皇喜びのきはまりなきによりて、『七の后の中に願ひ申さむを』と仰せられて、七人の后を絵に描かせたまひて、胡の国の人選ばせたまひける中に、すぐれたるかたちありける。そのうちに、天皇思ふこと盛りなりければ、その身の愛を頼みて、ここばくの国母、夫人の中に、われ一人こそはすぐれたる徳あれ、さりとともわれを武士に賜はむやはの頼みに、かたち描き並ぶる絵師に、六人の国母は千両の黄金を贈る。すぐれたる国母はおのが徳のあるを頼みて贈らざりければ、劣れる六人はいとよく描き落として、すぐれたる一人をばいよいよ描きまして、かの胡の国の武士に見するに、『この一人の国母を』と申す時に、天子は言変へず、といふものなれば、え否びず、この一人の国母を賜ふ（後略）」（内侍のかみ・253―254 頁）

これは、朱雀帝の会話の中に王昭君説話（胡の後の物語）が引用されてくる条である。その概要は次の通りである。

- ア. 唐土の戦において劣勢を救った胡の国の武士に感謝の意を表すべく、帝が七人の後のなかから一人を与えようと約束した。胡の国の武士は后たちの絵を見て候補者を選ぶことになる。
- イ. 后たちのうち、六人は画工に賄賂を贈り、醜く描いてもらった。しかし、天皇の一番寵愛する后だけが賄賂を贈らなかったため、一層美しく描かれた。
- ウ. 胡の国の武士はその美しく描かれた后を選ぶ。帝は「天子は言変へず」という原則により、やむなくこの后を下賜する。

ここに語られた説話の内容は、『西京雜記』に見えるような一般に流布する王昭君説話の内容とは異なるものになっている²⁰。但し、帝が后を胡の国に派遣すること、そして帝が後悔するも、決定は覆せず、帝と后は離別を余儀なくされるという展開に相違はない。このような帝と後の悲恋の物語が、「胡笳の手ども」を契機として引き込まれてきたのである。

さて、朱雀帝はこの時、王昭君説話だけでなく、更に他の伝承をも語っていく。次に掲げるのはその伝承の一つである。

（朱雀帝）「楊貴妃が、七月七日長生殿にて聞こえ契りければ、おもとには、今宵、仁寿殿にてを契り聞こえむ。さらに長生殿の長き人の契りに思ほし落とすな」。 （内侍のかみ・262 頁）

これは、琴曲に感動した朱雀帝が俊蔭女に対して発した言葉である。その発言中に「長生殿の長き人の契り」とあり、白居易の「長恨歌」の一節が引用されている。この一節は、原拠となる「長恨歌」では次のような文脈の中に置かれている。

七月七日長生殿 夜半無人私語時
在天願做比翼鳥 在地願為連理枝
天長地久有時尽 此恨綿々無盡期

詩句の意味を確認しておく、「七月七日のこと、長生殿で、二人は比翼の鳥となろう、連理の枝

²⁰ 上原作和は「琴曲『胡笳』と王昭君説話の複次的統合の方法について—『うつほ物語比較文学論断章（1）』—」の中で、『うつほ物語』本文の王昭君伝承は前半部を『西京雜記』『世説新語』等、散文から取材し、後半部は『文選』所収の「王明君詞並序」から派生した韻文、あるいは両者を摂取した琴曲からの取材と規定できよう（『光源氏物語の思想史の変貌—（琴）のゆくへ』、有精堂、1994 年、35 頁）とする。また、新編日本古典文学全集の頭注において、朱雀帝が語る王昭君説話と『西京雜記』所載の話との相違点について、『西京雜記』では、①七人に限定しない、②元帝が匈奴に差し出す宮女を決定する、③王昭君は後宮に入ったものの、帝からのお召しはただの一度もなかった、④王昭君は醜く描かれた、⑤元帝は王昭君の出発直前にその美貌を知って後悔した（内侍のかみ・253—254 頁）と記している。

となろうと誓い合ったのであった。天地はいつまでも変わらないが、いつかは尽きる時がある。その時が来ようとて、二人の恨みは綿々と、尽き果てる時はないだろう」²¹となる。つまり、朱雀帝はこの詩を引用することで、俊蔭女と比翼連理のような夫婦関係を未来永劫にわたって結ぼうと約束したわけである。なお、「長恨歌」には、他にも「三千寵愛在一身」（三千の寵愛一身に在り）という詩句もあり、そこに漢皇（玄宗皇帝）の楊家の女（楊貴妃）に対する深い愛情を読み取ることができる。しかし、「長恨歌」に描かれる帝と妃の物語は、離別に帰着するという点を看過してはならない。

六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死
君王掩面救不得 迴看血淚相和流

これは「長恨歌」が描く帝と妃の物語の結末である。漢皇（玄宗皇帝）の寵遇を深く受けた楊家の女（楊貴妃）であったが、最後は、皇帝の馬前で殺されてしまう。皇帝は助けようにも助けることができず、血の涙を流すほど悲しんだとある。「長恨歌」に描かれた帝と妃の運命は、妃の死によって永遠の離別を迎える。つまり、この楊貴妃故事もまた、先に見た王昭君説話と同様、帝と妃の悲恋譚という構造を内包しているのである。

ここで、朱雀帝の会話文中に見られる三つ目の伝承についても注目してみることにしよう。

上、「十五夜に必ず御迎へをせむ。この調べを、かかることの違はぬほどに、必ず十五夜に、と思ほしたれ」。尚侍、「それは、かぐや姫こそ候ふべかなれ」。上、「ここには、玉の枝贈りて候はむかし」。
(内侍のかみ・269 頁)

これは、朱雀帝と俊蔭女の対話文である。俊蔭女の琴の演奏に飽き足らない朱雀帝は、彼女と十五夜の再会と、今夜と同じ琴の調べ（胡笳の手ども）の演奏を約束するよう、俊蔭女に要請する。だが、俊蔭女は、かぐや姫がその日は仕えるべきだろうと託け、帝の要請を辞退しようとする。彼女の発言を受けて、朱雀帝は当意即妙に自身のことをかぐや姫の求婚者である車持皇子に擬え、俊蔭女をかぐや姫の位置に据え直していく。

俊蔭女の発言に見える「かぐや姫」は『竹取物語』の女主人公である。『竹取物語』では、そのかぐや姫をめぐる求婚譚が展開され、五人の求婚者が現れ、次々に失態を晒して求婚者候補から脱落していく。そして、最後に現れるのが帝である。しかし、八月十五夜に、かぐや姫は月の都へと帰ってゆき、ついにかぐや姫は誰とも結ばれることなく、物語から退場する。引用した対話の場面で朱雀帝の発言に「十五夜」とあるが、その一言がきっかけとなって、以上の『竹取物語』の文脈が引き込まれることになっている。この物語もやはり、帝と愛する女性との離別を構造として内包していると言えよう。

²¹ 口語訳は『源氏物語』巻①の解説（小学館、1999～2002 年、432 頁）を参照した。

以上、俊蔭女の琴の演奏である「胡笳の手ども」が契機となって、三つの伝承（王昭君説話・楊貴妃故事・竹取物語）が物語の中に引き込まれてくる様子を見てきた。この三つの伝承は、いずれも帝と后（妃・愛する女性）の別離という構造を内包している点で共通している。「内侍のかみ」巻の文脈では、俊蔭女に一人の男性としての個人的な愛情を伝えようとする朱雀帝であったが、その会話の過程で引用された伝承はいずれも別離の文脈を構造として持っており、朱雀帝はその別離の文脈に構造化されるかたちで俊蔭女を手放すことになっていると言えよう。

結論

朱雀帝は、俊蔭女を尚侍に任ずることで、彼女を公的な制度に取り込もうとする。それは天皇としてある朱雀帝の権力の行使と言える。しかし、朱雀帝は終始権力の行使者としてあるわけではない。俊蔭女を単なる女官としてではなく、「私の后」として取り込もうとしてゆく。本稿では、そこに朱雀帝の一人の男性としての私的な欲望を読み取った。その欲望とは、俊蔭女と愛情を交換し、結婚を成立させようとするにほかならない。

本来、「后」とは、帝と婚姻関係にある女性を指す呼称であり、したがって、その呼称には制度的な、つまりは、公的な語感が含まれていると言える。言い換えれば、女性を「后」として後宮に入れることは、帝にとって恋愛感情を満たすというよりも、女性の所属する共同体を間接的に自らの支配下に置くための手段だと言える。したがって、数多くの女性を分け隔てなく遇することが、帝の支配力を維持するための戦略となると言ってもよい。そのことを踏まえて『うつほ物語』の世界を顧みした場合、朱雀帝にとって俊蔭女を「后」にすることは、琴の一族の属領化を図るための手段であり、その結果、朱雀帝の王権を強化することにもなる。

但し、俊蔭女は単なる「后」ではなく、「私の后」として処遇されようとしている点には留意しておきたい。平安時代の和文作品における「私」の用例を参照すれば、それは特定の個人に対する「偏愛」を表す表現としてあることが確認できる。この事を踏まえると、俊蔭女を個人的な偏愛の対象として処遇しようとする朱雀帝の意向がうかがえてくる。しかし、後宮という妻妾集団を持つ帝が一人の女性を偏愛した場合、それぞれの女性たちの背後にある帰属集団を巻き込むかたちで政治的情勢が不穏となり、悲劇が起こることも予想される。

そもそも、「私の后」という表現を導き出すことになったきっかけは、俊蔭女の琴の演奏である「胡笳の手ども」であった。その「胡笳」からの連想で「胡の国」にまつわる伝承が物語の中に引き込まれてくる。その伝承とは、王昭君説話である。この王昭君説話をはじめとして、朱雀帝の会話文中には、楊貴妃故事、竹取物語が次々に引用されてくる。これら三つの伝承に共通して見られる構造として、本稿では、「帝と后（妃・愛する女性）との離別」という物語を読み取った。

高橋亨は、俊蔭女の尚侍就任について、「朱雀帝の私的な欲望の達成、あるいは現実的な王権からの要請というよりも、むしろ俊蔭系の物語の論理に基づいていることが重要である。〈琴〉の幻想の

力に、けっきょく帝がからめとられている」²²と述べている。従うべき見解であろう。『うつほ物語』の朱雀帝は、自分の意図する通りに事態を動かすことのできない権力者として描かれていると言える。その在りようを本稿では「私の后」という表現を手掛かりにして読み解いた。朱雀帝は、俊蔭女に対して抱いた個人的な愛情を訴えようとするものの、そこに引き込まれた伝承の構造に組み込まれ、俊蔭女とは結ばれない方向へと導かれていくことになるのである。

²² 前掲注3における高橋亨（1991、326頁）に同じ。

第二章 「内侍のかみ」巻におけるあて宮の人間化

―「高麗」が切り拓く異世界を発端として―

1、問題提起と先行研究

長編物語作品である『うつほ物語』は、「俊蔭」巻と「藤原の君」巻という二つの発端の巻を持つことで、従来、「天人から伝授された琴の秘技によって栄える俊蔭家の物語」と、「あて宮をめぐる求婚譚や東宮入内という王権を獲得する正頼家の物語」という二つの系統に分けられると指摘されている¹。こういった『うつほ物語』の二つの主題のもとで、あて宮は、俊蔭の孫である男主人公の仲忠と並列して、女主人公として重要な役割を果たしている。あて宮の人生の歩みから物語の筋を確認した場合、次のようになる。幼少の頃より、あて宮は「変化のもの」「天女の下りて生みたまへるなり」（藤原の君・133頁）と噂される絶世の美貌によって、名が知れわたっている。その為、数え切れない求婚者が群がる。結局、彼女は父親である正頼の意志に従い、東宮に入内して「藤壺」と呼ばれる妃となった。これにより、仲忠をはじめとする多くの求婚者たちを落胆させたのである。後に、東宮（今上帝）の寵愛を一身に集める藤壺は、立坊争い（藤壺腹の第一皇子と兼雅の娘梨壺腹の第三皇子の立坊をめぐる争い）において、第一皇子を次期の坊に据えるために、参内拒否によって東宮（今上帝）に圧力をかける一方で、実忠の中納言昇進にも配慮し、正頼家の権力獲得のために政治力を発揮している。最終的には、世間の人々は梨壺腹皇子の立坊を確信するが、東宮の寵愛によって、藤壺は勝利を収めた。

あて宮は、物語の展開に重要な役割を担うため、従来、様々な角度から論じられてきた。特に、あて宮の人物造形については、「求婚譚」「変化のもの」「天女」といった要素によって、『竹取物語』のかぐや姫に重ねられる傾向にあった²。したがって、その部分のあて宮は、かぐや姫の「天人」或いは「変化のもの」という性格を構造として帯びることとなり、非・人間的な位相に据えられると解されている。しかし、そのようなあて宮は、東宮への入内によって、求婚譚の構造から離脱することになる。

従来、あて宮の変貌については、東宮への入内によって、あて宮がかぐや姫の造型から分離し、政治（後宮政策）の論理に組み込まれるようになるという方向から論議されてきた。例えば、須見明代は、あて宮が『竹取物語』の求婚譚を担い、「地上的論理に従って愛と権力の問題、すなわち求婚譚から政治抗争までに発展していった」と指摘する³。また、室城秀之は、あて宮の個性について、「あて宮は、天に帰って行ったかぐや姫とは異なり、流離ともいうべき宮中での生活のなかで、確実に変貌している。物語前半の求婚譚を通して、ほとんど個性的に描かれることのなかったあて宮が、個性的に輝いている」とする⁴。更に、大井田晴彦は、あて宮の変貌を「人間化」として位置づ

¹ 室城秀之は、『うつほ物語』の主題と構想について、「琴の秘伝伝承の物語は、俊蔭一族の王権獲得の物語として一方の軸となっており、また、あて宮への求婚をめぐる物語は正頼家の王権獲得の物語として、前半の求婚譚のみならず、後半の立坊争いまで、一貫してい一方の軸となっている」（『序章 うつほ物語研究の現在の課題』『うつほ物語の表現と論理』若草書房、1996年12月、16頁）と述べている。また、高橋亨は、「宇津保物語では、竹取物語の話型の複合が、俊蔭系と藤原君系という、二系列の物語として現象している」（『長編物語の構力—宇津保物語「初秋」の位相』『物語と絵の遠近法』ペリカン社、1991年9月、310頁）としている。

² 関根賢司は、あて宮は「かぐや姫の正系、その血筋正しい姪である」（『かぐや姫とその裔（特集）平安前期物語』『日本文学』、第23巻第6号、1974年、20頁）と説く。

³ 須見明代『宇津保物語』における俊蔭女（『東京女子大学 日本文学』、第39号、1973年、29頁）

⁴ つまり、室城秀之は、あて宮が将来の国母としての資質を発揮する（政治的な駆け引きをする）ことを彼女の個性

け、「藤壺がかつての冷たい人形のような造型から脱却し、血の通った人間へと変貌している」とし、「国母たるにふさわしい人間性と威厳を備えて来た」と説く⁵。なお、湯浅幸代は、この位置づけを踏襲し、国母たるべき素質を表しているあて宮は、「人間化した『かぐや姫』のごとき情愛が窺える」とする⁶。つまり、先行研究では、東宮への入内によってもたらされた彼女の変貌については、「天人（かぐや姫）」から「東宮妃（未来の母后）」への変貌として捉えられてきたのである。この変貌はまた、「人形」（非・人間）から「人間」へと解されてもいる。

ただし、こういった先行研究における「人間化」するあて宮という把握は、あて宮が個性や人間性を持つ人物へと変貌したという意味ではない点に注意しておきたい。結婚し、出産するという経験は、確かにかぐや姫（天人）とは異なり、人間的であると言える。ところが、入内し、東宮妃から母后（未来の国母）へという道筋は、父正頼の構想する政治戦略を実践していくものとしてある。それは、あて宮が自ら望んだ人生とは言えないと考えられる。したがって、あて宮の場合、それらのプロセスは政治戦略の構造に組み込まれたものとして機能していると言える。そのように考えた場合、求婚譚の折から始終、父である正頼の後宮政策の持ち駒として利用されていたあて宮は、まだ人形のような状態に置かれている。したがって、そのようなあて宮は、真の意味で「人間化」したとは言えない。

以上のような見取り図のもとに、本稿は視点を変え、立坊争いをめぐる「国譲」巻にこだわることなく、あて宮の人間化してゆく契機を「内侍のかみ」巻の言語状況（ことばの祭り⁷）中に見出せることを論じたい。「内侍のかみ」巻において、祭りの雰囲気と非日常的な要素が色濃く描かれている中で、複数の対話場面が記述されている。会話文は、物語の進行やキャラクターの発展だけでなく、祝祭の時空を形作る役割を果たす要素であり⁸、その中には発話者の表面的な意味と内面的な意味という二重性が含まれている⁹。この事を踏まえ、本稿では「高麗」をめぐるあて宮と仲忠のやり取りに着目する。具体的には、「高麗」という表現が切り拓く異国（言説上の異世界）において、あて宮が、東宮妃という社会的な身分秩序から解放されていくこと。その際、彼女が一人の女性として仲忠と恋歌を交わし、精神的な恋愛ゲームを楽しむこと。その後、あて宮が恋愛感情というものを持ち始め、徐々に夫である東宮に対して、男性としての不満や不適切さを感じ始め、より人間的な存在として成長していくこと、などについて論じる。

が表出する過程と捉えている（『うつほ物語』におけるあて宮―『宮仕へ心行く』とは、何をか言ひけむ』〈宮中への流離〉、『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月、247頁）。

⁵ 大井田晴彦『うつほ物語』国譲巻の主題と方法―仲忠を軸として（『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月、165頁）

⁶ 湯浅幸代は、実忠の家庭再建や中納言昇進に対するあて宮の配慮に注目し、あて宮の「情愛」を彼女が世の中の物事と人情を理解する能力として解釈している（『うつほ物語』国譲巻に見る氏族の論理：「かぐや姫」の見定める「心ざし」と『九条右丞相遺誡』の「一心同志」から（『日本文学』、第66巻第2号、2017年2月、9頁）。

⁷ 「ことばの祭り」は、高橋亨の論文（前掲注1に同じ）における表現を参照し、引用したものである。以下、同様。

⁸ 『うつほ物語』における会話文の先行研究については、勝亦志織の『うつほ物語』における音楽性とエクリチュール―「語り手」の存在と「会話文」「絵解」（『平安朝文学における語りと書記（エクリチュール）―歌物語・うつほ物語・枕草子から』、武蔵野書院、2023年3月、130―133頁）で、詳しく紹介されている。

⁹ 伊藤禎子は、「会話に表れる言葉は表面上のものとなり、腹の内（心の中）は別にあるという二重構造の会話文が生成されるに至ったのである。いわば、言葉の応酬であった会話が心理劇をも惹起するまでになったのである」（『祝祭物語論』、『うつほ物語』と転倒させる快樂、森話社、2011年5月、162頁）としている。

2、社会的な役割から解放される契機—高麗（独楽）

求婚譚におけるあて宮は、基本的に求婚者の全員に対して「つれなき」態度を貫いている。それゆえ、彼女は「ものの心も知らぬ」（国譲 上・128 頁）女性として描かれており、そのような造形について、従来、「個性的」ではなく、「人形」のような存在だと指摘されてきた。あて宮の人物像については、後世の『源氏物語』も紫の上の口を借りて、次のように評している。

上、「うつほの藤原の君のむすめこそ、いと重りかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、すくよかに言ひ出でたる、しわざも女しきところなかめるぞ、一やうなめる。」¹⁰（蛭・215 頁）

求婚譚において、あて宮は誰に対しても一様な態度を見せるが、仲忠のみを「こともなき」（春日詣・281 頁）男性と見なし、彼に好感を抱いている。しかし、その好感が恋愛感情には至っていない。同時に、正頼はあて宮の東宮入内を画策している。あて宮は入内を望まないものの、最終的には父の意向に従い、東宮妃となる。その後、入内したあて宮は「源氏女」としての役割を果たし、東宮と良好な夫婦関係を築き、皇子を次々と産むことになる。「あて宮」巻は、正頼家の益々の繁栄や東宮妃としてのあて宮の幸福を描いて終焉を迎える。

続いて展開するのは、現実的な価値の逆転をもくろむ「内侍のかみ」巻という、非日常的で祭りの雰囲気溢れる一卷¹¹である。この巻において、あて宮と東宮との日常的な夫婦関係が希薄化するとともに、あて宮と仲忠の禁忌的な関係が表面化してくることになる。「内侍のかみ」巻は、朱雀帝と仁寿殿女御との会話から始まる。その会話文中には、仲忠とあて宮をはじめとする兼雅と仁寿殿女御、兵部卿の宮と承香殿の女御など、反秩序的な関係が複数見られる。以下に仲忠とあて宮に関する部分を見ていく。

（朱雀帝）「そが中になむ、いとせちにいふ人々ありと聞きしかど、仲忠は天下にめづらしき心あらむ女も、あれだに少し気色あらばえ忍ぶまじき人ぞかし。それをいかによそに見ては、いかにあらむと思ふなむ、いと憎くありがたき御心といよいよ思ほゆる。今もなほその心失すまじかし」。御いらへ、「さるは、かのあてこそ、見るところやありけむ、異人よりは返りごとせまうくは思ひたらざりしを、かの仲忠もさもや見けむ、いとあはれと思ひぬべきこと多くすめりしかど、まめやかに思はでやみぬめりきや」。（内侍のかみ・162—163 頁）

朱雀帝が、長い間、あて宮に対する仲忠の変わらぬ志について感嘆する。朱雀帝の発言を受けて、

¹⁰ 『源氏物語』のテキストは、新編日本古典文学全集 20～25（小学館、1999～2002 年）により、巻名、頁数を記した。

¹¹ 須見明代が 1972 年 12 月の物語研究会での発表（題目：「宇津保物語・初秋の巻について」）において、民俗学的視点から祭りの要素を『うつほ物語』に導入して以来、先行研究は「内侍のかみ」巻の非日常性を屡々指摘してきた。例えば、高橋亨（1991、前掲注 1 に同じ、325 頁）は「初秋の巻に表現されている恋愛関係は、非日常的な〈色ごみ〉の世界であった」と説く。また、大井田晴彦は「物語の世界が非日常的な性格を帯びてきた」（『うつほ物語』の転換点—「内侍督」の親和力—、『うつほ物語の世界』、風間書房、2002 年 12 月、109 頁）と述べている。

仁寿殿女御は、あて宮にとって仲忠が特別な存在だと認め、二人が結ばれなかったことを残念に思っている。このような非日常的な色好みの雰囲気が続く中で、あて宮と仲忠のやり取りに関する文脈が展開している。

御簾、御几帳の中に隠れて、長押に押しかかりて、ただあて宮の御前に候ひて、ものなど聞こえて、(仲忠)「今日上に参上りたまはぬ人は、いと罪深き心地こそしたまへ。さるめでたきことのありがたげなるを御覧ぜで。なほおぼろけにはあらじかし」。上、兵衛の君して、いらへなごせさせたまふ。「それ見過ぐすも、罪なきにはあらずかし」。…中略…かくて、もの聞こえたまひ、よろづのことをいひ居たれば、上、兵衛していらへさせたまふ。中將、**高麗人**などこそ**通辞**はありといふなれ、まかり渡るとも思はぬに、あやしくもあるかな。いらへ、「されども、**独楽**はた遊ばず、上手におはしませばにこそはあれ」などいふ折に、夕暮れになりぬ。秋風いと涼しく吹く。
(内侍のかみ・209—211 頁)

これは、「内侍のかみ」巻において描かれる仲忠とあて宮の会話の場面である。仲忠の話している相手は、言伝を担当するあて宮付きの女房の兵衛の君である。これより前段の文脈では、朱雀帝と仲忠が賭け碁をする場面が展開し、そこでは仲忠が負けていた。勝った朱雀帝は弾琴を要求したが、仲忠はそれを断り、あて宮の局である藤壺に逃げ隠れた。藤壺で、仲忠は今日の節会の盛儀をめぐって、あて宮と雑談をはじめた。次第に、仲忠は言伝を通じて、あて宮と会話することに不満を感じ、「高麗」についての話題を引き出し、直接対話を望む。かくして、後段の文脈では、仲忠が、兵衛の君を通じて、あて宮と比喻の激しい応酬を繰り返し、ようやく、あて宮が言伝なしに仲忠と直接的に歌を交わすことに至る。

ここで、あて宮と直接対話を望んでいる仲忠は、「高麗人は通訳が必要だということだが、私は外国に渡った覚えもないのに、変ですね、ここは高麗でしたっけ？」と述べている。つまり、仲忠は、自らが高麗に渡ってきて、高麗人を相手にする日本人であるかのように扱われた(通訳のような役割を果たす取次の女房を通じてあて宮と会話する)ことに不満を抱き、あて宮に皮肉を言ったのである。注目したいのは、兵衛の君があて宮の意を汲んで、「あて宮様は独楽を上手に回します(あて宮は並々ならぬ独楽(高麗)人である¹²⁾。」と当意即妙に切り返したというところである。先行研究によると、この『うつほ物語』に登場する「高麗人」は渤海使¹³⁾となる。平安時代において、鴻臚館という外交施設で遇されていた渤海国の使節(高麗人)は、日本人にとって外部性を有する異人であったと言える。つまり、高麗(渤海国)は、日本にとって、異なる価値観を有する異国とも言える。この会話によって、この時点で、「高麗人」(独楽人)に擬されるあて宮と、藤壺の局を「高

¹²⁾ 『うつほ物語』新編日本古典文学全集の頭注(内侍のかみ・211 頁)を参考にしたものである。

¹³⁾ 陣野英則は、『源氏物語』に登場する「高麗人」は、『鴻臚館』という迎賓館に滞在する、歴とした公式の使節であったため、国交のなかった新羅や高麗からの使節という可能性は低い。したがって、正式に国交を結んでいた渤海国からの公式使節であると指摘している。同様に、『うつほ物語』における「高麗人」も、渤海国の公式使節と見なしている(『渤海使と平安朝文学—『うつほ物語』の「高麗人」と「おほやけ」』、『国文学：解釈と鑑賞』、第76巻第8号、2011年8月、60—67頁)。

麗」であると疑う仲忠とは、共に内裏の宮廷社会から高麗国という異国（言説上の異世界）へと入っていったように解釈されてくるのである。

では、「高麗」という言説上の異世界の持つ意味をどう捉えるべきか。ここでは、物語の中で構築された物語の経験的現実や社会規範にとらわれなく、独自の価値観を持つ時空として読み取っておきたい。言い換えれば、言伝を通辞になぞらえつつ不満を表明した仲忠の思いは、「高麗」に「独楽」で応じたあて宮の機知によってはぐらかされてしまった。しかし、「高麗（独楽）」の比喻を契機として、二人の応酬は互いの立場（臣下・東宮妃）を越えた激しい恋の駆け引きに発展することとなる。特に、本稿では、「高麗」を、あて宮が一人の女性として人間化してゆく契機として捉えておきたい。

大将、女御の君にもの聞こえたまふ。孫王の君して、御いらへなどいひ継がせたまへば、大将、「今はかく、ありしよりも親しく仕うまつるべく侍るを、御通辞なくとも承りなむは」などで、「先つ頃、世の中にあやしきことを申しけるを、卑下せる所に、いかに思うたまひたらむと、聞こしめしけむことをなむ、ここにもかしこにも、限りなく思うたまへ嘆きて、誰も誰もまかり歩きもせで侍りつる。ある所より、かの三条に、とかくのたまはすることなむありける。さる心も思ひ知れとて、かの宮消息にて侍りし、こと定まりて御覧ぜさせむとてなむ、まだ失はで侍る」とて、この君して宮の御文を奉りたまひて、聞こえたまふ。（国譲 下・339―340 頁）

「高麗」という表現の重要性を説明するにあたり、ここでは、もう一つの場面をあげて比較し検討してみる。これは立坊争いが収束した後、仲忠が、後の宮の謀略の記された手紙をあて宮に見せ、自分の誠意を語る場面である。ここで、注目したいのは、「通辞」という表現である。「通辞」という表現は、『うつほ物語』において、合計三回用いられている。その中で、二回は、仲忠とあて宮とが話し合う場合に使われている。

一回目の場合は、引用した「内侍のかみ」巻における場面に示されたように、「私は外国に渡った覚えもないのに、変ですね、ここは高麗でしたっけ？」という条において、「高麗」という表現を仲忠が用いている。その後、あて宮は、仲忠からのアプローチに対し、切り返したようなポーズを見せつつ、それを契機として利用し、ともに「高麗」という異国（別の時空）に入ってしまった（社会的な役割から一時的に解放される）ということになる。その結果、二人は直接的に会話することが可能となった。二回目のこの場面では、仲忠は、現在東宮大夫に昇進し、以前よりも親しく仕えていると主張し、もう一度、あて宮と社会的な役割（臣下・東宮妃）にとらわれることなく（通辞なく）、一人の人間として、恋愛の言葉を話し合おうとしている。「国譲」巻の二人のやりとりは、「内侍のかみ」巻の情景を裏返しにしたものと見ることができる¹⁴。但し、一旦、祭りの幕が降ろされると、「高麗」という社会的な役割から解放される契機を失った二人は、東宮妃や臣下という身分秩序に拘束され、昔のように直接対話によって愛の言葉を交わすことができなくなったのである。

¹⁴ 大井田晴彦（前掲注 11 に同じ、121 頁）において、『内侍督』の二人のやりとりは、『祭の使』のそれ（秋、七月の夕暮れの出来事）を裏返しにしたものと見ることができる」という観点からの指摘がある。

従来、あて宮と仲忠とが「高麗」をめぐる会話を展開する場面について、仲忠の反秩序的な姿勢や個人の立場¹⁵という点、及び彼のあて宮に対する変わらぬ愛情¹⁶という点から論じられてきた。本稿では、一人の女性としての立場から、あて宮が社会的な役割から解放される契機になっていると解釈しておきたい。

3、歌ことばによって解放された恋愛感情

「高麗」という表現をめぐる会話を皮切りに、あて宮と仲忠の会話の内容は、日常会話から次第に、歌ことばによって構成された恋愛の言葉になっていく。ついに、あて宮は、自ら仲忠と露骨で際どい和歌を交わし始める。次に、二人の和歌応酬の一部を引いておく。

(仲忠)「世の中にわびしきものは、独り住みするにまさるものなかりけり。あが君や、思し知らなむと聞こゆるは、わりなかりけり。今は、^(ア)『結ふ手もたゆく解くる下紐』と聞こえさするも、いとなむかひなき」。あて宮、からうじていらへたまふ。^(イ)「下紐解くるは朝顔に、とかいふことある」。中将、「同じく吹かば、この風も、ものの要にあたるばかりになりなむ」とて、

「^(ウ) 旅人のひもゆふ暮れの秋風は草の枕の露も干さなむ
涙のかからぬ曉さへなきこそ」。藤壺の御いらへ、

「^(エ) あだ人の枕にかかる白露はあき風にこそ置きまさるらめ
忘れたまふ人々も、なうはあらじかし」。中将、「まだこそなけれ。

^(オ) 木の葉をも宿にふるさぬ秋風のむなしき名をも空に立つかな
しるきこともあらじものを。いづれかあだ人ならむ」。藤壺、

「^(カ) 吹き来れば萩の下葉も色づくをむなしき風といかが思はむ
まめやかにも見えずかし」。以下、仲忠二首・あて宮一首の贈答歌)

(内侍のかみ・213—214 頁)

仲忠は、まず、一人の男性として、自分のあて宮に対する昔から変わらぬ愛情を吐露する。独身の辛さを訴えつつ、あて宮への愛情を示した後、仲忠は、「下紐」を歌語とする古歌(傍線部ア)を引用することで、あて宮への気持ちを直接的に伝えようとしている。この歌は「思ふとも恋ふとも会はむものなれや結ふ手もたゆく解くる下紐」(古今・恋一 読人しらず)を引くとされる¹⁷。これ

¹⁵ 根本智治は、「押しかかる」(寄り掛かる)という仲忠の動作に注目し、それは「健康で正常な立ち居振る舞いからの変調を意味しているように思われる。つまり、本来あるべき姿からの逸脱を示している」とし、「長押という境界線で仲忠は恋の言葉を操ることのできる場所を確保した」(『内侍督的世界：前半部の会話の論理』、『講座平安文学論究第十二輯』、風間書房、1997年9月、145—147頁)と指摘する。

¹⁶ 竹原崇雄は、「こまうど……」の会話を、「催馬楽山城の一節に『我を欲しと言ふ』という表現が続いていることを考慮すれば、催馬楽山城が上手であるということは、仲忠の貴宮に対する恋情を『欲しと言ふ』という一節に暗示させて言ったのではないかと解釈もできる」(『宇津保物語「内侍のかみ」における物語的世界の構造：稲賀氏のクイズの享受法による解明』、『国語と国文学』、第60巻第4号、1983年、17頁)としている。

¹⁷ 『うつほ物語』新編日本古典文学全集の頭注(内侍のかみ・213頁)を参考にしたものである。

は、「下紐」が自然に解けるのは、恋人に会える吉兆だという俗信に基づいて詠まれた歌である。歌には、恋人との出会いを期待しつつも、相手に会えないという歌人の思いが込められている。また、「下紐」は、袴や裳の紐のことで、下紐が解けることは、男女の逢瀬や肉体的な関係を意味することがあり、際どく官能的な表現とされる。

一方で、仲忠の変わらぬ愛情に心を動かされたあて宮は、仲忠が引き出した「高麗」という契機を掴んで、物語の社会秩序が崩れた空間に入っていく。その際、あて宮は、東宮妃という社会的な役割にとらわれることなく、一人の女性として自ら返歌する。あて宮は、仲忠からの贈歌を受けながら、下紐という歌語を使って、傍線部（イ）のように返歌する。この歌の出典は未詳であり、「我ならで下紐解くな朝顔の夕影待たぬ花にはありとも」（伊勢物語・三十七段）を引くとする説もある¹⁸。これを踏まえた場合、あて宮は、自分の「下紐」はまだ解いておらず、それを解くのは仲忠だと暗に伝えたことになり、あて宮自身もこの恋愛遊戯に入り込んできたと解することができそうである。

歌語の引用によって開かれた恋愛遊戯の文脈を、仲忠は歌の贈答によって伸張しようと試みる。この場面の「夕暮れになりぬ。秋風いと涼しく吹く」（211 頁）という現象を、仲忠は「夕暮れ」と「秋風」という歌ことばに置き換えて、歌の位相であて宮に語り掛けてゆく。仲忠の歌（ウ）を見てみよう。この歌には、直前のあて宮との会話に用いられた「下紐」という歌語を受けて、「紐」の縁として「紐結（ひもゆ）ふ」と続けつつ、そこに「日も夕（暮れ）」というこの場面の状況を重ねる。「紐結ふ」に「夕暮れ」という当時の状況が言いかけられることで、その場に応じた即興の和歌贈答が展開される。と同時に、仲忠もまた、中将という宮廷官人の立場を脱ぎ捨て、「旅人」と化してゆく。すなわち、恋人に会うために藤壺を訪れる旅人として自己を擬えるのである。一方、この歌を受けたあて宮は、仲忠の用いた「秋風」に「飽き」を掛け、自身を「あだ人」（浮気者）に飽きられる女性の位相に転じてゆく。続いて、仲忠は、「木の葉をも宿にふるさぬ」を通じて、自身の潔白と誠実を主張し、自らが「秋風」や「あだ人」と擬えられることに反論する（オの歌）。それに対して、あて宮は、仲忠の来訪を聞いて、興奮した女房たちの様子を「萩の下葉も色づく」という比喻で表現し、「秋風」のような仲忠の多情や色好みは無実ではないと反発する（カの歌）。

以上のように、二人が「下紐」・「秋風」・「あだ人」などが詠み込まれた和歌の交流を行う様子を見てきた。あて宮と仲忠とが歌のやり取りを展開することの意味をどう捉えるべきか。以上の場面について、高橋亨は、次のように述べている。

歌ことばによる表現ゆえに、このような露骨なまでの恋のくどきも可能なのである。歌垣における男女のかけあいの伝統は、王朝貴族たちの祭りの伝統にも生きていた。¹⁹

また、秋山虔氏も『源氏物語』作中人物の詠歌をめぐる論考において、歌による交流の機能について次のように述べている。

¹⁸ 『うつほ物語』新編日本古典文学全集の頭注（内侍のかみ・213 頁）を参考にしたものである。

¹⁹ 前掲注 1 に同じ、328 頁。

経験的現実の中での経緯を完全に遮断する和歌の言葉の世界がここに敷設されたのであり、御息所はそこに転位することによって光源氏との間に安定した心の通い路を見出すことができるのである。(188 頁)

歌の詠作は抒情による人間の解放という言い方があるが、その解放とはこれまで述べてきたように日常語とは異質の、ということは思想、感情や意思伝達の具としての言葉ではなく、それ自体が意味であり映像であるような言葉の世界の現実を造営し、そこに転位していくということであろう。(193 頁)²⁰

いずれも従うべき見解であろう。歌ことばというものは、日常性から遠い言語形式であり、それ自体は(物語の)日常と現実を遮断し、人間性を解放する機能を有する言語コードでもある。つまり、あて宮と仲忠との歌による応酬は、今までの非一人間的なあて宮にとって、自らの人間性を解放し、一人の女性、あるいは真の意味での人間としての恋愛感情を持ち始める機能を有していると考えられる。言い換えれば、歌による交流を通じて、まず、あて宮と仲忠とが物語の日常や現実から遮断される。次に、二人が心の交流を展開する安定した時空(高麗)が維持される。最後に、あて宮は、仲忠と「ことばの祭り」において、精神的な恋愛ゲームを楽しんだ後、恋愛感情が芽生え、一人の女性として成長してゆく。

4、夫である東宮に対して芽生えた不満

「内侍のかみ」巻が描く「ことばの祭り」の表現の力は、祭りの幕が下りても、時間を超えて持続し、後の巻や物語の展開に対して影響を与え続ける²¹のである。特に、「ことばの祭り」は、一人の女性としてのあて宮にとって、真の意味での人間化してゆく契機を与え、恋愛感情が解放される機能を果たしているとも言える。さて、あて宮に芽生えた繊細な恋愛感情は、東宮と結ばれた夫婦関係に対して、どのような影響を及ぼすか。本節では、あて宮の夫である東宮に対する心情表現を対象として、その具体的な様子を見ていく。

ここで、求婚譚の折や入内した直後の、東宮に対するあて宮の態度を想起しておきたい。求婚譚におけるあて宮は入内を望まないものの、父正頼の意向に従い、東宮と歌を詠みかわしつつ、入内の準備を着実に進めている。更に、入内した直後に、あて宮は東宮と良好な夫婦関係を築いている。以下は、あて宮が、二度目の懐妊を契機として里下がりした翌朝、東宮と交わした一首の歌である。

かくて、あて宮出でさせたまへるつとめて、…中略…

(あて宮)とし月も衣も中には多くとも心ばかりはへだてざらなむ (あて宮・147―148 頁)

²⁰ 秋山虔「源氏物語の和歌をめぐって」(『王朝の文学空間』、東京大学出版会、1984 年、188 頁と 193 頁)

²¹ 高橋亨は、「初秋の巻が再生させたことばの祭りというべき表現の力は、祭りの終わったあとも、かたちを変えながら持続していく。蔵開の巻、そして国譲の巻におけるリアリズムの深化として評価されている問題も、これを前提にすることなくしてはとらえられないであろう。」(前掲注 1 に同じ、328 頁)としている。

あて宮は、東宮との間には年月や衣など、多くの隔たりがあるが、心だけは隔てることないよう、里下がりによって寵愛を失う不安を東宮に打ち明けている。注目したいのは、あて宮が、東宮との間に「心を隔てる」ことないように望んでいるところである。つまり、この時点で、あて宮が東宮を憎からず思っており、二人の関係も蟠りもなく睦まじいと考えられる。

しかし、「内侍のかみ」巻以後、東宮に対するあて宮の態度が、次第に冷たく変わっていく様子が見られる。「内侍のかみ」巻以後の東宮に対するあて宮の心情表現を調査した結果、あて宮が東宮に対して「むつかる」という感情を頻繁に示していることが明らかになった。「むつかる」という表現は、機嫌を悪くして腹を立てるという意味となる。また、この表現が使われる文脈を辿ってみれば、多くの場合、「仲忠」がそれを引き起こす要因として重要な役割を果たしていることが分かる。以下に、具体的な場面からあて宮の心情を確認していく。

君、「なかなかいとよしや。よに心憎く思ひたる人につきたまひて、一ところ心安く。おのれこそかかるおほたかりに出だし放たれて、よには憂くまがまがしきことを聞き、見たまふ人は殊にはなやかにも見えたまはず。むつかしきままに、目も合はせたまつりたまはずむつかれば、心よからずとは思されためり。いとこそ用なけれ。里にありしむかしのみ恋しくて、あらじものを。何せむに、かく出だし立てられてあらむと思へば、心憂く悲しきことも多くなむ」。

(蔵開 上・408―409 頁)

これは、あて宮が、兄の祐澄に入内によってもたらされた苦痛を訴え、入内する前の里での生活を懐かしむ場面である。他の妃に嫉妬されることで、中傷を受けるあて宮は、他に競う妻もなく、奥ゆかしい仲忠と結婚した女一の宮を羨望の眼差しで見る。本来、東宮（今上帝）の寵妃になることは、貴族女性にとって最高の荣誉である。それは、最高権力者である帝との結婚によって、自らの地位が向上し、家族の利益や権力も確保されることが期待されるからである。しかし、注目したいのは、あて宮が、東宮（今上帝）が華やかではないために、臣下の仲忠には勝てないと思っていることである。また、あて宮は、男性的な魅力に欠けた東宮に対して、視線を交わすこともせず、不機嫌な様子を示している²²。本稿では、そこにあて宮の一人の女性としての私的な感情を読み取っておきたい。

²² 坂本信道は、「あて宮からの個人的な愛情」という側面からみれば、仲忠は東宮を凌いでいる（「仲忠・あて宮・女一宮―「うつほ物語」栄華の方法と論理」、『女子大國文』、第113巻、1993年6月、5頁）と指摘する。大井田晴彦は、「（あて宮は）仲忠のような魅力に乏しい春宮を愛することができない。『宮は御心・御才も……誰にかはし劣りたまへる』という言葉も空疎に響くだけである。『ねびもてゆくままに、光をぞ放つべき』という仲忠の様子を眼にし、耳にするにつけても、自分の失ったものの大きさを痛感するばかりである」（「仲忠と藤壺の明暗―「蔵開」の主題と方法」、『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月、150頁）としている。

(孫王)「むかしながら、今はまして。立ち去りもしたまはでぞ、むつかられおはしますめる。よからぬことの、さまざまに聞こゆるままに、御心もゆかで、まかでて心をだにやらむ、と聞こえたまへど、許したてまつりたまはねば、夜昼ぞむつかりおはします」。

(蔵開 上・440 頁)

これは、あて宮付きの女房である孫王の君の発話である。孫王の君が、自らが目撃した東宮とあて宮の夫婦生活について、仲忠に語っている。そこから、東宮が、あて宮の社会的な評判や名声を無視し、ただひたすらあて宮を病的に恋着する様子がうかがえる。一方で、あて宮が、東宮の自分に対する異常な執着や、それによって引き起こされた他の妃からの中傷によって、東宮や後宮生活に対して、不快感や嫌悪感を抱いていることが分かる。

(東宮)「この人、むかしの心思し出でたる時か、取りもあへず、ただむつかりにむつかりて、憎みたまひてや。かたち、するわざこそよなからめ。」

(蔵開 上・441 頁)

これは、あて宮が東宮と夫婦喧嘩した時、東宮の発話である。東宮は、自分の容姿と才芸が仲忠よりも劣ることを認めている。注目すべき点は、東宮があて宮に嫌われる理由を、あて宮が自分より優れた仲忠をまだ恋慕していると考えていることである。また、あて宮は東宮からの非難に対して直接的な回答を避けた。つまり、あて宮は仲忠への未練を否認していないと解釈できよう。

(あて宮) いとまめやかにむつかり申したまひて、御暇しひて聞こえたまへば、(今上)「はや。いとよかなり」とて、(今上)「出でたまひなば、やがてかしこにものしたまへ。よろづの人の思はむよりは、大将の朝臣の思はむぞ、をかしきや」。

(楼の上 下・571 頁)

これは、あて宮が、俊蔭女といぬ宮（仲忠の娘）が十五夜に楼の上にのぼり、琴を演奏することを聞き及び、東宮（今上帝）からは是非とも暇を取ろうとする場面である。この前の文脈では、あて宮が、父正頼に宮中へ迎えに来るようにと求める場面が展開し、あて宮が「ここには、まろをかしこに任せて、ただにあらむと思ひはべりしを」（仲忠と結婚していたであろうに）と述べており、仲忠との結婚が叶わなかったことについて、悔しく思っている。そして、引用文では、東宮もまた、仲忠のことが契機となって、あて宮の「むつかる」という心情を導き出したと認めている。

実は、上記の用例のみならず、「かく心を隔てて、心強く悪きは、仲忠の朝臣のするぞ」（蔵開 下・561 頁）や「この大将のことにつきてこそ、度々気色悪しう、苦しけれ」（楼の上 上・459 頁）という東宮の発話から、あて宮が品性、容姿や才芸などの点で優れた仲忠を好むため、仲忠に比べ劣ると感じる東宮に不満や嫌悪感を抱いていることがうかがえる。東宮自身も、あて宮が仲忠に対して持つ感情に気づいているようであることが分かる。

但し、あて宮のそのような感情と行為は、東宮妃としては不適切である点には留意しておきたい。というのも、あて宮と東宮との結婚は、正頼家の政治戦略に合致するものだからである。つまり、

この結婚は正頼家の権力維持に資するものであり、そのためには東宮との関係を強化し、東宮からの支持を確保する必要がある。それゆえ、あて宮は、東宮に対して穏やかな態度を示し、東宮の信頼や寵愛を固めることが重要である。しかし、実際には、仲忠の話題になると、あて宮が東宮に対して「むつかる」という気持ちを抱く様子が示されている。本稿では、そこにあて宮の一人の女性としての私的な感情がうかがえる。つまり、あて宮は、終始父正頼の構想する政治戦略を実践していくものとしてあるわけではなく、一人の女性として成長していく（人間化してゆく）存在と言える。そのように考えた場合、本稿では、その不満や嫌悪感を東宮妃としての藤壺の、東宮に対するものではなく、一人の女性としてのあて宮の、男性としての魅力に欠けた夫に対するものとして解釈しておきたい。そもそも、政略結婚では、配偶者との関係は主に政治的な利益や家族の権力維持に焦点を置いている。しかし、あて宮が、恋愛感情を持ち始めるにつれて、より感情的なつながりや相互の理解を求めるようになり、その過程で夫との関係において満足感の欠如や感情の不一致が生じることになる。それは、あて宮が、東宮との政略結婚に対して嫌気が差す一因と考えられる。

かくして、「内侍のかみ」巻での「ことばの祭り」において、仲忠との精神的な恋愛から芽生えるあて宮の恋愛感情は、後の物語の展開において重要な要素となる。本稿では、「内侍のかみ」巻以後、あて宮の東宮に対する「むつかる」という心情表現に着目し、そこにあて宮の一人の女性としての恋愛感情を読み取っておきたい。このような感情の表出は、彼女がより人間的な存在として成長していく過程を示していると考えられる。

結論

求婚譚におけるあて宮は、従来、『竹取物語』のかぐや姫の造型に重ねられてきた。したがって、その部分のあて宮は、かぐや姫の「天人」或いは「変化のもの」という性格を構造として帯びることとなり、非一人間的な位相に置かれている。物語の展開に従って、あて宮は父である正頼の政治的な持ち駒として利用され、東宮に入内することになった。後宮での生活を通じて、彼女は将来の国母としての政治的素養を備えるようになった。先行研究では、あて宮の変貌を「非一人間」から「人間」への変貌として捉えている。しかし、あて宮が東宮妃から将来の国母へと歩む道筋は、単に父正頼の構想する政治戦略を実践しているに過ぎない。したがって、これは彼女が真の意味で人間として成長しているとは言えない。

本稿は、立坊争いという政治的な抗争を主題とした「国譲」巻にこだわることなく、あて宮が真の意味で人間化する契機を「内侍のかみ」巻における言語状況に見出すことを試みた。考察の過程で注目したのは、あて宮と仲忠の会話に「高麗」（独楽）という表現が用いられている点である。「高麗（独楽）」の比喻を契機として、あて宮は仲忠と共に言説上の異世界へ入り込んでいく。これにより、あて宮と仲忠が物語の経験的現実から離脱し、自己を転位させることが可能となる。ここで、この表現があて宮が東宮妃として組織化されている状態から解放され、一人の女性として人間化してゆく契機として機能していることを結論として提示したい。「高麗」が切り拓く異世界において、二人の応酬は互いの立場（臣下・東宮妃）を越えた激しい恋の駆け引きに発展することとなる。最

最終的に、あて宮は仲忠との恋歌の交流を通じて、恋愛感情が芽生え、一人の女性として、さらに言えば真の意味での人間としての成長を遂げていくのである。

その後、あて宮に芽生えた繊細な恋愛感情は、東宮と結ばれた夫婦関係に対して、負の影響を及ぼしていると思われる。特に、「蔵開」巻や「楼の上」巻などにおいて、あて宮が、品性、容姿や才芸の優れた仲忠に好感を抱くことで、東宮に「むつかる」（機嫌を悪くする）という気持ちを抱くようになる様子が見られる。本来、東宮の寵妃となることは、貴族女性にとって最高の栄誉であり、また、正頼家にとっては政治的な権力の維持に資するものでもある。それゆえ、あて宮は、東宮に対して穏やかな態度を示し、東宮の信頼や寵愛を固めることが重要である。しかし、あて宮は逆に、東宮が臣下の仲忠には及ばないと考えており、東宮に不満の様子を示している。本稿では、そこにあて宮の一人の女性としての私的な感情を読み取った。また、その不満や嫌悪感を東宮妃としての藤壺の、東宮に対するものではなく、一人の女性としてのあて宮の、男性としての魅力に欠けた夫に対するものとして解釈しておきたい。これは、あて宮が、政治的な立場にあるだけでなく、人間的な存在としての複雑な感情や思考を持っていることを示す要素とも言えよう。

第三章 昔に引きこもる女一の宮

—古歌「むかしを今に」の引用による時間の遡行—

1、問題提起と先行研究

女一の宮は、『うつほ物語』前半部のあて宮求婚譚を基軸とした物語において、登場する場面の稀な人物である。「内侍のかみ」巻に至ると、朱雀帝の宣旨により、彼女はあて宮の代償として仲忠に降嫁することになる。仲忠との結婚によって、彼女はあて宮の引き立て役から、俊蔭系の琴の一族の物語において重要な役割を果たしている人物へと転換していく。特に、「沖つ白波」巻以後、女一の宮は仲忠の妻、及び女子いぬ宮や男子宮の君の母として活躍する人物となっている。女一の宮が、当代随一の貴公子である仲忠と結婚したことで、東宮に入内させられたあて宮から羨望の対象となったが、実際のところ、女一の宮本人はこの結婚に不満を抱いている様子が窺える。本稿は、仲忠の妻となった後、女一の宮が「昔」の出来事に強い執着を見せ、頻繁にその話題に言及することに注目し、そこから女一の宮の内面を読み取るものである。まずは、女一の宮の婚姻に関する先行研究を紹介しつつ、本稿の視点を具体化していく。

先行研究では、女一の宮と仲忠の結婚について、主に結婚の政略性という観点や、女一の宮の母性という観点から論じられてきた。結婚の政略性という観点については、勝亦志織が、朱雀帝と正頼（女一の宮は正頼の孫娘である）が女一の宮と仲忠を結婚させることで、「琴の一族とのつながり」を求めていると指摘する¹。本宮洋幸は、朱雀帝が婚姻関係を通じて仲忠との紐帯を強めることは、琴の一族の後継者であり、藤原氏の血をも引く仲忠との政治的連携の強化を意味すると説く。また、本宮氏は、朱雀帝が内親王を「俊蔭一族の霊琴と等価のものとして位置づけようとする」意図を読み取っている²。これは、この婚姻を提案する側から、女一の宮が政治的な持ち駒として機能する側面を読み取るものであるが、一方で、戸田瞳は、この婚姻を受け入れる側（琴の一族、この局面では仲忠）が、女一の宮の現実の立場における朱雀帝の内親王としての存在価値も認めていると説く³。以上の論は、皇室（朱雀帝）・源氏（正頼）及び琴の一族（仲忠）にとって、皇女降嫁が果たした政治的な役割という方向から解釈するものである。これらを勘案すれば、この婚姻関係において、政治の持ち駒として利用される女一の宮像が窺われてくる。女一の宮の母性という観点については、西山登喜が、宮の君の難産が女一の宮の肉体に深く刻まれた感覚を残し、その苦難を乗り越えたことで、彼女の「母としての心情」が顕在化し、「社会的役割としての母性」が成熟してきたと論じている⁴。また、富澤萌未は、女一の宮の言動や感情が、琴の一族の継承者であるいぬ宮に影響を及ぼしたと指摘しつつ、「楼の上」巻で、女一の宮が母としての感情を見せていると説く⁵。これらの論は、女一の宮と子供たちとの親子関係、及び彼女の身体に宿る母性を読み取る立場である。これは、女一の宮が母としての役割を果たしている視座を提供するものである。

¹ 勝亦志織『『うつほ物語』の女一宮論：皇女の婚姻の意味するもの』（『学習院大学人文科学研究所 人文』、第7号、2009年3月、256-238頁）

² 本宮洋幸「仲忠の内親王獲得—祐澄との明暗—」（『うつほ物語の長編力』、新典社、2019年3月、145 - 165頁）

³ 戸田瞳『『うつほ物語』における「代はり」の結婚：疎外される女一の宮』（『国語国文研究』、第156号、2021年2月、1-13頁）

⁴ 西山登喜『『うつほ物語』宮の君の登場理由：女一宮の〈母性〉を問う』（『物語研究』、第7巻、2007年、108-121頁）

⁵ 富澤萌未「いぬ宮の位置づけ：いぬ宮と母女一の宮」（『うつほ物語—子ども流離譚』、翰林書房、2021年3月、148-171頁）

このように、先行研究では女一の宮が皇女及び母として担った機能について、二つの方向から論じられてきた。これらはつまり、女一の宮に課された制度的及び社会的な機能を読み取るものである。しかし、先行研究では、父（外戚）・子との関係から離れ、仲忠との婚姻関係における女一の宮の個人的な側面や内面については、詳細に検討されていない。近年、『うつほ物語』の時間に関する研究において、とりわけ「作品自体のあらわしている線状的・指標的な外的時間」が注目されてきた⁶。これらは物語の巻序や本文の乱れをめぐって、成立過程を考察するものである。但し、登場人物の心情によってあらわれる主観的で流動的な内的時間に着目する論は未だ少ない。以上のような問題意識のもとに、本稿は、昔に関する女一の宮の言辞を見据えつつ、一人の女性としての女一の宮の内面を時間という観点から捉え直してみたい。

2、女一の宮と仲忠の結婚の位置づけ

仲忠との婚姻関係における女一の宮の立場を考えるにあたって、まずはこの婚姻のありようについて確認しておきたい。朱雀帝の宣旨が下る以前の女一の宮は、物語前半部の軸となるあて宮求婚譚において、あて宮の引き立て役として機能していたと言える。物語は長編化することで、ついに朱雀帝の皇女降嫁の宣旨によって、女一の宮という人物をもう一人の女主人公に仕立てあげていく。

①帝「いはゆるあてこそ。それこそはよき今宵の祿なれ。涼にはあてこそ、仲忠には、そこに一の内親王ものせらるらむ、それを賜ふ」と仰せらる。 （吹上 下・534—535 頁）

②帝「さて今宵の祿をばいかがすべき。涼、仲忠はさてあり、おもとにはみづからをやは得たまはぬ。中將の朝臣、紀伊国の祿には、娘をこそは得たれ」。 （内侍のかみ・256—257 頁）

女一の宮の結婚に関する朱雀帝の宣旨は、物語内に二箇所を確認されている。①は、神泉苑における紅葉の賀に際し、仲忠が披露した琴の演奏に対する褒賞について、帝が左大将の正頼と語り合う場面である。ここでは、帝は涼にあて宮を、仲忠に女一の宮を下賜すると考えていた。②は、宮中の相撲の節会における朱雀帝と俊蔭女の会話の場面である。この二回目の宣旨こそ、女一の宮と仲忠の結婚に現実味を与えていたと言える。ここでは、俊蔭女の奏でた琴の演奏「胡笳の手ども」に感動した朱雀帝が、仲忠に娘の女一の宮を、俊蔭女には自分を与えようと述べた。実際にその後、俊蔭女が尚侍に任命されたのに続き、仲忠も女一の宮と結婚することになった。

内親王の女一の宮を仲忠に下賜する朱雀帝の行為をどう捉えるべきか。ここでは、女一の宮の祖父に当たる正頼の意図と合わせて解釈しておきたい。

宮、「藤中將にこそ、娘一人取らせて、子出で来ば、琴継いでもせさせむと思ひつれ。さるは皇女の筋は離るまじかなり」。おとど、「上も、と思ほして、御心とどめて、もののたまふにこそ

⁶ 本宮洋幸「語りの堆積と対峙する時間」『うつほ物語の長編力』、新典社、2019年3月、99頁）

これは、「沖つ白波」巻において大宮が娘たちの婿について夫である正頼と相談する場面である。大宮は、本来、娘の一人を仲忠に与え、秘琴の演奏法を孫代に伝えようと企図していた。しかし、女一の宮の降嫁が決まることで、その計画を断念せざるを得なくなった。注目すべき点は、正頼の述べたように、朱雀帝も大宮（正頼家）と同様の意図を抱いていたことである。つまり、朱雀帝と正頼は双方とも婚姻を通じて、琴の一族（仲忠）を取り込み、権力の強化を目論むのである⁷。その結果、女一の宮が正頼の娘ではないものの、孫娘（仁寿殿女御の娘）であることで、彼女が仲忠との結婚相手に選ばれるのは、朱雀帝と正頼双方の意向に沿うものとなる。

一方、琴の一族にとってはどうか。女一の宮との結婚は、あて宮を恋慕している仲忠にとって不本意であったが、彼がこの婚姻関係から得られた利点も見過ごすことができないであろう。朱雀帝の寵愛を受けた内親王との結婚を通じて、仲忠は朱雀王権と接近し、その王権の下で政治的に優位な立場を築けるという利点がある。また、戸田氏の指摘にもあるように、秘琴の後継者であるいぬ宮を産む女一の宮は、琴の一族にとって存在価値を持っている⁸。そして、この縁組が朱雀帝によって画策されたものであるとしても、仲忠—女一の宮、朱雀帝—俊蔭女という交換関係は、俊蔭女に尚侍の地位をもたらすという結果をも生んだ。それは、いぬ宮が今後入内することを見据えた場合に、「政治的後ろ盾としての役割」を果たす利益ともなりうるであろう⁹。

以上は、朱雀帝の裁可による結婚という観点から導き出されてくる構図である。この視点から考えた場合、女一の宮の降嫁は朱雀帝（正頼）と仲忠双方にとって、メリットが生じると言える。これは社会や制度の中で求められる女一の宮の皇女（政治の持ち駒）としての生き方でもある。しかし、一人の女性としての女一の宮は、仲忠との結婚をどのように捉えるか。

3、「昔」に執着する女一の宮

女一の宮は朱雀帝の最も寵愛する内親王として、最初から宰相の中将という官位に過ぎなかった仲忠との結婚を父帝に捨てられたと感じ、不満を抱いている。同時に、心進まぬままに婿取られた仲忠は、女一の宮と結婚したものの、あて宮のことを忘れられず、常に妻とあて宮のことを話す。それゆえ、夫である仲忠が心の中であて宮にまだ恋い焦がれていることに気付いた女一の宮は、不愉快な気持ちになっている。一方、東宮や後宮生活に嫌悪感を抱いてゆくあて宮は、仲忠と結婚した女一の宮を羨望の眼差しで見るようになる。その結果、仲忠という男性が、あて宮・女一の宮と

⁷ 琴の一族は、嵯峨の院の時代において、王権に反発する姿勢を示していた（三田村雅子の「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉—繰り返しの方法をめぐる—」、『東横国文学』、第15号、1983年、59—69頁で、詳しく紹介されている）。やがて時が経過し、朱雀帝の時代になり、帝は、今度は懐柔する姿勢を取り、皇女を降嫁することで、宮廷による琴の一族の属領化を図ろうとする。もし、これが成功すれば、朱雀帝の王権の強化にもなる。正頼の側から見れば、実際に、結婚後仲忠は正頼の三条院を居住の地として選ぶことになる。

⁸ 前掲注3 戸田瞳論文に同じ。

⁹ 猪川優子「『うつほ物語』俊蔭女の〈尚侍物語〉—仲忠への女一宮降嫁からいぬ宮入内へ」（『国語と国文学』、第80巻第7号、2003年7月、28—29頁）。

いう叔母・姪の間柄に当たる女性たちと、三角関係を形成していくかのように見える。物語が進むにつれて、こういう三角関係に身を置くことになった女一の宮は、夫である仲忠がかつてあて宮に対して抱いた感情に対し、執着を示し始める。

中納言、「長さはこの御髪と」。典侍、「さばかりにやおはしますらむ」、宮、「われは人か。かの君はいといみじきものを。金の漆のやうにこそあれ。同じところにありし時、常に比べて見しかば、かの御髪は、色と筋とは殊なりしものを」。(蔵開 上・401 頁)

これは、典侍が女一の宮夫婦の前で女君たちを批評する場面の抜粋である。女一の宮が、仲忠からあて宮と自分の髪の優劣に関する質問を受けた際、未だ夫の関心を得ているあて宮への嫉妬を隠せなかった。女一の宮が、昔、正頼邸で共に育った幼少期より、自身の髪があて宮の髪に及ばないと述べる。女一の宮があて宮に対して劣等感を抱いていることが窺える。屈折した感情を抑えきれない女一の宮は、典侍が座所から退いた後も、仲忠と共にあて宮のことについて語り続けている。

宮、「この君は見るままによくになりまさり、われは日々にあやしくぞなるや。むかしだにこよなかりけり」。中納言、「さもいみじき御片端にもあるかな。見なしにやあらむ。御前をもいと恐ろしげにおはすとは見たてまつらぬを。さなることは、必ず見せたてまつらせたまへ」。宮、「いでそただにはあらじ。こと引き出でて騒がれば、聞きにくからむ」。君、(仲忠)「よしと見たてまつるとも、今は何ごとにか。むかしだに引き出でずなりにしことを」。

(蔵開 上・403 頁)

女一の宮はまた、昔からあて宮の容姿が自分より優れていることに執着し、仲忠が昔、あて宮の求婚者であったことを気にしているように見える。更に、女一の宮は外聞を言い訳に、あて宮と面会したいという仲忠の要望を拒否した。一見、女一の宮夫婦は共に過去の出来事を忘れられないようであるが、注目すべきは、仲忠が昔、あて宮に夢中だったことを認めつつも、今は女一の宮と築いた家庭を重視し、過去に囚われてはいないと述べたことである。更に、仲忠の態度は「見たてまつりしかば、忘れはべりにき。今はた、いぬなど侍れは。さ思ひはべりけむとこそ。(蔵開 上・428 頁)」という発言からも窺える。つまり、仲忠は、あて宮のことを忘れがたいものの、女一の宮と結婚した後は、三者の関係を新たに位置づけようと努めているのである¹⁰。こうして見ると、「昔」の出来事への思考を繰り返し、「今」の生活に向き合っていない女一の宮のありようが明らかになってこよう。言い換えれば、女一の宮は「昔」の時間を生きて、過去の出来事への強い執着を示している人物なのである。

三角関係に巻き込まれた女一の宮は、心の平穏を失い、幼馴染のあて宮への嫉妬心を制御できず

¹⁰ 大井田晴彦は、「もちろん、(仲忠は) 藤壺のことを忘れることなどできるはずもない。しかし、過去の恋はかけがえのない思い出として胸中に封じ込め、藤壺との新しい関係を模索しながら、宮との幸福な家庭を築いていこうとするのである」(「仲忠と藤壺の明暗―「蔵開」の主題と方法―」、『うつほ物語の世界』、風間書房、2002 年、145 頁)としている。

にいる。そして、あて宮を未だ恋慕している夫の仲忠にも不満の情を募らせていく。

(仲忠) かくばかり見ねば恋しき君をいかで知らでむかしをわが過ぐしけむ

(女一の宮) 限りなくありしむかしの見えしかば今もわれにはあらじとぞ思ふ

(蔵開 中・468—472 頁)

これは、講書のため宮中に滞在する仲忠からの和歌、及び女一の宮の返歌である。仲忠は和歌において、妻である女一の宮への思慕の情を表し、結婚前に彼女の良さを見出せなかったことを後悔している。贈歌を受けながら、女一の宮は、昔からあなたの愛情は限りなくあて宮にあり、今も私にはないと返歌し、あて宮に対して昔の恋心を抱えている仲忠を非難し、夫の不真面目さを責める。女一の宮の歌からは彼女が仲忠に感じた不信や不満と、仲忠の心を奪ったあて宮への嫉妬が窺える。

不如意な結婚生活は女一の宮に屈折した感情を露わにさせ、身分にそぐわない行動を取らせていく。例えば、女一の宮は、懐妊したことを仲忠に知らせずに、夫に自分の体を心配させ、祭や祓などを大騒ぎで行わせた。その為に、彼女は典侍から「腹汚く、幼くおはします」(国譲 中・184 頁)と評されている。更に、母になったにもかかわらず、子供を育てる責任感もないことで、仲忠に「頼もしげな人の親」(蔵開 上・400 頁)と非難されている。結婚後の女一の宮は、不適切な妻であり、また不適切な母でもある。このような状況のもと、不如意な結婚生活における女一の宮が、感情的な三角関係や、妻・母としての社会的な役割から逃れようとしているかのように、結婚する前のあて宮と共に正頼邸で育った「昔」の時間を憧憬する様子が見られる。

宮、「ここにもこれかれ集ひて、男にも女にも疎からぬどち、遊びをもし、物語などをもしならひて、さりし人をばいと疎くもてなして、音にも聞こえ、影にも見えしかば、恐ろしく恥づかし、と思ひし者に向かひ居たるは、あれか人にもあらず、あやしきままにむかしの恋しく思ほゆれば、すなはちまうで来むと思ひしかど、からうしてこそ」と聞こえたまふ。

(国譲 上・89 頁)

これは、女一の宮が、東宮から正頼邸へと退出するあて宮に対し、仲忠と結婚した後の心境を語る場面である。女一の宮の発話には、前半において、仲忠と結婚する前の生活を懐かしみ、皆で管絃の遊びをしたり、世間話をしたりした「昔」を憧憬していることが伝わる。後半では、当代随一の貴公子である仲忠に感じる劣等感(仲忠に相応しい相手は自分よりあて宮の方だという意識に基づいたものか)が語られている。そこからは、女一の宮の憧憬する理想化された「昔」の様子が窺えるだけでなく、彼女が「今」の時間を「昔」に巻き戻そうとしている時間逆行の願望も捉えられる。

以上、女一の宮が始終「昔」ととらわれ、執拗に「昔」の時間を生きる様子を見てきた。そして、彼女が「昔」の出来事への執着や、「今」という進行する時間に抗い、拒否する姿勢を読み取ってきた。本稿では、女一の宮のこの姿勢を不如意な結婚生活からの逃避として解釈しておきたい。この

姿勢はまた、皇女として課せられた仲忠の妻・犬宮の母という社会的な役割からの逃避とも解せる。女一の宮は、朱雀帝によって仲忠に授けられた皇女であり、皇室及び正頼家が琴の一族との結びつきを強化させる政治的な存在でもある。しかし、上掲した資料に見えるように、彼女にはそのような社会や制度が求める役割から離れようとする傾向が見られる。次節では、女一の宮が抱く時間を遡行したいという願望を示す「むかしを今に」という古歌について検討を加えていく。

4、「昔」を繰り返す願望——「むかしを今に」

結婚前の昔の時間や出来事に強固な執着心を示す女一の宮の文には、「むかしを今に」とあり、「昔」に関する『伊勢物語』の古歌の一節が引用されてくる。以下にその具体的な文脈を見ていく。

（女一の宮）いとめづらうまかでたまへるを、いつしかとこそ待ちきこえつれ。などか、それよりものたまはざらむ。いかで対面もとくもがな。ここにてさへおぼつかなきままに、「むかしを今に」とのみなむ。ここには立ち寄りげも。そなたに参り来ば。のたまはむに。

（あて宮）承りぬ。まかではべりては、すなはち、めづらし人をもまづとこそ。ここにこれかれものしたまへりけるに、聞こえさせ、承るとてなむ。渡らせたまはむとか。いかでか。御守りは恐ろしかめれど、今そなたにを。 （国譲 上・51—52 頁）

これは、あて宮が第三子懐妊を機に正頼邸へ里下がりした際、女一の宮があて宮に宛てた手紙、及びその返事である。女一の宮は久方ぶりに再会を果たしたあて宮への思慕を綴り、里帰りを祝した上で、「むかしを今に」という古歌を引用し、昔、自由に会い交わっていた頃（結婚する前、正頼邸で育った頃）に時間を遡行させたいという願望を示している。一方、女一の宮の掲げる「昔」に憧れるあて宮は、彼女の面会の要求にも積極的な姿勢を見せている。

女一の宮の発言にある「むかしを今に」という一句は、『伊勢物語』の第三十二章段に見られる古歌の引用であることが留意される。この一句は、原拠となる『伊勢物語』では次のような文脈の中に置かれている。

むかし、ものいひける女に、年ごろありて、
いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな
といへりけれど、なにとと思はずやありけむ。¹¹ （『伊勢物語』・143 頁）

この章段では、ある男が、長い間連絡を取れなかった昔の恋人に向けて、昔の思い出を懐かしみつつ、歌を詠み送るという物語が展開される。『伊勢物語精講』によれば、「しづ（倭文）は、しずおり、古代の織物であるから、『いにしへ』を冠した。『をだまき』（苧環）は、しずを織るための糸

¹¹ 『伊勢物語』のテキストは、新編日本古典文学全集 12（小学館、1999～2002 年）により、頁数を記した。引用文中の傍線は筆者による。

を内をうつろに外をまるく巻いたものをいう。くるくると繰り返して糸を巻きつけるから、『くりかへし』の序に用いられている。『古今集』巻十七、雑上に、よみ人しらずとして『いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありしものなり』の類歌がある¹²という。つまり、繰り返す輪廻のような「をだまき」は、ここでは「昔の時間を今に繰り返すこと」の比喩となっている。ある男は、昔の恋人にこの歌を送ることで、過去への追憶を相手と共有し、「昔」の時間や愛情を取り戻そうとしているのである。

『伊勢物語』三十二章段は、従来、昔男の恋愛に関する章段であるとされ、そのため「むかしを今に」という歌には恋歌の性格がある¹³と捉えられている。つまり、昔男が「むかしを今に」という歌を詠み送るのは、恋人との昔の愛情を取り戻す意向があると考えられている。人物関係の視点では、『うつほ物語』における女一の宮やあて宮（姪や叔母・女性同士）の場合とは異なるものになる。しかし、時間の視点では、歌のモチーフやそこに込められたよみ人（手紙の書き手）の昔に対する感情は共通していると見られる。「むかしを今に」という歌には、詠み人の時の変遷に関する郷愁と懐古の情が含まれている。更に、注目すべきは、この歌には時間の流れへの感嘆だけでなく、よみ人が時間を遡行し、「昔」を復活させようとしている願望が込められているという点である。この観点では、女一の宮は昔男の願望と共通していると言える。言い換えれば、『伊勢物語』のストーリー展開と昔男の心情が、『うつほ物語』の女一の宮に共有されている。『うつほ物語』の場面で、女一の宮とあて宮たちは、「むかしを今に」という一句が手紙に出てきた際に、『伊勢物語』三十二章の場面と詠み人の心地や心情まで想起し、コミュニケーションを取っていたこととなる。

さて、和歌のよみ人の感情や願望を確認してきたが、和歌を受ける側のあて宮はどうであろうか。ここで留意されてくるのが、『伊勢物語』では女の方は歌に感動することではなく、男に返歌もせずにいるという点である¹⁴。一方、『うつほ物語』ではあて宮は女一の宮の歌に心を動かされ、その呼びかけに積極的に応えている。あて宮は、入内した後、夫である東宮に対して女性としての不満を抱いているため、昔の生活を懐かしむ様子が見られる¹⁵。そのため、彼女が女一の宮の誘いに積極的に応じることも違和感なく理解できよう。かくして、歌のよみ人の感情や願望が共通して見られるにもかかわらず、和歌の受ける側の反応が正反対となる。女一の宮にとって、あて宮が「昔」へ憧憬をも抱いていることは、双方ともに今を「昔」に巻き戻したいという意欲が込められており、それによって「昔」への回帰を可能としていると言える。もちろん、現実的には時間遡行の可能性は存在しないが、登場人物双方の積極的な態度により、物語は場面の反復や再現を通じて、登場人物の「昔」を繰り返す願望が達成されるという方向へと進んでいくと考えられる。

以上、「むかしを今に」という一句に込められた詠み人の心地や心情が女一の宮とあて宮に共有され、二人の贈答文に引用されてくる様子を見てきた。この古歌の一句に込められる発話者の今を昔

¹² 池田亀鑑「評釈篇」『伊勢物語精講』、學燈社、1956年9月、120頁

¹³ 『伊勢物語』の注釈書によれば、「ものいひける女」とは「性的交渉まであった仲の女」（竹岡正夫、『伊勢物語全評訳』、右文書院、1987年、610頁）、「情交のあった女」（新井無二郎、『評訳 伊勢物語大成』、湯川弘文社、1966年、347頁）を意味し、この章段に登場する男女はかつての恋人関係にあったとされる。

¹⁴ 『伊勢物語全評訳』（前掲注13に同じ）では、女の「現実性」が指摘される。

¹⁵ 東宮に入内したあて宮が苦しい胸の中を語る場面が数か所に見られる。「蔵開 上」巻（408 - 409頁）における、あて宮が兄の祐澄の入内によってもたらされた苦痛を訴え、入内する前に里での生活を懐かしむ場面が挙げられる。

に巻き戻したいという願望は、女一の宮と昔男に共通して見られると言える。但し、歌を受ける側の反応が違ってくる。『伊勢物語』のある男の過去の恋人は、歌に感動を示さない一方で、あて宮は胸を打たれ、女一の宮にできるだけ早く会いたいと返信することになる。この違いは、『うつほ物語』が『伊勢物語』の影響を受けながらも、その枠を超えて独自の展開を見せており、この展開により、女一の宮が期待する「昔」に擬似的に回帰する状況が生まれると考えられる。即ち、「むかしを今に」という古歌は、女一の宮にとって今の時間を昔に巻き戻し、または理想化された「昔」を繰り返す潜在的な可能性を与えるものとして解釈される。

5、理想化された「昔」の再現：管絃の遊び

女一の宮が期待する理想化された「昔」について、第三節では不如意な結婚生活や、妻・母としての社会的な役割から逃れる時間として読み取った。また、「ここにもこれかれ集ひて、男にも女にも疎からぬどち、遊びをもし、物語などをもしならひて」（国譲 上・89 頁）という条からは、その具体像を窺うことができる。つまり、親近者と世間話をしたり、管絃の遊びをしたりすることは、「昔」という時間に逃れることを意味するのである。

あて宮求婚譚を基軸とした物語の前半部では、女一の宮の登場は稀である。彼女が登場する場面では、自身の言辞や心情変化をそれほど示さず、一文だけの記述が多く見られる。但し、これらの場面を辿ってみると、多くの場合、あて宮をはじめとする正頼家の女君たちと共に管絃の遊びをするものであることに気付かされる。ここで、結婚前の女一の宮が管絃の遊びをする場面について確認しておきたい。

ア) . (絵指示) あて宮琴の御琴、今宮箏の御琴、御息所琵琶、大宮大和琴調べたまへり。

(藤原の君・201 頁)

イ) . 興ある夕暮れに、女方の御前に、君たちものの音かき合はせて遊ばす中に、あて宮、か的一条殿のを買はれたるみやこ風といふ琴を、胡茄の声に調べて、こくのめてたといふ手折り返し遊ばす。

(春日詣・269 頁)

ウ) . よろづおもしろき夕暮れに、八の君、今宮、姫宮、御簾巻き上げて出でおはしまして、例の御琴ども弾き合はせて遊びたまふ。

(嵯峨の院・308 頁)

エ) . 女君たち御琴どもかき合はせ、男君たち笛ども吹き合はせ、琵琶、御琴、馨打たせ、呂の声に合はせて遊ばし (後略)

(祭の使・465 頁)

オ) . 月のおもしろき夜、今宮、あて宮、簾のもとに出でたまひて、琵琶、箏の琴、おもしろき手を遊ばし、月見たまひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、調べよりはじめ、違ふ所なく、わが弾く手と等しくと聞くに、静心なし。

(祭の使・502 頁)

カ) . 後の宮、女一の宮よりはじめたてまつりて、大將殿の君たちに、御琴弾かせたてまつりたまふ。

(菊の宴・51 頁)

ア) は、七夕の際、女一の宮が河原であて宮たちと管絃の遊びをする場面である。イ) は、春日神社へ参詣した際に催された歌会で、女君たちが楽器を合奏して管絃の遊びをする場面である。ウ) は、正頼邸で女一の宮を含む女君たちが、男君たちと合奏する場面である。エ) は、正頼邸で開かれた宴で、女君たちが男君たちと合奏する場面である。オ) は、女一の宮があて宮と琴を演奏しつつ、月見をし、音楽の世界に没頭した二人は、仲忠が東の簾の子の後ろで、密かに聞いていることにも気付いていない場面である。カ) は、大後の六十の賀、嵯峨の院で女一の宮をはじめとする女君たちが琴を弾く場面である。

これらの場面を確認してみると、行事、祭りや宴会という公的な場合（ア、イ、エ、カ）と、女一の宮が親近者と遊ぶ私的な場合（ウ、オ）とがあることに気づく。ここでは、女一の宮、あて宮、仲忠の三人のみが関わるオ) の場面に注目する。従来、この場面はあて宮と仲忠の抑圧された愛情という観点から論議されてきた¹⁶。本稿では、女一の宮にとって、この時の事が懐かしい思い出になっている点に留意したい。幼少期に正頼邸で育った彼女は、この時点ではまだあて宮や後の夫である仲忠の恋愛に深く関わっておらず、また、妻や母としての役割も課せられていなかった。結婚後、この時の事を思い出して「うち笑ひたまふ」（沖つ白波・297 頁）という反応になるのは、彼女が少女期の気楽さや、三人の間の平穏であった関係を懐かしんでいるからであろう。

再び「国譲・上」巻に戻り、女一の宮があて宮に「むかしを今に」という古歌の含まれる手紙を宛てた以後の文脈を振り返ってみよう。あて宮は女一の宮の歌に心を動かされ、その呼びかけに積極的に応じ、二人の面会を望むようになる。続いて、女一の宮は妹の女宮たちを伴い、あて宮の居所を訪れることになる。

藤壺、「いと久しうはべらぬわざ、今宵いかで。御前には常に遊ばすらむものを」。宮、「さらに。ここにもせむ。つれづれなるにかき鳴らせば、『つれなしや、まばゆしや』など笑へば、見だにぞ見ぬ。いざ今宵忍びて」とて、琴の御琴ども取り出ださせたまふ。かたち風をば藤壺、やまもりは一の宮、箏の琴は二の宮、琵琶は姫宮、大和琴はあなたの孫王の。御前ごとにうち置きて、まづ琴の御琴をかき合はせつつ遊ばす。いと面白し。…中略…琴の音ども弾き合はせて遊びたまふほどに、大将、宮の御迎へにとてものしたまひけるを、琴どもの声しければ、みそかに立ち寄りて、高欄の下にて聞きたまふ。（国譲 上・96—97 頁）

あて宮は女一の宮の訪問に喜びを表した。古い友情を語り合った後、二人は長い間触れていなかった楽器を再び手に取り、昔のように演奏を始めた。女一の宮が仲忠に秘密にしようとしている管絃の遊びは、高欄の下で仲忠に密かに聴かれてしまう。今夜行った管絃の遊びは、「昔」を憧憬する女一の宮にとって、一時的であるものの、昔の時間を今に繰り返し、感情的な満足感を与えることになったと言える。物語は彼女の記憶に刻まれた「昔」を甦らせたとも言える。特に、女君たちの

¹⁶ 新編日本古典文学全集の頭注（祭の使・506 頁）では、この場面を通して「仲忠やあて宮の心の内奥」が示されているとしている。つまり、入内する前にあて宮と仲忠は相互に好意を寄せ合っているという観点である。更に、大井田晴彦はこの場面について、二人の愛情が日常の生活で抑圧されていた（『うつほ物語』の転換点―「内侍督」の親和力―、『うつほ物語の世界』、風間書房、2002 年 12 月、121 頁）と説く。

演奏が仲忠に聴かれるという点に留意した場合、この場面は「祭の使」巻での音楽の遊び（前掲オの場面）を再現するものであるとも言える。

本節では、女一の宮の理想化された「昔」の具体像、すなわち女君たちとの管絃の遊びの場面を考察した。特に、「むかしを今に」という古歌を通じて、昔の管絃の遊びが再現される様子を検討した。「国譲 上」巻での管絃の遊びの場面は、過去の反復であると同時に、女一の宮に昔に戻るような内面的な充足感を与える役割を持っていると考えられる。

結論

女一の宮は、朱雀帝によって政治的な持ち駒として利用され、仲忠に下賜されている。従来、彼女がこの政略結婚において制度的役割を果たし、皇室（正頼家）と琴の一族双方に政治的な利益をもたらす側面が注目されてきた。これに対し、本稿では一個人としての女一の宮の視点から、彼女の内面的な感情を時間という観点から捉え直した。考察の過程で注目したのは、結婚後の女一の宮が「昔」の出来事に強い執着を示し、頻繁にその話題に言及している点である。彼女の「昔」に関する言辞をクローズアップしてみると、不真面目な夫仲忠への不満や、幼馴染のあて宮への嫉妬心が観察された。このような状況下で、女一の宮は、結婚前の理想化された「昔」の時間に憧憬の念を抱くに至った。その「昔」とは、具体的には親近者と世間話をしたり、管絃の遊びをしたりすることである。女一の宮が執拗に「昔」の時間を生きる姿勢は、不如意な結婚生活や皇女としての社会的な役割からの逃避と解した。

果たして、彼女は自らの意向で、「今」から「昔」へ時間を巻き戻すことが可能であろうか。本稿ではこの問題意識に基づき、昔に関する女一の宮の言辞には「むかしを今に」という『伊勢物語』の古歌の一節が引用される点に注目した。この古歌は女一の宮の時間を遡行したいという願望を示しているだけでなく、理想化された「昔」を繰り返す可能性をも彼女に与えている。結果として、後段の文脈において、女一の宮の憧憬する「昔」が管絃の遊びとして再現される。これは、物語内の不可逆な時間の進行が一時的に停滞することを意味し、女一の宮に時間を遡行するような内面的な充足感を与えているとも言える。本稿では女一の宮の心情や内面的な世界を探究することで、彼女の幸福感や自己認識といったテーマを浮き彫りにした。これにより、女性の視点から物語の展開や構造の分析が可能となった。

第四章 立坊争いにおける藤原氏の敗北

—「盗人」に見られる後の宮の嫉妬心を手掛かりに—

1、問題提起と先行研究

立坊に関する政治的な問題を取り上げる「国譲」という巻は、梨壺腹の第三皇子を擁する藤原氏と、あて宮腹（藤壺）の第一皇子を擁する源氏との間の権力闘争がテーマとして描かれている。その中で、後の宮が藤原氏側のリーダー役として積極的に政治的な駆け引きを行い、梨壺腹皇子を坊に据えるために活躍している。彼女の帰属する藤原氏側の状況を確認しておく、「国譲・上」巻冒頭に描かれている源正頼の兄、元太政大臣季明の病死によって、忠雅が太政大臣に、兼雅が右大臣に、そして、仲忠が大納言に昇進するという政治的な優位性がもたらされたことが分かる。しかし、立坊争いにおいて優位な立場にある藤原氏は、最終的に敗北を喫したことになる。

先行研究では、立坊争いにおける藤原氏の敗北について、様々な観点から論じられてきた。源氏側の姿勢という観点では、室城秀之が、正頼によって構築された「横の系図の論理」（女子による姻戚の連帯の拡大）に焦点を当て、それによって形成された姻戚関係こそが、源氏の勝因であると結論付けている¹。また、湯浅幸代は、東宮の「心ざし」（愛情）を語るあて宮が、男女・親子の愛情を基とした人間の絆を見定め、それによって勝利したと説く²。上述の論文は、源氏が正頼の策定した閥閥政策という政治戦略を用いて政治的な影響力を拡大し、最終的に立坊争いに勝利したと解釈するものである。物語の主題という観点では、大井田晴彦が、物語が撰関的な体質を有して、「自家の権益のみを志向する」後の宮を批判すると説く。また、大井田氏は「国譲」巻における律令制の理念を謳う主題をも指摘する³。上杉香菜は「官人である作者は、儒教的な政治世界（律令制）に理想を求めている」としつつ、そのため、作者は、藤原氏の撰関政治の確立に尽力する後の宮を「パロディ化・孤立化」する手法を用いることで、彼女を失敗に導いていると指摘する⁴。上述の論文は、撰関政治の体制を批判し、文章経国の理念や律令制度を讃美する物語の価値観、或いは主題を読み取るものである。藤原氏側の姿勢という観点では、沼尻利通が「国母の政治性という点でいえば、現実の撰関政治においては、理想的権力構造であるはずの後の宮の政治構造が、むしろ『私的な葛藤』によって決壊していくさまがあらわれているといつてよい」と説く⁵。つまり、沼尻氏は、後の宮が藤原氏出身の国母として果たした公的な役割に焦点を当て、藤原氏の敗北原因を男君たちの私的な打算が後の宮の公的な心と対立したことに求めているのである。

先行研究を概観すると、立坊争いにおける藤原氏の敗北を検討する際、政治的論理に関わる後の宮の公的な側面に注目する傾向が見られる。しかし、政治的な闘争が繰り広げられる「国譲」巻に

¹ 室城秀之は、「藤原氏は、太政大臣・右大臣以下の勢力を擁し、後の宮が〈筋〉を盾にして、梨壺腹の皇子の立坊を画策しても、結局は、正頼が築きあげてきた〈横の系図の論理〉のもとでは、敗北せざるを得なかった」と説く。更に、室城氏は後の宮を「源正頼と対抗し得る、唯一、政治的な存在」として位置づけている（『うつほ物語と源氏物語』、『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月、297-298頁）。

² 湯浅幸代『『うつほ物語』国譲巻に見る氏族の論理：「かぐや姫」の見定める「心ざし」と『九条右丞相遺誡』の「一心同志」から』（『日本文学』、第66巻第2号、2017年2月、10頁）

³ 大井田晴彦「『国譲』巻の主題と方法—仲忠を軸として—」（『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月、168-170頁）

⁴ 上杉香菜『『うつほ物語』後の宮考—国母と撰関家—』（『広島大学国語教育会 国語教育研究』、第50号、2009年3月、15頁）

⁵ 沼尻利通「物語の国母—『うつほ物語』『源氏物語』を中心に」（『日本文学』、第51巻第9号、2002年9月、13頁）沼尻氏は、後の宮を「撰関政治における国母の役割を背負った典型的な人物」として評している。

において公の立場に置かれるように見える後の宮ではあるが、一人の女性としての私的な感情が数か所で表出されることが確認されている。内藤英子は、後の宮が仁寿殿女御に対して抱いた憎悪や嫉妬に注目し、呂後の造形が後の宮像に投影されると指摘する⁶。更に、新里千佳は、内藤氏の論調を踏まえ、後の宮の嫉妬心が彼女を「悪女」として捉える要因になっていると説く⁷。これらは後の宮の人物造形に関する論ではあるが、藤原氏の敗北に関与する一要素としての後の宮の内面の感情を検討する際に、大きな示唆を与えてくれる。

果たして、後の宮の私的な感情が立坊争いにおける藤原氏の敗北にどのように関与しているのか。本稿は、そういった問題意識をもとに、後の宮の嫉妬心に焦点を当て、藤原氏一族の立坊争いにおける政治結束が弱体化した理由を各人の内面的な領域が抱えている私的な状況から探ろうとするものである。まず、立坊争いにおける後の宮の公の側面及び藤原氏の男君たちの私的な葛藤を確認する。次に、後の宮の私的な側面に注目し、彼女の発話に含まれる「盗人」という表現に焦点を当て、そこから一人の女性としての嫉妬心を読み取る。加えて、藤原氏一族が「女」という私的な状況をめぐって対立することで、立坊争いに敗北していく過程を具体化する。

2、後の宮の画策と男君の非協力

後の宮が持つ女性としての内面の感情を考えるにあたって、まずは立坊争いにおける彼女の公的な側面及び藤原氏の男君たちの私的な葛藤から確認しておきたい。

（後の宮）「ただ、人の国にも、大臣、公卿定めてこそは、よろづのことをもしけれ。これかれ心を一つにて、このことを、かくなむあるべき。この筋のむげになくはこそ、異筋の交じらめ。かくさるべき人をおきてはいかでかと、おのらもそこにも申さばこそは、さすがに道理失ひたまはず、賢しくおはする人なれば、心には飽かず悲しと思すとも、世を保たむと思ほす御心あらば、許したまふやうあらめ。おのれ一人、かうなむ思ふとは申さじ」。

（国譲 下・254 頁）

これは、朱雀帝の譲位が間近に迫った際、後の宮が藤原氏の男君たちを宮中へ招いて、梨壺腹皇子の立坊を謀ろうとする場面である。後の宮は、「この筋（藤原氏の血統）」の優越性を強調し、藤原氏の皇子の立坊が慣例である⁸と思い込み、梨壺腹皇子を差し置いて源氏の血統を持つあて宮腹皇子を坊に立てることは適切ではないと主張している。更に、彼女は一族の将来の栄華という大義名

⁶ 内藤英子は、「戚夫人に対する呂後の怨念が、後の宮に重ね合わされる」とし、「後の宮の立坊争いに向かう原動力が仁寿殿の女御に対する深い怨念である」（『後の宮の造型——『うつほ物語』から『源氏物語』へ』、『古代文学研究 第二次』、第17号、2008年10月、6—9頁）と述べている。

⁷ 新里千佳「後の宮、「悪女」という造形の偽装」（『うつほ物語——国譲巻の世界』、武蔵野書院、2021年11月、209頁）

⁸ 新里千佳は、『うつほ物語』の権力構造を振り返ってみると、冒頭の「藤原の君」巻から嵯峨天皇を囲む多氏の貴族が朝廷を支えていた。『うつほ物語』内の歴史においては、「藤原の〈筋〉」は絶対的な明文ではなかった（前掲注7に同じ、214頁）としている。新里氏は、藤原氏の「筋」に対する異常なまでの執着が、後の宮が「悪女」として位置付けられる一因であると指摘している。

分を前面に押し出し、中国の故事を引用し⁹、忠雅、兼雅、仲忠、忠俊、直正ら男君に梨壺腹皇子の立坊に協力するよう働きかけ、藤原一族内部の「一つ心」を期待している¹⁰。

後の宮の行動からは、彼女が名門氏族の出身として持つ高い自尊心が見受けられ、加えて藤原氏一族の最高指導者に匹敵するような政治力を持ち、一族の利益を重視する性格も観察される。しかし、藤原氏の男君等は立坊争いにおいて、後の宮ほどの積極性をそれほど示していない。

臣下といふものは、君の若くおはします、御心の疎かにおはします時こそ侍れ、かく明王のごとおはします世には、何ごとをかは定めまうす。(国譲 下・253 頁)

後の宮からの要請に対し、藤原氏の長に当たる忠雅は、「臣下の道」という建前の論理によって拒否した¹¹。しかし、実際には後の宮の意向に従うと、妻である六の君の実家（源氏）に不利益をもたらし、その結果、妻の不快や不満を招くことを懸念しているのである。一方、藤原氏内部の密会の後、六の君は後の宮が忠雅を婿取るといふ噂を聞き、夫に不信感を抱いて実家に戻ったまま夫の迎えを拒んでいる。このため、忠雅は途方に暮れ、参内せずに家に籠る日々が続いている。

おとど、かくやむごとなき折にも参りたまはず、君たちをのみもてわづらひたまひつつ、姫君をば、北の方のいと愛しうしたまひしかば、これ見には、さりとも渡りたまひなむ、と思しつつ、目を放ちたまはずもらへておはする。(国譲 下・287—288 頁)

結婚以来、六の君を「私物」(国譲下・277 頁)¹²のように扱っている忠雅は、娘を通じて愛する妻の心を取り戻そうとすることに没頭し、今上帝の即位の大礼にも理由をつけて出席しない。この行動からは、彼が公的な事務より妻との関係修復という個人的な問題を優先する愛妻家としての一面が窺える。

一方、六の君の頑固な態度や行動を仲忠、忠俊および直正等は誤解し、それを正頼からの警告だと受け取る。つまり、藤原氏の策謀が源氏の利益を妨害する場合、正頼は娘たちを夫から無理に引き離し、離婚を強いることで対抗しようとするのである。

⁹ 後の宮に引用された故事とは『史記』留侯世家における「四皓の故事」である。この故事は、呂后が留侯張良の策略を利用し、四人の名高い隠士を招いてきて、太子に帰順させるというものである。これにより、太子である劉盈の政治的な影響が拡大し、太子の地位が守り抜かれた結果となっている。後段の文脈では、兼雅に送った立坊の件を促す手紙にも、この故事が含まれている。「四人の翁を語らひてこそ、ことはなしかれ。五人の心を一つにて、むかしよりかうなむある。」(国譲 下・292 頁) という。

¹⁰ 湯浅幸代は、「一つ心」「心を一つ」という表現に注目し、後の宮の策略が、「史上の藤原氏、なかでも摂関を占めていく九条流の『一心同志』の心得に通じ」る(前掲注2に同じ、9 頁)と論じつつ、史上の藤原氏の政治的手法との関連性を読み取っている。また、内藤英子は、後の宮が四皓の故事を引用することで、梨壺腹皇子の正当性を主張していると説き、「この中国の故事が後の宮の立坊争いにおける行動の規範となっている」(前掲注6に同じ、6 頁)としている。

¹¹ 神谷正彦は「忠雅の主張が「君臣の道」といういわば公的立場を踏まえた『タテマエ』であるのに対し、兼雅の主張は、あくまでも私的な姻戚という血縁関係のうえに立ったものである」(『宇津保物語』「後の宮」考)、『源氏物語の内と外』、風間書房、1987 年 11 月、321 頁)としている。

¹² 前稿で確認したように、「私」を人に対する修飾語として用いる場合、対象者への個人的な愛情や特別視する感情が含まれている(第一章「琴曲に巻き込まれる朱雀帝―「私の后」を端緒に一」)。

右大将、われもかかる目をや、と思し怖ぢて、歩きもしたまはず。夜昼添ひ居て、御消息あれば、まつ取りて、人の参りまかですれば、車の音すれば、尋ね問はせたまひて、心ゆるびなく思す。
(国譲 下・288 頁)

仲忠は正頼の婿ではないが、正頼の孫娘である女一の宮と結婚したため、忠雅と同様の事態に直面することを危惧し、妻から一步も離れずに見守り、神経を尖らせている¹³。

宰相、藤大納言などは、太政大臣をだに、かくしたてまつりたまへば、ましていかに、など思ほしつつ。
(国譲 下・286 頁)

同様に、三の君を娶った直正や八の君を娶った忠俊も、父である忠雅の境遇を目の当たりにして、正頼の政治的手段に対する懸念を抱くようになる。かくして、正頼の閥閥政策に取り込まれた藤原氏の男君たちは、私的な姻戚や愛する妻を大切にすることで、後の宮の呼びかけに消極的で非協力的な態度を示すことになる。このような事態は、兼雅が最初の密会の際にすでに予測していたことでもあった。

ここに五人候ふ人は、四人はみな犬に侍り。兼雅もこの朝臣侍れば、思ひすべきにも侍らず。
(国譲 下・255 頁)

兼雅は、後の宮の呼びかけに対して賛同しかねる理由として、自分以外の男君がみな源氏の婿であることを挙げたうえで、更に自身が万事に関して息子の仲忠と相談し、その立場を優先するという意思を表明している。兼雅には他にも女三の宮腹の梨壺や、宰相の上腹の小君という子供たちがいるが、最愛の妻である俊蔭女を母とする仲忠を特に偏愛し、最も重視しているのである。おそらく、兼雅は梨壺腹皇子の立坊が実現することで、女三の宮の地位が相対的に向上し、それに伴って、俊蔭女・仲忠母子の位置が低下する可能性を懸念しているであろう¹⁴。

以上、立坊争いにおいて藤原氏の血を引く皇子を擁立し、一族の権益を図ろうとする後の宮の公的な側面や、一族の権益よりも姻戚関係や愛する妻を優先する男君たちの私的な葛藤について検討を加えてきた。このような視点から見ると、藤原氏の敗北は、男君たちの私的な計算と後の宮の公的な心が衝突した結果であるかのように見える。しかし、後の宮は、「国譲」巻において私的な側面、特に女性としての内面の感情をも見せてゆく。果たしてその感情は藤原氏の敗北にどのような関与を見せるのか。次節では、そのような問題意識のもとに、後の宮の私的な感情に関する考察を行う。

¹³ 仲忠が、梨壺腹皇子の立坊に消極的な態度を示すのは、女一の宮が正頼に取り上げられることを危惧する一方で、長年にわたるあて宮への恋愛感情が影響しているためであろう。この点について、兼雅も「よろづのこと、仲忠の朝臣に語らひて侍るを、おほかたの心寄せよりも、また思ひはべるめる筋侍めれば、よにも動じはべらじ。(国譲 下・262 頁)」と推測している。

¹⁴ 三上満「宇津保物語「国譲」の巻の方法と構造」(『日本文学』、第36巻第11号、1987年、51頁)

3、「盗人」に見られる仁寿殿女御への嫉妬心

後の宮は、梨壺腹皇子の立坊に対して消極的な姿勢を示す男君たちに苛立ちを隠せない。しかし、後の宮の苛立ちは同族の男性たちだけに向けられるわけではない。「国議」巻において、後の宮は朱雀帝の御前で仁寿殿女御を二度も「盗人」と罵倒する場面が描かれている。以下にその具体的な様子を見ていく。

①上思ほすやうは、…中略…左大臣の思はむことあり、こくばくの皇子の祖父にて、かくあること思ひて、女御をもまかでさせたまひて、参らせずはいかがせむ、と思ほして、…中略…(後の宮)「この仁寿殿の**盗人**」よりのたまふぞかし。不興したてまつりて籠りをりて、恋ひ悲しび待ち居て、**青蠅**のあらむやうに立ち去りもせでおはすれば、いかに恐ろしく思さるらむ。さる人のゆかりをこそ思すらめ」。(国議 下・263—264 頁)

②朱雀院では、帝安くもおはしまさず、出で入り思ほし嘆きて、おはしまさむとすれば、後の腹立ちて、ののしりたまひて、いみじきことをしたまひて、「この**盗人**死ななむ」と、手打ちてのたまへば、御心を破らじとて、えおはしまさず。(国議 下・372—373 頁)

①は、後の宮が梨壺腹皇子の立坊を朱雀帝に提案する場面である。後の宮が東宮即位の日に、梨壺腹皇子を次の坊として定めたいと要求するが、朱雀帝は自身の考えがあるためその提案を拒絶する。朱雀帝は、政治情勢や臣下たちの勢力分布を見極めた上で左大臣である正頼の勢力に配慮している。そして、嫡妻である後の宮よりも正頼の長女である仁寿殿女御を最も寵愛しており、彼女が正頼によって内裏から引き離されることを懸念している。一方、後の宮は帝の拒否を聞き、仁寿殿女御を「盗人」や「青蠅」¹⁵などと罵り、恨みの感情を露わにすると共に、朱雀帝が仁寿殿女御を重視するばかりでなく、彼女の血縁者であるあて宮腹皇子の立坊をも実現しようとしていることに苛立ちを覚えている。②は、仁寿殿女御の娘である女一の宮が難産したとの報告を受けた際の朱雀帝や後の宮の反応を描いたものである。朱雀帝は心配のあまり見舞いに行こうとするが、後の宮が朱雀帝の気持ちや行動を察知し、怒りを露わにして、仁寿殿女御や女一の宮を「盗人」と罵倒し呪詛の言葉を投げかけるという極端な行動に出た。最終的に、朱雀帝は後の宮の心情に配慮して見舞いを断念することとなった。

仁寿殿女御という女性は、左大臣の正頼の長女であり、朱雀帝の後宮で時めく女御として「藤原の君」巻に登場する人物である。彼女は朱雀帝の最も寵愛する「一の女御」とは言え、立后はされなかった。また、彼女には男皇子が四人いるが、いずれも立坊されなかった。一方、後の宮は皇后

¹⁵ 内藤英子は『「青蠅」の語には、讒言をする人が他人を陥れるという意味があり、「仁寿殿女御が帝に取り入って讒言をする悪者のイメージを帯びることになり、先に入内し東宮の母である後の宮の方が正当な立場にあることを強調している」(注6に同じ、4頁)としている。内藤氏は、後の宮が仁寿殿女御を「青蠅」と罵ることで、自らの政治的な駆け引きの正当性を強調しつつ、仁寿殿女御への怨念も間接的に示していると指摘している。内藤氏は「青蠅」という表現について、朱雀帝を指す論調(『新編日本古典文学全集』264頁における解釈)と仁寿殿女御を指す論調(『うつほ物語 全』751頁における解釈)の二つに分かれる中で、後者の立場を取っている。

の地位にあり、自分の息子も立坊された。つまり、「国譲」巻の時点では、後の宮は皇后としての地位が安定しており、仁寿殿女御が朱雀帝からの寵愛を受けているとは言っても、後の宮の地位を脅かすことはできない。また、後の宮の息子もすでに東宮として確立されており、仁寿殿女御の皇子が東宮と皇位継承を争う心配もない。自分の社会的な利益や権威がそれほど脅威を受けているわけではない後の宮は、一体どのような理由で仁寿殿女御を憎悪し、「盗人」と罵倒するのであろうか。

「盗人」という表現は、一般的に、他人の財産を不正に奪う者を指す。泥棒、盗賊と同様の意味である。物語史における用例を辿ると、『竹取物語』での使用が確認される。

かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さむとするなりけり。 (『竹取物語』・49 頁)

ここに示されている用例は、龍の頸の玉を得ることに失敗した大伴の大納言が、かぐや姫を罵倒した際に使用した言葉であり、「悪党」や「悪人」を意味する。大納言は、かぐや姫の難題が自身の命を脅かすものであると考え、命を盗む大悪党という意味で「大盗人」という表現を用いたのである。さて、「盗人」という表現は、泥棒や悪人を指す以外に、いかなる意味を内包しているのであろうか。再び『うつほ物語』に立ち返り、本稿で問題としている「盗人」以外の用例についても検討してみる。『うつほ物語』では、「盗人」の用例は計十二例が存在し、前述した泥棒や悪人を指す例を除けば、次の五例が導き出される。

- A. 上、「あぢきなの相盗人や」。いらへ、(仁寿殿女御)「さらにこそ知りたまへね。げに何ごとならむ」。(朱雀)「げに知りたまはずや。つれなくなものせられそ。かくのたまはむからに、右大将疑はむ」。(内侍のかみ・160 頁)
- B. 人々のいふやう、「わが君をわびさせたてまつる盗人の輩は、あだの戯れに戯れて、妬娼の誦経文捧げ持ちて、惑ひ来るぞ」と集まりて(後略) (蔵開 中・503—504 頁)
- C. (宮の君)「誰かは、宮にある人の限り、この盗人をよしといふ。人は幸ひの鬼にこそあめれ。」 (国譲 中・164 頁)
- D. 蔵人の少将、中納言の君とて御身につき仕まつる人に、よろづの宝物を取らせたまひつつ、「盗人に入れよ」とのたまへど、さるべき折もなし。 (国譲 中・191 頁)
- E. 宰相の中将、「この大将、今日盗人の気色を見てするにこそあらめ。宮たちもおはせで、いとうたばかりつべかりつるものを」とて、齒嚙みをして出でぬ。 (国譲 下・368 頁)

A は、朱雀帝が仁寿殿女御と右大将である兼雅を秘密を共有する盗賊同士と比喻し、二人の反秩序的な恋愛関係を疑っている場面での用例である。B は、兼雅の妻妾付きの女房たちが俊蔭女を罵る際の用例である。兼雅には正妻である女三の宮を含む複数の妻妾がいるが、俊蔭女は兼雅から特別な寵愛を受けたため、他の妻妾たちは不運な状況に追いやられた。その結果、他の妻妾付きの女房たちは、俊蔭女に対する女主人たちの怨念や嫉妬といった感情を自分たちにも重ね合わせ、俊蔭

女を非難することとなる。Cは、季明の大君が東宮の寵愛を独占しているあて宮を悪く言うという用例である。東宮は複数の妃を擁しているが、あて宮が入内して以降、他の妃たちに対する関心を示さず、専ら彼女に愛情を注いでいる。Dは、女二の宮を懸想する近澄が、女二の宮付きの女房を買収し、女二の宮を盗み出そうと企てる際の用例である。Eは、祐澄が仲忠の策謀により、女二の宮を盗み出すことに失敗したため、激怒して発した言葉である。

以上、「盗人」に関する事例はいずれも男女関係に絡む用法であることに気付く。例A、例Bおよび例Cは既婚夫婦の場合であり、夫が妻の不義密通を疑い、妻への不信感を示す(A)。また、複数の妻妾を持つ男性が、均等に愛情を分配できないことで、不遇な女性たちが夫の寵愛を独占する女性に対して嫉妬し、悪意を抱く(B、C)があることが分かる。例Dと例Eは、未婚の女君を盗み出し、強引に関係を結んでゆく男君の行動を指しており、その行動の反道徳的性質が言い表されている。本稿で問題としている「盗人」の例は後の宮が用いるものであるため、女性の立場にある者が用いる「盗人」の用例(B、C)を特に留意する必要がある。これらはいずれも、発話者側が夫から寵愛を奪った恋敵に対する恨みとして捉えられる。言い換えれば、「盗人」という表現の使用は、夫婦の仲が恋敵によって引き裂かれたことによる喪失感だけでなく、本来持つべき「自分の所有物」(夫からの愛情や関心)が奪われた怨念や嫉妬心も同時に示しているということになる。発話者は「盗人」という表現を使うことで、物理的且つ心理的な被害を訴え、感情や道徳的な観点から自身の正当性を強調しつつ、恋敵を非難しようとする。

この事を踏まえると、後の宮が仁寿殿女御を「盗人」と罵ることについても、そこに嫉妬の対象として、朱雀帝の愛情を奪った仁寿殿の女御に対する恨みの感情を読み取ることが可能であろう。後の宮は昔の立坊争いの勝者であり、自身の立后や息子の立坊を成し遂げている¹⁶。既に朱雀帝の後宮において最高位にある後の宮が、下位の妃を嫉妬することは本来ないはずである¹⁷。後の宮の嫉妬は社会的な利益に関わるものではなく、帝の愛情を得られない一人の女性としてのものであると解釈しておきたい。

以上、「盗人」という表現を手掛かりに、後の宮が、朱雀帝の愛情を独占する仁寿殿女御に対して抱く嫉妬心や憎悪の感情を見てきた。これは、藤原氏の栄華のために策謀する後の宮の公的な側面とは異なる私的な側面とも言える。果たして、後の宮の持つ、これらの負の感情が仁寿殿女御にのみ向けられているのか、あるいは、その感情が藤原氏の敗北にどのように関与しているのか。

4、「女」をめぐる対立する藤原氏一族

再び「国譲」巻における後の宮の発話に焦点を当ててみよう。実際、後の宮は仁寿殿女御に対してだけでなく、物語中の他の女性たちに対しても負の感情を抱いていることが観察される。

¹⁶ 室城秀之は、「現在の後の宮と春宮の側と、仁寿殿の女御と三の皇子の側とのあいだに、立后・立坊をめぐる争いがかつてあった」とし、これは物語内の過去における立坊争いである(「あて宮春宮入内決定の論理」、『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月、35頁)と論じている。

¹⁷ 新里千佳は、後の宮の感情について、「立坊問題に勝利はしたものの帝の心は他(仁寿殿女御)へ向いている。勝者でありながら敗者でもあるような葛藤や不満足」がある(前掲注7に同じ、213頁)と指摘する。

(後の宮)「女は世になきものにもあらず。この御身の筋を思ほし捨てて、来し方行く先、またこの筋の恥とある大いなることをとどめたまへ」と聞こえたまへば(後略)

(国譲 下・252—253 頁)

これは、後の宮が藤原氏の長に当たる忠雅に発した言葉である。後の宮は、「女」は世に数多くいるため、大した妻ではない六の君のために、自らの氏族の繁栄という「大いなること」を損なうべきではないと説いている。つまり、後の宮が忠雅に対して、妻との関係よりも氏族の繁栄を優先し、梨壺腹皇子の立坊に協力するよう促しているのである。しかし、後の宮の呼びかけは、愛する妻を優先する忠雅により、「臣下の道」という建前の論理によって拒否された。更に、後段の文脈では、兼雅が、やはり忠雅と同様に後の宮に対して賛同しがたい旨を表明している。

右のおとど、「この太政大臣、この子どもの母まかり隠れて後、この女御の一つ腹の持たうびて、また一日一夜、他の所をなむ知りたまはざる。その腹に子四人侍なり。かの大納言の朝臣は、その妹の八に当るをなむ持て侍るなる。それまた子二人、また今日明日にて侍り。それ去年の冬、はかなき人にもものいひ触れて侍りとて、まかり去りて、親のもとに侍りければ、子の幼きを取り持てなむ、せむ方なくともてわびたまひけるが、からうして、この頃なむ、あからさまになどいひて、渡りて侍るなる。宰相の朝臣のも、兼雅が姉の腹なり。それも子ども侍り。仲忠の朝臣、かの家に侍らねど、あるが中の君にして、もてかしづきはべる人につきて侍り。子に、限りなく愛しうする女子侍り。またもあるやう侍なり。かくのごと、手を組みたるやうに行き交じり、この中にいささか疎かならず、命を限りて侍るに、かかることをなむあひ定むると聞きはべりなば、この娘どもをも取り放ちて、帝にも、かれこれにも、またあひ見せたてまつるべきにも侍らず(後略)」と聞こえたまへば、中宮、大きに御声出だしたまひて、「その仁寿殿の女の子の子どもも侍るは。などすべてこの女の子どもは、いかなるつびかつきたらむ。つきとつきぬるものは、みな吸ひつきて、大いなることの妨げもしをり」とのたまへば、(後略)

(国譲 下・255—257 頁)

兼雅の話の概要は次の通りである。忠雅は六の君と結婚して以来、六の君を掌中の玉のように大事にしており、たとえ妻が彼女一人しかいなくても忠雅は満足している。八の君と結婚した忠俊は、浮気をしたことによって八の君との関係がこじれてしまい、ようやく関係を修復したところである。三の君と結婚した直正も妻と子供を大事にしている。仲忠の妻である女一の宮は正頼の娘ではないが、孫娘である。彼も妻を大事にしている。このように、帝であれ、臣下であれ、正頼家の女性と婚姻関係を結んだ者は誰もが離縁させられることを危惧している。

後の宮は、その呼びかけに対して消極的で非協力的な姿勢を示す男君たちに対し、苛立ちを隠せない。この状況は、後の宮の視点から見ると、仁寿殿女御、六の君、八の君、三の君、女一の宮、あて宮を含む源氏出身の女性たちが、男君たちの心を捉え、彼らの判断力を鈍らせる結果となっている。このため、後の宮は、男君たちが公のことよりもこれらの「源氏女」を大事にしていること

に対し、怒りや恨みを抑えきれず、彼女たちを露骨に侮蔑する¹⁸。更に、後の宮は後段の文脈において、王昭君や楊貴妃の例を挙げつつ、伝承物語中の帝も公のこのために愛する女性を手放したのではないかという論理を展開し、自分の主張、すなわち、愛する妻を犠牲にし、妻との関係を損なうことになっても、梨壺腹皇子の立坊を達成すべきであるという主張の正当性を裏付けようとする。

後の宮の矛先が向けられた「女」は、いずれも「源氏」を出自とする女性であるため、後の宮の発話を公の側面から捉えた場合、それは一族の権益より愛しい妻のことを重んじる男君たちに対して発した恨み言だと言える。では、私的な側面から捉えた場合はどうであろうか。ここで注目したいのは、仁寿殿女御や六の君、あるいは王昭君や楊貴妃といった女性たちは、いずれも男性に偏愛された存在であるという点である。後の宮の辛辣な言葉とは、それら「夫の愛情を独占している」女性たちへの嫉妬や羨望から発せられた怨嗟の声として捉えることはできまいか。

過去の立坊争いで勝利を収めた後の宮であるが、長年にわたる朱雀帝の愛情争いにおいては仁寿殿女御に敗北し、悔しさと共に嫉妬と怨念が膨らんでいる状態であると言える。現在、藤原氏からの立坊という大義名分を得た後の宮は、仁寿殿女御に対する長年の嫉妬や怨念が爆発し、政治的な駆け引きを繰り広げている。これは、表面的には梨壺腹皇子の立坊のための策略であるが、仁寿殿女御に対する憎悪や嫉妬が原動力となっていると言える¹⁹。ここで注目すべきは、後の宮の負の感情が立坊をめぐる相談中に、男君たちの、いわば仁寿殿女御のゆかりに連なる女性たちに対する愛情によって更に刺激され、ついに夫の愛情を得ているすべての女性たちに向けて発せられるようになった点である。一方、男君たちの立場を振り返ると、彼らはいずれも妻・愛する女性に対して度を越した愛情や執着心を抱いているという点で共通していることが分かる。すなわち、彼らは妻を大切にし、愛する女性を優先する者である。したがって、後の宮は藤原氏の男君たちと「女」をめぐる不可避的に衝突せざるを得ない。

構造的な面から見ると、藤原氏一族の主要メンバーの間には、夫の愛を得られない女性と愛する妻を優先する男性の対立が存在すると言ってもよい。このような私的な葛藤から生まれた対立と矛盾は、藤原氏一族の結束に負の影響を及ぼす内因の一つにもなるであろう。ここでは、藤原氏一族が源氏に敗北する要因として、「女」という私的な状況をめぐる一族内での対立があることを指摘しておきたい。

結論

「国譲」巻における藤原氏と源氏の間立坊をめぐる権力闘争において、藤原氏は政治的に優位な立場にあるが、一族の結束が欠けており、源氏に敗北する結果となる。先行研究では、後の宮の一族の権益を志向する公的な側面に注目が集まっており、藤原氏敗北の原因を後の宮の公的な心が、

¹⁸ 仁寿殿女御を「盗人」と罵倒する後の宮は、息子を魅了する東宮妃であるあて宮に対しても「おほかたあまがつ女なれば、面わわけたるに、さぞ現さざらむ。げに気色の恐ろしげに、人を殺すべからむは何ぞ（国譲 下・259頁）」と呪詛のような中傷を行うことがある。

¹⁹ 内藤英子は、「藤原氏からの立后や立坊があるべきという摂関家の価値観で行動した後の宮だったが、その強い原動力となったのは呂后が戚夫人に抱いたような激しい嫉妬と怨念の心であった」（注6に同じ、8頁）と指摘している。

男君たちの私的な葛藤（一族の利益や政事より、姻戚関係や愛する妻を優先すること）によって壊された点にまとめてきた。つまり、これは後の宮を公的な立場にある存在と捉える視点である。

しかし、後の宮が仁寿殿女御に対して抱いた嫉妬心と対抗心が、藤原氏からの立場という後の宮の意図の根底に横わっていることを見過ごすことはできない。本稿では、仁寿殿女御を罵倒する後の宮の言辞に注目し、「盗人」という表現から嫉妬や憎悪の感情を読み解いてきた。女性が「盗人」という表現を用いる際、夫からの愛情や関心が恋敵に奪われた怨念や嫉妬心を示している。これは、後の宮が仁寿殿女御に対して抱いた女性間の嫉妬という私的な感情と捉えることができる。後の宮は昔の立場争いにおいて勝利を収めた一方で、夫である朱雀帝の愛情を得ることはできなかった。後の宮が藤原氏からの立場に執着するのは、その不満足な愛情に代わる手段として政治権力を獲得し、内心の不安定さや空虚感を埋めようとするものとして解せるのではないか。

なお、後の宮の発言を顧みてみると、仁寿殿女御のみならず、「源氏女」たち（六の君、あて宮等）がいずれも、後の宮に嫉妬や憎悪の感情を抱かせる対象となっていることが分かる。注目すべきは、これらの女性たちが「夫の愛情を得ている」という点で共通していることである。後の宮は仁寿殿女御に対して嫉妬し、女御のゆかりの女性たちにも同様の感情を投射していると解釈できる。夫の愛情を得られない後の宮が、「夫の愛情を得ている」女性たちに対抗する手段として公的な政治への介入があるとも言える。しかし、そのような後の宮の私怨に基づく提案は藤原氏の男君たちに受け入れられず、結果、藤原氏一族は結束できずに敗北を喫するに至る。この敗北を招いた一要素として後の宮の私的な嫉妬があったと本稿では結論付けたい。

第五章 『うつほ物語』における擬似的な「はらから」考
—女性間の問題を中心に—

1、問題の所在と先行研究

1. 1 問題の所在

「楼の上 上」巻では、兼雅の妻妾の一人である宰相の上のことを、俊蔭女が「はらから」と捉え、親しく近づこうとする場面が描かれている。更に、俊蔭女の意を汲んだ仲忠が宰相の上に三条殿への移住を勧める際、彼女に母である俊蔭女を「はらから」として考えてほしい意向を伝えている。この「はらから」という位置づけには、俊蔭女の個人的な意向が込められている。その意向とは、自分と類似した境遇によって零落した宰相の上と擬似的な血縁関係を結ぶことで、彼女と互いに親しく信頼できる心の繋がりを築くことである。

「はらから」という表現は、本来、血の繋がりを持つ人物、つまり血縁者を指すものであり、したがって、その位置づけは血縁関係にある兄弟姉妹と同様に考えるべきであると言える。その用例を辿ると、先行作品である『伊勢物語』において「女はらから」という表現が確認できる。これは、男君が美しい「女はらから」（姉妹）を垣間見し、恋物語が始まるという場面での用例である。ここでは、参考までに「はらから」という表現について、平安時代の和文で書かれた作品からその用例を抽出してみると次の表のようになる（用例調査には、「女はらから」「親はらから」という複合語も含まれている）。

	作品名	血縁者	非血縁者
1	伊勢物語	3	0
2	大和物語	7	0
3	平中物語	1	0
4	土佐日記	1	0
5	蜻蛉日記	8	0
6	うつほ物語	44	6
7	落窪物語	13	0
8	堤中納言物語	2	1
9	枕草子	3	0
10	源氏物語	42	3
11	和泉式部日記	1	0
12	更級日記	1	0
13	浜松中納言物語	3	0
14	夜の寝覚	13	0
15	狭衣物語	5	0
16	栄花物語	57	0

17	大鏡	9	0
18	とりかえばや物語	8	0

表により、『伊勢物語』のほかには、「はらから」という表現が『うつほ物語』や『源氏物語』などの物語で広く使用されていることが分かる。特に留意されてくるのは、『うつほ物語』をはじめとして、『堤中納言物語』や『源氏物語』などの作品に、非血縁者を「はらから」とする用例があるという点である。これは、血縁ではない人物同士を擬似的な血縁関係として結び付けてゆく特異な用法として注目される。

1. 2 「はらから」に関する先行研究の状況

「はらから」という表現について、先行研究では、血縁者という視点、あるいは血の繋がりのない人々という視点から論じられてきた。血縁者という視点については、大井田晴彦が、「女はらから」の物語の変型として描かれるあて宮と女一の宮が、正頼邸で姉妹のように育った（実には叔母と姪の間柄）ものの、それぞれ別の人生を送るという点に注目している。大井田氏はまた、男性中心の物語が、女性の生き方の問題を問う物語に転換していく過程を分析している¹。また、竹田裕子は、『うつほ物語』における「はらから」及び「親はらから」の用例を概観し、この二つの言葉を介して見える人々の関係に、「母」または「父」のどちらが核となるかで相違があることを指摘している²。一方、血の繋がりのない人々が擬似的な「はらから」の関係を結ぶ点に注目したのは、室城秀之と小野寺拓也である。室城秀之は、正頼家があて宮の求婚者たちと「はらから」の関係を結ぶことで、男君たちをからめ取る一方、男君たちも「権門である正頼家と結びつくことになる」と説く³。更に、小野寺拓也は、東宮が「はらから」の結びを積極的に推し進め、男君たちを集めていく姿勢に注目し、『はらからの契り』を結ばせることには、後に政治の中核を担う、有力な男君たちの関係性を構築する意向があったと指摘する⁴。これは男性間の繋がりを読み取っていくものとなる。ところで、異性間や女性間の場合において「はらから」の関係を結ぶことには、どのような意味合いが含まれているのか。

1. 3 異性間の「はらから」と本稿の視点

『うつほ物語』で異性間において「はらから」の関係を形成する用例は、次の一つのみとなる。

¹ 大井田晴彦「〈女はらから〉の物語史」『名古屋大学文学部研究論集 文学』、第61号、2015年3月、165-179頁）

² 竹田裕子「「はらから」に見られる人の結びつきに関する一考察：『うつほ物語』を中心に」（『武蔵文化論叢』、第15号、2015年3月、19-27頁）

³ 室城秀之「『うつほ物語』の親族関係表現について―「親方」「親にす」「子にす」「親子の契り」「はらからの契り」―」（『講座平安文学論究 第十二輯』、風間書房、1997年9月、239-264頁）

⁴ 小野寺拓也「『うつほ物語』の東宮・帝と男君たち：「はらからの契り」を端緒として」（『平安朝文学研究』、第27号、2019年3月、30-43頁）

(七の君)「かの北の方こそいとよき人なれ。かしこには、いとめでたきものにこそせらるなれ。中納言をばいと疎きものにして、いらへも、むかしは声も聞こえざりける人に、今は親、**はらから**のごとして、親も子もさし向かひてあるとこそいふめれ。」(国譲 下・273 頁)

※実忠妻→実正や実頼

これは、実正の妻である七の君が九妹のあて宮と実忠の噂をする際の発話である。彼女の発話により、実忠妻が、家庭の再建に欠かせない援助を提供してくれた義兄の実正や実頼を自分の親兄弟のように信頼している様子が読み取れる。これは、後見のない女性が、血の繋がりのない男性を自分の兄弟として頼りにしようとする用例である。

ここで、更に平安時代に和文で書かれた他の作品における用例を参照してみよう。①は、好き者の男が交際した女性たちを批評する際の用例で、男は里住みの女に対して異母兄弟だと称して男女関係を試みている。②は、薫が大君に対し、兄妹のような血縁関係を求めようとする用例である。③は、薫がさらに大君の妹である中の君とも擬似的な血縁関係を結び付けようとする用例である。④は、中将(僧都の妹の尼の亡き娘の婿)が浮舟に自分を親兄弟として扱ってほしいと望む場面での用例である。

①至らぬ里人などは、いともて離れて言ふ人をば、いとをかしく言ひ語らひ、**はらから**と言ひ、いみじく語らへば、しばしこそあれ(後略) (『堤中納言物語』はなだの女御・482 頁)

※好き者の男→里住みの女

②(薫)「**はらから**」などのさやうに睦ましきほどなるもなく、いとさうざうしくなん、世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさまを、心にこめてのみ過ぐる身なれば、さすがにたづきなくおぼゆるに、疎かるまじく頼みきこゆる。」(『源氏物語』⑤総角・230 頁)

※薫→大君

③世の中のあるべきやうなどを、**はらから**やうの者のあらましやうに、教へ慰めきこえたまふ。(『源氏物語』⑤宿木・393 頁)

※薫→中の君

④(中将)「**はらから**」と思しなせ。はかなき世の物語なども聞こえて、慰めむ」など言ひつづく。(『源氏物語』⑥手習・353 頁)

※中将→浮舟

以上、平安時代に和文で書かれた他の作品における男性が非血縁者の女性を「はらから」とする事例を確認すると、いずれも男性が女性と兄妹関係を擬するかたちで、更なる深い関係(恋愛関係)

を図る手段の一つであることがわかると言える⁵。『うつほ物語』の場合は、女性が男性に対して支援や安心感を求め、信頼関係の構築を目指している。対して、『堤中納言物語』や『源氏物語』の場合は、男性が兄弟としての立場を利用して、女性の警戒心を解かせて恋愛の可能性を模索している。つまり、これらにおいて、男性は女性と「はらから」の関係を擬することで、恋愛関係や性的関係を模索する手段と化している。しかし、『うつほ物語』では、女性が男性に対して信頼感を求め、心の繋がりを築くことを試みている。

さて、女性同士が「はらから」の関係を結ぶ場合はどうであろうか。この場合については、俊蔭女・宰相の上に関する三例以外、用例が観察されていない。したがって、俊蔭女・宰相の上の用例は特異なものと考えられる。本稿では「はらから」という表現に注目し、兼雅の妻妾たちが三条殿に引き取られる関連章段に焦点を当てて考察を行う。具体的には、俊蔭女が宰相の上といった零落した女性と擬似的な「はらから」の関係を築く行動について検討する。そして、俊蔭女と同様に兼雅の妻妾集団に属する女三の宮を比較対象として取り上げ、女三の宮においては「はらから」の関係にある姉妹が互いに敵対関係になっていく過程を考察する。この比較により、物語の女性登場人物が人物関係を構築する際の相違を明らかにする。

2、宰相の上と「はらから」の関係を築く俊蔭女

若小君（後の兼雅）は俊蔭女と一夜を過ごした後、親によって邸に連れ戻され、閉じ込められていた。その間、俊蔭女が妊娠し、仲忠を出産した。母子は北山のうつほに流離することとなった。一方、兼雅は俊蔭女を見つけ出せずにいたが、嵯峨の院の内親王である女三の宮を含む親王や上達部などの娘たち（宰相の上、故式部卿の中の君、仲頼の妹や千蔭の妹等）を一条殿へ集め、色事にする。やがて、物語が進むにつれて、兼雅は俊蔭女との再会を果たす。俊蔭女・仲忠母子の長年の流離や苦難を埋め合わせるべく、兼雅は俊蔭女に寄り添い、その面倒を見ることとなった。それに伴って、他の妻妾は見捨てられる結果となった。

仲忠は、自分と母の過去を兼雅の他の妻妾たちの零落した境遇と重ね、彼女たちの救済を試みる⁶。そのため、彼は妻妾たちを三条殿に引き取ることを提案し、俊蔭女もこれに賛成している。通常、一夫多妻という社会制度のもとで、夫の愛情や関心を獲得するために、競い合う妻妾たちは対峙する関係に置かれる。したがって、夫の寵愛を独占し続けていた俊蔭女にとって、この提案は不利な

⁵ 助川幸逸郎は、『相手の〈はらから〉のような立場に身を置いて、女性に接近する』というスタイルが、薫の恋愛の基本姿勢だ」と説く。また、氏は「薫をパロディー化した」中将の求愛行動と薫の類似性を指摘する（『宇治大君と〈女一宮〉—〈妹恋〉の論理を手がかりとして—』、『中古文学』、第61巻、1998年、18-26頁）。更に、有馬義貴は、大君に「はらから」的な関係を求めていった薫が、大君の形代としての浮舟に対しても同様の関係を望んでいた可能性がある（『源氏物語』『宇治十帖』の〈はらから〉：薫と浮舟の問題を中心に、『日本文学』、第58巻第12号、2009年、14-25頁）と述べている。

⁶ 富澤萌未「父に忘れられる子ども——仲忠の流離」（『うつほ物語—子ども流離譚』、翰林書房、2021年3月、39-54頁）。また、大井田晴彦は、「仲忠のこの活躍は兼雅の過去を清算するのみならず、兼雅の愛を独占してしまった俊蔭女の謝罪の意味もあった。この一件で、仲忠は父母それぞれに孝を尽くしたことになる」と説く（『附篇『うつほ物語』の言葉と思想』、『うつほ物語の世界』、風間書房、339-359頁）。更に、「内裏にも、いとかしく嘆かせたまふめる。…中略…げに院の御世、いくばくもおはしまさぬ時、さなど聞かせたまつりたまへ。」により、この提案は仲忠が朱雀帝や嵯峨の院の面目を考慮したものでもあることが分かる。

ものとなるはずであり、自分の安定した立場を動揺させる可能性がある。しかし、俊蔭女は夫の寵愛を独占したことで、不運の境地に追い込まれた他の妻妾たちに罪悪感を抱えている。故に、俊蔭女が妻妾たちを三条殿に引き取ることで、彼女たちに贖罪をしようとしているのである。留意すべきは、俊蔭女が宰相の上という女性とより親密な関係になっている点である。

宰相の上は、「蔵開 下」巻において兼雅に見捨てられた妻妾の一人として登場した後、一時姿を消していた。その後、彼女が「楼の上 上」巻では母子流離の話型⁷に組み込まれ、再び登場する。以下に、仲忠の視線から宰相の上の母子の零落した状況を確認する。

木ども前栽などは、数あまたありけれど、げに山里のやうになりにけり。対ども廊など傾き、あやしきさまなり。人の音もせず。…中略…そびやかにまめかしきかたち、内侍の御様体、かたちに覚えたり。ありし君、搔練の小桂ばかりうち着たまひて、鶴脛にて、いと小さくをか
しげなる琵琶をかき抱きて、前に居たまへば、いとうつくしと思ひたまうて、髪かきやりたまふ手つき、いとうつくしげなり。
(楼の上 上・420—421 頁)

これは、石作寺で宰相の上・小君母子に巡り会った仲忠が、宰相の上のことを兼雅に報告した後、彼女たちの居所を訪れ、三条殿への移住を勧める際の見聞である。父に先立たれた宰相の上は、老母や若子の小君と頼りなく零落した生活を送っている⁸。困難な状況にもかかわらず、彼女は自ら子に琵琶を愛情深く伝授する。この情況を目撃した仲忠は、母子間の愛情や絆に心を打たれる一方で、かつて自分が流離した過去を思い出し、宰相の上に俊蔭女の面影を重ねている。

宰相の上の造形は従来、俊蔭女に重なることが多く指摘されてきた⁹。俊蔭女の側から見れば、宰相の上という女性は①父に先立たれる、②零落した身の上、③流離する母子などの点で共通点があり、更に「心深き」「おいらか」な性格の持ち主¹⁰でもある。その為に、俊蔭女が彼女に親近感を覚えている。宰相の上の遭遇を知った俊蔭女は、彼女と擬似的な「はらから」の関係を結ぶ意向を表し、息子の仲忠が小君と「はらから」の関係（同父異母の兄弟関係）になることをも期待している。

(俊蔭女)「取り分きて、思ひはらからなどいひ、むつましき人もなし。心細きに、心ざまな
ども思ふやうにおはすなり、さ取り分きて思ひきこえば。大将をも、同胞 (はらから)のやう

⁷ 本宮洋幸は、『楼の上』巻は、首巻『俊蔭』巻へと回帰する志向が顕著だと指摘し、宰相の上・小君母子の登場が「かつての俊蔭女と仲忠の流離を想起させる」機能を果たしていると説く（『仲忠の継承者たち』、『うつほ物語の長編力』、新典社、2019年3月、177—178頁）。

⁸ 「蔵開 下」巻で登場する宰相の上が兄に迎え取られたと記されているが、「楼の上 上」巻以後、その兄については触れられていないのである。「宰相ばかりの人の御娘、若くて奉りたるなりけり、それは兄人などありければ迎へつ」（蔵開 下・597頁）という。

⁹ 宰相の上の造形が俊蔭女の姿と重ね合わせられ、両者の造形が似ていると指摘されるのは、島田和枝『うつほ物語』の琵琶（『広島女学院大学大学院言語文化論叢』、第1号、1998年3月、1—33頁）、高野英夫『うつほ物語』宰相の君母子の物語の意味—楼の上上巻冒頭部を中心にして（早稲田大学大学院中文学研究会編『源氏物語と王朝世界中古文学論攷』、第20号、武蔵野書院、2000年、114—130頁）、戸田瞳『うつほ物語』俊蔭一族と宰相の上親子の織りなす血縁の世界—〈縦の繋がり〉と〈横の繋がり〉の絡み合い—（『古代中世文学論考』、第23号、2009年10月、7—36頁）、富澤萌未（前掲注6に同じ）が挙げられる。

¹⁰ 戸田瞳は、「おいらか」という性格から、俊蔭女と宰相の上における人物描写の相似性を読み取っている（前掲注9に同じ）。

に思ひたまふべし。」

(楼の上 上・419 頁)

更に、後段の文脈では、母である俊蔭女の意を汲んだ仲忠が、宰相の上に三条殿への移住を勧める際、彼女に母を「はらから」として考えてほしい意向を伝えている。

(仲忠)「仲忠が母にものしたまふも、いと心細く、ただ一人ものせらるれば、あまたものせさせたまひける御中に、何とも思されずとも、取り分きて思ひきこえさせむ。むつましく思さるべき者なり。今近くても見たまひてむ。古めかしく、心安く、御はらからなどのやうに思されむに、いとよくなむ侍るべき」など聞こえたまへば(後略)

(楼の上 上・423 頁)

結局、宰相の上・小君母子や祖母たちは、三条殿に迎え取られることになる。宰相の上は、俊蔭女・仲忠母子の配慮に感激し、俊蔭女の人柄にも引き付けられる。そして、俊蔭女と宰相の上は相互に親しみと信頼を築いていった。その後、この二人の女性は、「さまざまに心憎く申し交わしたまふ。いと忍びて、さべき折には、この御方には対面したまひて、かたみに心深うあはれに聞こえ契りたまふ(楼の上 上・443-444 頁)」、親密な交流を持ち、擬似的な「はらから」の関係を築いていることが窺える。

兼雅の妻妾として、俊蔭女は宰相の上と夫からの寵愛を競い合う関係にあるはずであるが、今では互いに敵視するどころか、信頼し合える擬似的な「はらから」(姉妹)の関係になっている。この結びつきを通じて、俊蔭女が宰相の上と擬似的な血縁関係を形成し、信頼に基づく心の繋がり(血の繋がりより更なる強固なもの)¹¹を築いている。その結果、兼雅家内の雰囲気や和らぎ、妻妾間の対立による負の影響が軽減される。こうして夫からの信頼が深まり、俊蔭女が兼雅の最愛の妻としての地位を一層安定させることになる。また、俊蔭女は心理的安定感や平穏を得るとともに、女性同士の支え合いも確立する。更に、これにより、仲忠一人では実現不可能な連携が生み出され、琴の一族の繁栄に寄与するものとなる¹²。

¹¹ 猪川優子は、「一族と他の一族との間の同世代の繋がり」を「横の繋がり」としている(『うづは物語』の〈秘琴〉と〈あて宮〉:「繋がり」の形成をめぐって、『古代中世国文学』、第9号、1997年3月、1-8頁)。更に、「俊蔭女は、自身が持つ特質(美)に無意識に助けられながら(朱雀帝や兼雅との)『横の繋がり』を形成し、広げていく」(『うづは物語』における俊蔭女の美:「横の繋がり」との関わりを中心に、『古代中世国文学』、第13号、1999年7月、14-23頁)と説く。つまり、猪川氏は俊蔭女が築く同世代の異性間の繋がりには焦点を当てているが、本稿では同性間(女性間)の繋がりを検討している。なお、「横の繋がり」という定義は、室城秀之(「あて宮東宮入内決定の論理」、『うづは物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月、29-50頁)や戸田瞳(前掲注9に同じ)により踏襲されることがある。

¹² 猪川優子が俊蔭女の仁寿殿女御を初めとする高位の女性との繋がりには焦点を当てているが、本稿では俊蔭女の宰相の上といった零落した下位の女性との繋がり注目した(前掲注11に同じ、1999年、23頁)。俊蔭女と宰相の上の関係が親密になったことで、異母兄弟である仲忠と小君も同母兄弟のように親しくなっている。本宮洋幸は、その結果、琴の一族の血を引いていない小君が、清原家の漢学の才を仲忠から受け継ぎ、「琴の歴史の語り部ともいふべき役割を担う継承者」となると説く(前掲注7に同じ、177-181頁)。

3、「はらから」と「仇」になる女三の宮

本節では、参考として、俊蔭女と同様に兼雅の妻妾集団に属する女三の宮に注目し、彼女の「はらから」との関わり方を見ていく。

以下に、女三の宮の現在の生活状況を確認する。仲忠が父である兼雅の手紙を携え、一条殿に住む女三の宮を訪れ、彼女に三条殿への移住を勧める。これは、三条殿に戻った仲忠が兼雅に女三の宮の現状を報告する際の二人の会話である。

(仲忠)「奥は見たまへず。あらはなる限りは、異なることも侍らず。政所の家司の男どもなど、あまた侍り。下人などあまた侍りて、御蔵開けて、ものを納め下ろしなどしはべりつ。おはしますところも目安くしつらはれて、童、大人あまた侍りつ」。父おとど、「かれは財の王ぞや。御祖母が一人子にて、その御財をさながら領じたり。よき荘、いと多く持たまへる人ぞ。よき調度、細やかなる宝物は、かしこにこそあらめ」とのたまふ。(蔵開 中・509 頁)

兼雅の愛情を失い、彼に捨てられた女三の宮は喪失感や不安に苦しんでおり、父である嵯峨の院の面目をつぶしたと感じている。しかし、彼女が経済的な不安や困難に直面することはない。親である嵯峨の院や大后の宮が健在で、祖母から最も愛された子として大切にされた女三の宮は、多数の荘園や宝物を所有しているため、経済的かつ物質的には豊かな生活を送っている。

宮に候ひたまふ人々、大将殿の大宮の御はらから、同じ后腹の小宮と聞こゆる、左大臣殿の大君、右大臣殿の大君、右大将殿の大君、平中納言。かく候ひたまふ中に、小宮、右大将殿なむ、時におはしましける。(あて宮・127-128 頁)

両親が存命であるだけでなく、女三の宮には「はらから」の姉妹もいる。物語が、女三の宮の「はらから」について初めて言及するのは、「あて宮」巻で東宮の妃たちが紹介される箇所である。東宮の後宮には数人の妃がおり、その中では小宮と梨壺（兼雅と女三の宮の娘）が特に寵愛を受けている。小宮という妃は、嵯峨の院の末の姫宮であり、源正頼の妻大宮の妹である。小宮と同じく大后の宮を母とするのは大宮の他に、女三の宮もいる。この「はらから」の三人はみな、大后腹の内親王であり、それぞれ左大将源正頼、右大将藤原兼雅や東宮（後の今上帝）と婚姻関係にある。血縁者による社会的及び経済的支援のため、女三の宮は夫である兼雅からの愛情を失ったにもかかわらず、零落することなく安定した生活を維持している。

しかし、立坊争いの展開に伴い、女三の宮と「はらから」の関係には隙が生じ、次第に破綻していく。

宮、「この候ひたまふ人は、親も思ほし忘れたまふめれば、世の中にあはれに心細げなる人なめり。同胞（はらから）も何につけてか思さむ、なほあはれなるものの心苦しきに思ほして、訪

これは、女三の宮が娘梨壺の局で仲忠と語る際の発話である。彼女は、夫兼雅に見捨てられた自分の悲境や、父に忘れられた娘梨壺の悲劇を語りつつ、政治的利益の獲得のために「はらから」との間に蟠りが生じる可能性を懸念し、仲忠の支援を望んでいる。女三の宮の「はらから」とは、姉妹である大宮と小宮を指す。大宮は娘あて宮を後見する立場にあり、小宮は東宮妃であるため、いずれも梨壺への支援は期待できない。むしろ、後の立坊争いにおいて、敵対の関係に陥る可能性がある。

「国譲」巻に至ると、女三の宮姉妹の三人はそれぞれ自分側の皇子を次期の坊に推すために、他の「はらから」との競争を避けることなく、自分側の政治的または社会的利益に利する立場を取っている。大宮は娘あて宮腹の第一皇子を、女三の宮は娘梨壺腹の第三皇子を後見する。小宮はまだ妊娠中であるが、母である大後の宮からの支援を受けているため、自分の子供が皇子として立坊されることを期待しているであろう。この過程で、彼女たちは自らの欲望を満たすためには、姉妹の間に敵対関係が生じることもある。

君見出たしたまひて、「厳めしの人御幸ひや。一人にても、かく子を生みけむよ」などで、わが姉宮を思ひ比ぶるに、かう子、孫まで、わがままに広がり満ちてののしる。かかる仲らひにて見るにも、よくものをいひ思ふべくもあらず、**仇**と見るぞ心憂きや、と思せど（後略）

（楼の上 上・488—489 頁）

これは、京極に移るいぬ宮の行列を見物する女三の宮の感想である。夫兼雅の寵愛を独占する俊蔭女は、両親が早逝したにもかかわらず、子の仲忠が出世し、さらに孫娘のいぬ宮も入内する可能性が高まり、一家は栄達する。対して、女三の宮の側では、梨壺腹の皇子が立坊争いに敗北し、姉の大宮との関係にも亀裂が生じた。女三の宮は、俊蔭女の幸福を羨望しつつ、自分の不運を嘆いている。「内侍のかみ」巻で予想されていた女三の宮と姉妹たちの敵対関係は、熾烈な立坊争いの中で現実化していく。女三の宮と「はらから」は、各々の政治的利益の獲得を優先し、ついに政治闘争において「仇」とならざるを得なかった¹³。女三の宮が政治的利益を追求することによって、「はらから」との心の繋がりとは断ち切れ、敵対関係に陥る。引用文からは、このことが彼女に孤独感や孤立感をもたらしたことが窺える。

「はらから」を持つ女三の宮は、夫である兼雅に見捨てられた状況にあるものの、血縁者からの社会的および経済的支援により、安定した生活を維持することができる。しかし、立坊争いにおいて、女三の宮と姉妹たち（大宮、小宮）は固有の血の繋がりを後回しにし、各々の政治的利益の拡大を優先する。その結果、「はらから」としての彼女たちは敵対的な関係に追い込まれ、内面的な充

¹³ 室城秀之は、「立坊争いにおいては、大後の宮（小宮腹未出生の皇子を後見する）、大宮、女三の宮の三人は、親子・姉妹でありながら、敵味方とならざるを得ないし…中略…これらは、単に個人としてではなく、「政治」のなかで生きていかざるを得ないという、新しい人間像を描き出したものとして評すべきであろう」（『藤壺腹皇子立坊決定の論理』、『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996 年 12 月、288 頁）としている。

足や幸福感が損なわれる可能性が示唆されている。

結論

以上、『うつほ物語』における「はらから」という表現について、女性間の問題を中心に考察してきた。「はらから」という表現は、血縁関係にある兄弟姉妹を指すものであり、文学作品で広く使用されている。しかし、血縁関係のない登場人物に「はらから」という要素が持ち込まれることもあり、そこでは血縁者という視点だけでは捉えきれない問題が浮上する。男性間の擬似的な「はらから」の関係は、政治的な意向や利益が関わることが多く指摘されている。一方で、異性間の場合については、単純に信頼関係を築く例（『うつほ物語』）や兄妹関係を擬するかたちで、恋愛関係を描く例（『堤中納言物語』『源氏物語』）などが見られる。これらに対して、女性間の場合については未だ詳しく論じられていない。

本稿で注目したのは、俊蔭女が宰相の上という女性と疑似的な「はらから」の関係を欲求するという点である。本来、一夫多妻制社会の下では、夫である兼雅の愛情や関心を獲得するために、俊蔭女と宰相の上は敵対関係にあるはずである。しかし、俊蔭女は自身の過去の境遇を宰相の上の現在の苦境と重ね合わせ、彼女と個人的に疑似的な姉妹の関係を築こうとしている。俊蔭女と宰相の上は血縁関係がないものの、疑似的な姉妹関係を築くことで、心の繋がりが形成されていく。これにより、俊蔭女は対立すべき立場に置かれる兼雅の他の妻妾と心の繋がりを積極的に築いている。俊蔭女と他の一族の女性との間で築かれた心の繋がりは、彼女の個人的な意向によるものであるが、その結果、彼女の兼雅の最も愛される妻としての地位はさらに安定した。このような行動を通じて、俊蔭女の女主人公としての人間性や理想性も一層際立つ。

それに対して、俊蔭女と同様に兼雅の妻妾集団に属する女三の宮は、「はらから」の姉妹たちに囲まれ、強力な社会的及び経済的支援を受けている。それゆえ、彼女は夫である兼雅に見捨てられたとしても、安定した生活を維持することができる。しかし、立坊争いにおいて、女三の宮は政治的な論理により、血縁者である姉妹や親と対立の立場に追いやられざるを得なかった。三姉妹のそれぞれが個々の政治的利益を優先し、家族としての固有の繋がりを顧みないため、最終的には血縁関係が引き裂かれていく。女三の宮もそれにより、孤独感や内面的な喪失感を抱くに至る。

兄弟姉妹のいない俊蔭女が、積極的に疑似的な「はらから」の関係を築こうとする姿勢と、親姉妹を持つ女三の宮が、「はらから」と敵対的な関係に陥っている様子は対照的に見える。この二人の女性の「はらから」との関わり方が、所属する氏族や家族に与える影響も見られる。俊蔭女は人間としての共感をもとに、血縁のない女性との間に構築する疑似的な「はらから」の関係を通じて、女性間の心の繋がりが深まり、一族の繁栄ももたらされる。一方で、女三の宮は家族としての固有の血の繋がりを大切にしないことで、血縁者との政治的対立に直面し、自身の孤立と家族の崩壊を招く。これにより、女性たちの「はらから」との関わり方が、内面的な充足感や自分の社会的位置に大きな影響を与えることが明らかになった。

終 章

『うつほ物語』の女性像に関する研究の意義と可能性

1、女性像に着目する意義

従来、女性は弱さを刻印される存在として認識されてきた。特に、古代社会において父権制の下では、女性は父や夫に依存・従属する受動的な存在と見なされ、氏族や家族から社会的な役割が押し付けられた。平安時代の女性もまた、このパターンの中で生き抜いてきた。社会制度の制約のもと、帰属する家族の社会的な立場を尊重し、一族の利益を守る女性や、内面的な人格が抑圧され、家父長制社会の枠組み内で生産された理想的な女性や、家族に要請される役割から逸脱し、個人の内面を表現しようとする女性など、様々な姿を持つ女性たちが見られる。こうした女性たちの姿は歴史書に記録されるだけでなく、同時代の物語作品にも多様に描かれている。本稿で取り扱った『うつほ物語』という長編物語作品には、重要な女性キャラクターが多数登場し、彼女たちの造形を究明することで、平安時代の女性たちの在りようを捉えるだけでなく、物語における彼女たちの役割やその推進力についても明らかにすることができるであろう。以上のような問題意識のもとに各章で具体的な考察を展開してきた。

以下に、本稿で読み解いてきた俊蔭女、宰相の上、あて宮、後の宮、女一の宮という五人の女性登場人物の在りようや物語における位置づけをあらためて確認しておこう。

俊蔭女は琴の一族の中心人物として、父の俊蔭の死後もその遺言を守り、琴の秘技を次世代に伝える使命を背負って生きている。「内侍のかみ」巻では、俊蔭女が朱雀帝によって尚侍に任命されたうえで、更に「私の后」として位置づけられている。朱雀帝は「私の后」と呼ぶことで、俊蔭女を個人的な偏愛の対象としようとするが、俊蔭女は始終兼雅の妻や仲忠の母としての立場を守り続け、朱雀帝の愛情に靡くことはない。更に「蔵開」巻では、俊蔭女は従順で嫉妬心がなく、夫の兼雅に協力して他の妻妾たちの世話を務めている。俊蔭女は家族のために奉仕し、家族の期待に応える理想の女性像として描かれている。家族によって強いられる規範や観念に縛られた女性として、俊蔭女は個人的な内面をあまり見せていないが、宰相の上という女性との「はらから」関係を求めることで、血縁の薄い彼女の内に潜む孤独や不安が垣間見える。

宰相の上は初登場時に系譜不明の源宰相の娘として、藤原氏一族との結びつきを求める父によって兼雅に贈与された「贄」である。宰相の上は「心深き」「おいらか」な性格を持つが、それだけでは好色の兼雅の長く続く寵愛を得ることはなかった。兼雅に見捨てられ、父の死後に窮地に陥った宰相の上は、独力で息子の小君を育てるしかなかった。宰相の上の困窮を聞き及んだ俊蔭女は、彼女に共感し親近感を抱き始め、息子の仲忠を通じて擬似的な「はらから」関係を結ぶ意向を示している。やがて宰相の上は、俊蔭女・仲忠母子からの配慮に感激し、俊蔭女と互いに親しく信頼できる関係を築いていく。こうして、一夫多妻制の社会制度の中で対峙する立場にあった俊蔭女と宰相の上は、姉妹のように心の繋がりを築くに至る。彼女たちの関係は、没落した中流貴族の出身を持ち、母子で流離の苦難を味わった俊蔭女と宰相の上が、それぞれの心の傷を癒やし合う形で築かれたものであるとも言える。

平安中期から後期にかけて隆盛した摂関政治の下で、上流貴族の一族が天皇の外戚として摂政、関白や内覧などの要職を通じて実権を一手に握ろうとした。このような政治背景の中で、女性の産

む性が家族に利用され、貴族の女性が次代の東宮を生むための道具として父や兄によって内裏に送り込まれた。あて宮と後の宮は、当時の上流貴族出身の女性のありようを活写する人物と言える。

あて宮は父の正頼の摂関的な権力志向を象徴する存在としてある。絶世の美貌で名を馳せ、多くの求婚者が群がるが、あて宮は入内することなく一般の身分での生活を望んでいた。しかし、最終的に父の意向に従って東宮妃となり、次第に未来の国母として政治力を備えていく。常に父の正頼の構想する政治戦略を実践するあて宮は、「内侍のかみ」巻の言葉の祭りにおいて、「高麗」という表現の比喻を契機に仲忠と常軌を逸した恋愛の言葉を交わすこととなった。その結果、彼女は次第に人間的な存在として成長していく。実権を握る父を後見とし、東宮（今上帝）の寵愛を独占するあて宮は、表向きは華やかな後宮生活を送っているように見える。しかし、意中の人ではない夫である東宮との葛藤や後宮での争い、嫉妬に満ちた生活の裏側では、精神的な苦痛が溜まっている。あて宮にとって仲忠との恋愛遊戯は、政治の論理からの逃避であり、社会的役割の束縛から解放される自由を意味するであろう。

後の宮は父太政大臣の時代での藤原氏の豪勢になじみ、強い家門意識と政治的な才覚を備えた女性として描かれている。藤原氏と源氏の間の立坊をめぐる権力闘争において、後の宮は藤原氏一族の最高指導者であるかのように、梨壺腹皇子の立坊を積極的に画策している。しかし、後の宮は家族の利益を守る使命感に燃える一方で、夫である朱雀帝から愛されないという不満な婚姻生活に苦しんでいる。長年、後の宮は名門氏族の出身による自尊心や、家族に課せられた役割に縛られ、内面的な感情を抑圧して生きている。やっとのことで、藤原氏からの立坊という大義名分を得た彼女が恋敵の仁寿殿女御を「盗人」と罵倒し、自身の抑圧された怨念と嫉妬を吐露する機会を得たのである。後の宮とあて宮のような上流貴族の女性は、家父長制のもとで従属的な立場に置かれ、支配の対象として扱われている。そのため、後宮で最上位の地位に就いたものの、彼女たちは政治的論理の犠牲者となり、内面的な充足感を得ることができないであろう。

女一の宮は、父帝によって仲忠に「禄」として下賜され、皇室と琴の一族との紐帯を強化する役割を担っている。五人の女性の中で最も高貴な出身である女一の宮は、仁寿殿女御を母に持ち、朱雀帝の最も寵愛する内親王として正頼邸で大切に育てられる。父帝の寵愛を受け、強力な母方親族の後見を得ていた女一の宮は、あて宮などの正頼の子女たちと気楽な少女時代を送っていた。彼女の人生の転機となったのは、朱雀帝の宣旨による仲忠との結婚である。低い官位の仲忠との結婚について、女一の宮は父帝に捨てられたと感じ、不満を抱いていた。また、彼女は結婚後、夫が心の中であて宮に未練があることにも気付いていた。皇女としての自尊心が傷つけられた女一の宮は、仲忠の過去の恋情に執着し、妻や母としての身分にそぐわない行動を取るようになった。やがて、彼女は頻繁に結婚前の「昔」の時間に憧れるようになり、現実を逃避しようとするに至った。高貴な身分を持つ皇女でありながら、依然として自身の願望に基づいて人生の選択ができず、望まない結婚生活を強いられている。この状況から、皇女より低い身分の同時代の他の女性たちが直面する困難と苦労は一層過酷であることが推測される。

平安時代の家父長制社会において、貴族女性の多くは名前を残さず、家族の記録に「女」とのみ記されている。氏族や家族といった帰属集団との関係性の中で生きる女性は、これらの集団の付属

物のように扱われるが、家族から課された制度的な役割に対して従順にも反発的にも多様な生き方を見せている。そのような女性の姿が『うつほ物語』には投影されている。本稿は俊蔭女、あて宮、女一の宮、後の宮、宰相の上という五人の女性登場人物に着目し、氏族や家族といった帰属集団における女性の位置づけを考察したうえで、彼女たちの内面的な思考や感情を読み解いてきた。更にまた、女性登場人物の個としての内面や行動が氏族や家族との関係においていかなる葛藤を抱え、その結果として、個々の女性登場人物がいかに物語の構造に組み込まれているのかについても考察を展開した。

2、表現によって登場人物の個人的な内面を見出す可能性

前節では氏族や家族といった帰属集団との関係性の中で生きる五人の女性登場人物の在りようを確認し、物語の女性像に着目する意義を述べた。女性キャラクターの造形を考察するにあたって、本稿が注目したのは女性登場人物にまつわる個々の表現である。そういった表現を通して、登場人物の個人としての私的な側面が浮かび上がってくるのである。つまり、表現こそが本稿の考察対象となる登場人物の内面の感情を読み解く鍵となる。表現において、従来は見過ごされてきたキャラクターの個としての内面が見えているのである。以下に、本稿が表現によって登場人物の個人的な内面を見出したプロセスを確認しておこう。

第一章「琴曲に巻き込まれる朱雀帝―「私の后」を端緒に―」では、「私の后」という表現に注目した。「内侍のかみ」巻で、俊蔭女の琴の演奏「胡笳の手ども」に感動した朱雀帝が彼女を尚侍に任命したうえで、更に「私の后」として位置づける。この表現からは、俊蔭女を個人的な偏愛の対象として処遇しようとする朱雀帝の意向が窺える。この表現を契機として、「帝が后を手放す」という構造が『うつほ物語』の文脈にも組み込まれてくることを明らかにした。

第二章「「内侍のかみ」巻におけるあて宮の人間化―「高麗」が切り拓く異世界を発端として―」では、「高麗」という表現に注目した。この表現を契機として、あて宮は一人の女性として仲忠に対して恋愛感情が芽生え、真の意味での人間としての成長を遂げていく。本稿では、この表現について、あて宮の人間化という観点から論じた。

第三章「昔に引きこもる女一の宮―古歌「むかしを今に」の引用による時間の遡行―」では、結婚後の女一の宮の言辞において、「昔」に関する話題が頻出する点に注目した。なかでも、特に「むかしを今に」という『伊勢物語』の古歌の一節が引用される点を問題とした。女一の宮はこの古歌を通じて、自分の時間を遡行したいという願望を示しているだけでなく、あて宮とともに理想化された「昔」を再現しようとしていることを論じた。

第四章「立坊争いにおける藤原氏の敗北―「盗人」に見られる後の宮の嫉妬心を手掛かりに―」では、後の宮の罵詈雑言に含まれる「盗人」という表現に注目した。この表現の使用は、発話者の夫からの愛情や関心が奪われた怨念や嫉妬心が示された。このことを踏まえ、「盗人」という表現により、藤原氏からの立坊という大義名分の裏に隠された後の宮の内面の感情を見出した。更に、後の宮の愛情的な嫉妬心が藤原氏の敗北に関与する一要素となる可能性を提示した。

第五章『うつほ物語』における擬似的な「はらから」考—女性間の問題を中心に—では、「はらから」という表現に注目した。「はらから」という表現には血縁関係にある兄弟姉妹という意味が含まれるが、俊蔭女が夫兼雅の妻妾の一人である宰相の上という女性に擬似的な「はらから」の関係を求めようとしている。本稿では、血縁の薄く、母子で流離の苦難を味わった俊蔭女の、女性同士との心の繋がりを求める欲求を見出した。

以上に見てきたように、物語に描かれる登場人物は単に氏族・家族といった帰属集団に課された制度的な役割を果たすものとしてあるわけではなく、一個人としての私的な思考や感情を持っている人間的な存在であることが明らかになった。

なお、今後の展望としては、一つには、本稿で扱えなかった他の個性的な女性登場人物や男性登場人物の個人的な内面に関する考察が残されており、もう一つには、平安時代に和文で書かれた他の物語作品を対象に、そこに描かれている女性登場人物にまつわる表現に焦点を当て、更に多様な女性の在りようを探究する余地が残されていると考えている。このような展望を最後に提示することで、本稿の結びとしたい。

参考文献一覧

序章

- * 鈴木日出男・藤井貞和編「長編の出現—宇津保物語」(『日本文芸史：表現の流れ』第二巻 古代Ⅱ、1986年)
- * 江戸英雄・大井田晴彦・三上満「うつほ物語卷々論(梗概付)第一部～第三部」(『伊勢物語とうつほ物語 国文学解釈と教材の研究』、第43巻第2号、1998年2月)
- * 中野幸一「うつほ物語と源氏物語」(『伊勢物語とうつほ物語 国文学解釈と教材の研究』、第43巻第2号、1998年2月)
- * 高橋亨「うつほ物語の琴の追跡、音楽の物語」(『伊勢物語とうつほ物語 国文学解釈と教材の研究』、第43巻第2号、1998年2月)
- * 室城秀之『うつほ物語の表現と論理』(若草書房、1996年12月)
- * 富澤萌未『うつほ物語—子ども流離譚』(翰林書房、2021年3月)
- * 日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 平安朝物語Ⅱ』(有精堂、1979年5月)
- * 中嶋尚『平安中期物語文学研究』(笠間書院、1996年9月)
- * 高橋亨「宇津保物語—はじまりの世界の想像力」(『物語文芸の表現史』第二章神話から物語文芸へ、名古屋大学出版会、1988年10月)
- * 三田村雅子「宇津保物語の論理—祝祭の時間と日常の時間」(中古文学研究会編『論集中古文学2 初期物語文学の意識』、笠間書院、1979年5月)
- * 大井田晴彦『うつほ物語の世界』(風間書房、2002年12月)
- * 本宮洋幸『うつほ物語の長編力』(新典社、2019年3月)
- * 栗本賀世子『平安朝物語の後宮空間—宇津保物語から源氏物語へ』(武蔵野書院、2014年4月)
- * 伊藤禎子『「うつほ物語」と転倒させる快楽』(森話社、2011年5月)
- * 勝亦志織『平安朝文学における語りと書記—歌物語・うつほ物語・枕草子から—』(武蔵野書院、2023年3月)
- * 猪川優子「『うつほ物語』俊蔭女の〈尚侍物語〉—仲忠への女—宮降嫁からいぬ宮入内へ」(『国語と国文学』、第80巻第7号、2003年7月)
- * 上杉香菜「『うつほ物語』後の宮考—国母と撰関家—」(『広島大学国語教育会 国語教育研究』、第50号、2009年3月)

第一章

- * 加納重文「尚侍」(『平安文学の環境—後宮・俗信・地理—』、和泉書院、2008年5月)
- * 後藤祥子「尚侍攷—朧月夜と玉鬘」(『源氏物語の史的空間』、東京大学出版会、1986年2月)

- * 須見明代「宇津保物語・初秋の巻について」（物語研究会での発表、1972年12月）
- * 高橋亨「長編物語の構成力—宇津保物語「初秋」の位相」（『物語と絵の遠近法』、ぺりかん社、1991年）
- * 大井田晴彦「『うつほ物語』の転換点—「内侍督」の主題と方法」（『国語と国文学』、第76巻第6号、1999年6月）
- * 室城秀之「作者未詳 宇津保物語の〈俊蔭女〉—琴の家の巫女（古典の中の女・100人〈特集〉）」（『国文学：解釈と教材の研究』、學燈社、第27巻第13号、1982年）
- * 伊勢光「『うつほ物語』「内侍のかみ」巻における帝：「内侍のかみ」巻再考」（『学習院大学大学院日本語日本文学』、第9巻、2013年）
- * 猪川優子「『うつほ物語』俊蔭女の〈尚侍物語〉—仲忠への女—宮降嫁からいぬ宮入内へ」（『国語と国文学』、第80巻第7号、2003年7月）
- * 山口一樹「『うつほ物語』俊蔭女の尚侍就任と王昭君説話・長恨歌・竹取物語」（『東京大学国文学論集』、第14巻、2019年）
- * 『折口信夫全集』第16巻（中央公論社、1967年）
- * 『日本史辞典』（岩波書店、1999年10月）
- * 網野善彦・上野千鶴子・宮田登『日本王権論』（春秋社、1988年）
- * 猪川優子「『うつほ物語』俊蔭の「忍辱」：琴の一族と皇室」（『国文学攷』、第170巻、2001年6月）
- * 三田村雅子「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉—繰り返しの方法をめぐって—」（『東横国文学』、第15号、1983年）
- * 上原作和「琴曲「胡笳」と王昭君説話の複次的統合の方法について—『うつほ物語比較文学論断章（1）』—」（『光源氏物語の思想史的変貌—〈琴〉のゆくへ』、有精堂、1994年）

第二章

- * 室城秀之「序章 うつほ物語研究の現在の課題」（『うつほ物語の表現と論理』若草書房、1996年12月）
- * 高橋亨「長編物語の構成力—宇津保物語「初秋」の位相」（『物語と絵の遠近法』ぺりかん社、1991年9月）
- * 関根賢司「かぐや姫とその裔（〈特集〉平安前期物語）」（『日本文学』、第23巻第6号、1974年）
- * 須見明代「『宇津保物語』における俊蔭女」（『東京女子大学 日本文学』、第39号、1973年）
- * 室城秀之「『うつほ物語』におけるあて宮—「宮仕へ心行く」とは、何をか言ひけむ」〈宮中への流離〉」（『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月）
- * 大井田晴彦「『うつほ物語』国譲巻の主題と方法—仲忠を軸として」（『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月）
- * 湯浅幸代「『うつほ物語』国譲巻に見る氏族の論理：「かぐや姫」の見定める「心ざし」と『九

条右丞相遺誠』の「一心同志」から」(『日本文学』、第66巻第2号、2017年2月)

- * 勝亦志織 「『うつほ物語』における音楽性とエクリチュール—「語り手」の存在と「会話文」「絵解」」(『平安朝文学における語りと書記(エクリチュール)—歌物語・うつほ物語・枕草子から』、武蔵野書院、2023年3月)
- * 伊藤禎子 「祝祭物語論」(『「うつほ物語」と転倒させる快樂』、森話社、2011年5月)
- * 須見明代 「宇津保物語・初秋の巻について」(物語研究会での発表、1972年12月)
- * 大井田晴彦 「『うつほ物語』の転換点—「内侍督」の親和力—」(『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月)
- * 陣野英則 「渤海使と平安朝文学—『うつほ物語』の「高麗人」と「おほやけ」」(『国文学：解釈と鑑賞』、第76巻第8号、2011年8月)
- * 根本智治 「内侍督の世界：前半部の会話の論理」(『講座平安文学論究 第十二輯』、風間書房、1997年9月)
- * 竹原崇雄 「宇津保物語「内侍のかみ」における物語的世界の構造：稲賀氏のクイズ的享受法による解明」(『国語と国文学』、第60巻第4号、1983年)
- * 秋山虔 「源氏物語の和歌をめぐって」(『王朝の文学空間』、東京大学出版会、1984年)
- * 坂本信道 「仲忠・あて宮・女一宮—「うつほ物語」栄華の方法と論理」(『女子大国文』、第113巻、1993年6月)
- * 大井田晴彦 「仲忠と藤壺の明暗—「蔵開」の主題と方法」(『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月)

第三章

- * 勝亦志織 「『うつほ物語』の女一宮論：皇女の婚姻の意味するもの」(『学習院大学人文科学研究 所 人文』、第7号、2009年3月)
- * 本宮洋幸 「仲忠の内親王獲得—祐澄との明暗—」(『うつほ物語の長編力』、新典社、2019年3月)
- * 戸田瞳 「『うつほ物語』における「代はり」の結婚：疎外される女一の宮」(『国語国文研究』、第156号、2021年2月)
- * 西山登喜 「『うつほ物語』宮の君の登場理由：女一宮の〈母性〉を問う」(『物語研究』、第7巻、2007年)
- * 富澤萌未 「いぬ宮の位置づけ：いぬ宮と母女一の宮」(『うつほ物語—子ども流離譚』、翰林書房、2021年3月)
- * 本宮洋幸 「語りの堆積と対峙する時間」(『うつほ物語の長編力』、新典社、2019年3月)
- * 三田村雅子 「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉—繰り返しの方法をめぐって—」(『東横国文学』、第15号、1983年)
- * 猪川優子 「『うつほ物語』俊蔭女の〈尚侍物語〉—仲忠への女一宮降嫁からいぬ宮入内へ」(『国語と国文学』、第80巻第7号、2003年7月)

- * 大井田晴彦「仲忠と藤壺の明暗―「蔵開」の主題と方法」(『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月)
- * 池田亀鑑「評釈篇」(『伊勢物語精講』、學燈社、1956年9月)
- * 竹岡正夫『伊勢物語全評訳』(右文書院、1987年)
- * 新井無二郎『釈評 伊勢物語大成』(湯川弘文社、1966年)
- * 大井田晴彦「『うつほ物語』の転換点―「内侍督」の主題と方法」(『うつほ物語』の転換点―「内侍督」の親和力―『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月)

第四章

- * 室城秀之「うつほ物語と源氏物語」(『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月)
- * 湯浅幸代「『うつほ物語』国譲巻に見る氏族の論理：「かぐや姫」の見定める「心ざし」と『九条右丞相遺誡』の「一心同志」から」(『日本文学』、第66巻第2号、2017年2月)
- * 大井田晴彦「「国譲」巻の主題と方法―仲忠を軸として―」(『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月)
- * 上杉香菜「『うつほ物語』後の宮考―国母と撰関家―」(『広島大学国語教育会 国語教育研究』、第50号、2009年3月)
- * 沼尻利通「物語の国母―『うつほ物語』『源氏物語』を中心に」(『日本文学』、第51巻第9号、2002年9月)
- * 内藤英子「後の宮の造型―『うつほ物語』から『源氏物語』へ」(『古代文学研究 第二次』、第17号、2008年10月)
- * 新里千佳「後の宮、「悪女」という造形の偽装」(『うつほ物語―国譲巻の世界』、武蔵野書院、2021年11月)
- * 神谷正彦「『宇津保物語』『後の宮』考」(『源氏物語の内と外』、風間書房、1987年11月)
- * 三上満「宇津保物語「国譲」の巻の方法と構造」(『日本文学』、第36巻第11号、1987年)
- * 室城秀之「あて宮春宮入内決定の論理」(『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月)

第五章

- * 大井田晴彦「〈女はらから〉の物語史」(『名古屋大学文学部研究論集 文学』、第61号、2015年3月)
- * 竹田裕子「「はらから」に見られる人の結びつきに関する一考察：『うつほ物語』を中心に」(『武蔵文化論叢』、第15号、2015年3月)
- * 室城秀之「『うつほ物語』の親族関係表現について―「親方」「親にす」「子にす」「親子の契り」「はらからの契り」―」(『講座平安文学論究 第十二輯』、風間書房、1997年9月)
- * 小野寺拓也「『うつほ物語』の東宮・帝と男君たち：「はらからの契り」を端緒として」(『平安朝

文学研究』、第27号、2019年3月)

- * 助川幸逸郎「宇治大君と〈女一宮〉—〈妹恋〉の論理を手がかりとして—」(『中古文学』、第61巻、1998年)
- * 有馬義貴「『源氏物語』「宇治十帖」の〈はらから〉：薫と浮舟の問題を中心に」(『日本文学』、第58巻第12号、2009年)
- * 富澤萌未「父に忘れられる子ども——仲忠の流離」(『うつほ物語—子ども流離譚』、翰林書房、2021年3月)
- * 大井田晴彦「附篇『うつほ物語』の言葉と思想」(『うつほ物語の世界』、風間書房、2002年12月)
- * 本宮洋幸「仲忠の継承者たち」(『うつほ物語の長編力』、新典社、2019年3月)
- * 島田和枝「『うつほ物語』の琵琶」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』、第1号、1998年3月)
- * 高野英夫「『うつほ物語』宰相の君母子の物語の意味—楼の上上巻冒頭部を中心にして」(早稲田大学大学院中古文学研究会編『源氏物語と王朝世界 中古文学論攷』、第20号、武蔵野書院、2000年)
- * 戸田瞳「『うつほ物語』俊蔭一族と宰相の上親子の織りなす血縁の世界—〈縦の繋がり〉と〈横の繋がり〉の絡み合い—」(『古代中世文学論考』、第23号、2009年10月)
- * 猪川優子「『うつほ物語』の〈秘琴〉と〈あて宮〉：「繋がり」の形成をめぐる」(『古代中世国文学』、第9号、1997年3月)
- * 猪川優子「『うつほ物語』における俊蔭女之美：「横の繋がり」との関わりを中心に」(『古代中世国文学』、第13号、1999年7月)
- * 室城秀之「あて宮東宮入内決定の論理」(『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月)
- * 室城秀之「藤壺腹皇子立坊決定の論理」(『うつほ物語の表現と論理』、若草書房、1996年12月)